細谷（ほそや）Ｂ遺跡（いせき）

目　　次

Ⅰ　調査の方法と経過 ……39
Ⅱ　発見された遺構と遺物 ……43
Ⅲ　考察 ……74
Ⅳ　まとめ ……77
写真図版

調　査　要　項

遺 跡 名：細谷B遺跡（ほそやBいせき）（宮城県遺跡地名表記載番号：70028）
遺跡記号：SP
所 在 地：宮城県石巻市桃生町太田字細谷
調査原因：三陸縦貫自動車道建設
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調査期間・面積：
　確認調査　平成15年（2003）3月17日～19日
　対象面積　10,000㎡　　調査面積　300㎡
　事前調査　平成15年（2003）11月12日～12月11日
　対象面積　900㎡　　調査面積　900㎡
調 査 員：確認調査　相原淳一・須田良平・奥山芳明
　事前調査　相原淳一・佐久間光平・岩見和泰・奥山芳明・三好秀樹・白崎恵介

Ⅰ　調査の経過と方法

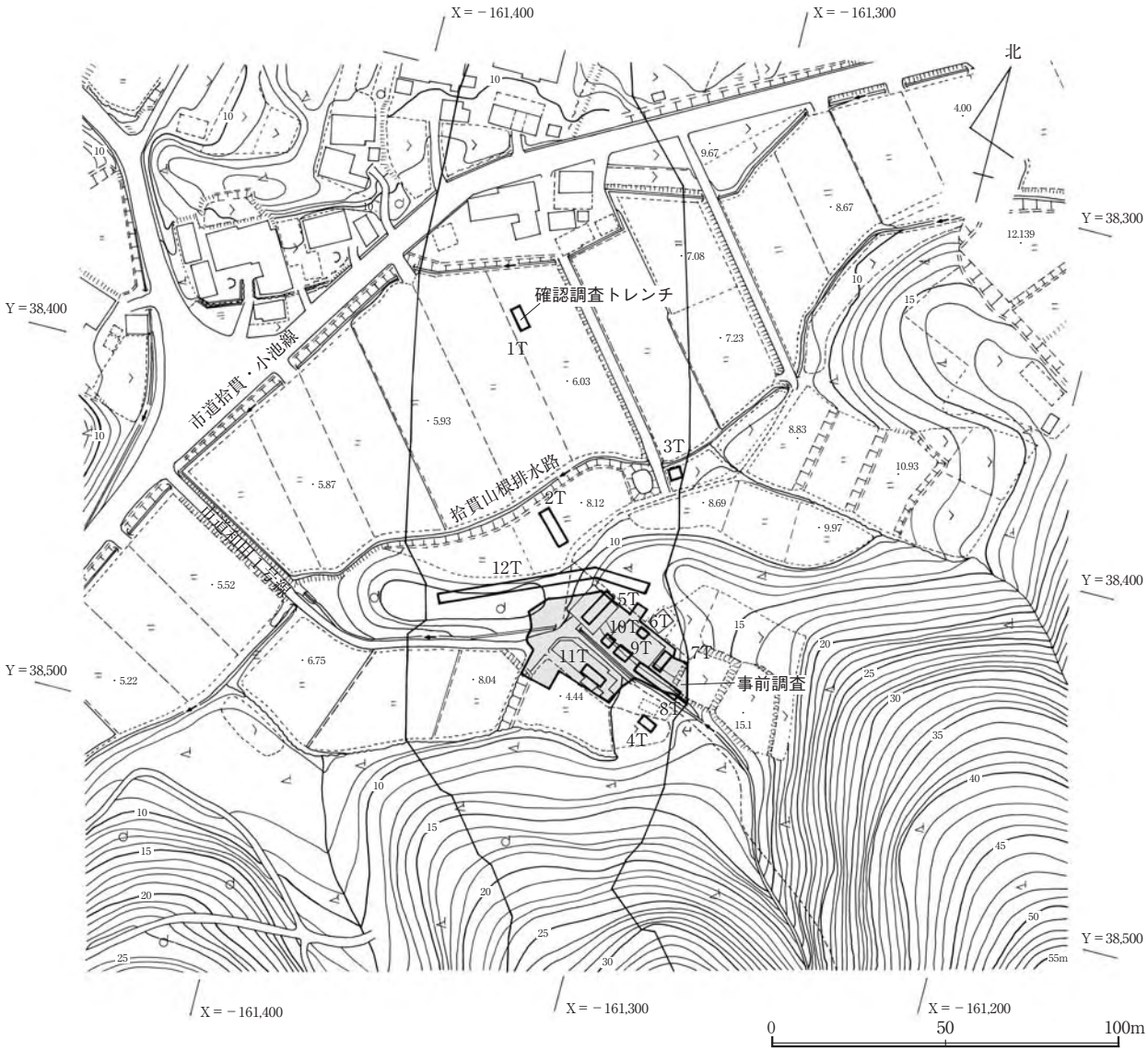
調査の経過

本遺跡は三陸縦貫自動車道建設に先立つ分布調査によって発見され、平成４年に新規に登録された。その後、平成14年度に発掘調査の係る現地協議を行い、その結果に基いて遺跡の範囲と遺構の密度を確めるため、遺物の散布が認められた宅地部分と周辺の沖積地を対象として平成15年３月17日から19日まで確認調査を行った。調査は幅２ｍで、任意の長さのトレンチを12本設定した（第１図）。

水田などの沖積地には１Ｔ～４Ｔを設定した。いずれの調査区でも層序は表土下に黒褐色土層、灰白色火山灰層、スクモ混じりの暗褐色土層と共通していることを確認したが、遺物・遺構は全く発見されなかった。このため、沖積地は今回の発掘調査対象から除外することにした。

宅地部分には、５Ｔ～11Tの７本の調査区を設定した。建物基礎による著しい攪乱によって壊されてはいるものの、多数の柱穴と土器埋設遺構1基、竪穴住居跡の周溝の一部と見られる小溝跡1条を確認した。大半の柱穴の形状は円形を基調とするもので、中近世以降の掘立柱建物跡と考えられた。その他少量の土師器・須恵器片が出土した。

西側に張り出す標高約10mの舌状小丘陵の尾根筋部分には、12Tを設定した。杉・雑木林の薄い表



第１図　調査区の位置

土を剥ぐと、すぐに地山岩盤が露出し、遺構や遺物は確認することができなかった。すでに旧表土は失われていることが判明したため、丘陵尾根筋部分も調査から除外した。

以上の確認調査の成果を踏まえ、平成15年11月12日から12月11日にかけて事前調査を実施した。調査区内は丘陵斜面にあたるため、以下のような堆積層が認められた（第３図）。

Ⅰ層　表土である。にぶい黄褐色～黄褐色シルト層で、２層に細分される。Ⅱ層以下の堆積層とは不整合面をなして堆積している。

Ⅱ層　20cm以上の地山礫を多く含む黄褐色シルト層である。丘陵緩斜面を覆う崖錐性堆積物と考えられる。

Ⅲ層　炭化物を少量含む褐色シルト層である。旧表土である。

Ⅳ層　灰白色火山灰層と、部分的に確認したその上面の炭化物層である。斜面部分では、ブロック状をなし、散漫に分布する。10世紀前葉に降灰した十和田a火山灰層と考えられる。Ⅳ層は宅地部分ではほとんど削平されて残存しないが、沖積地側の確認トレンチ４Ｔでは面的な分布が確認される。

Ⅴ層　炭化物を少量含む褐色シルト層である。

Ⅵ層　炭化物を少量含む暗褐色～黒褐色シルト層である。丘陵下部では、色調でａ・ｂの２層に細分される。

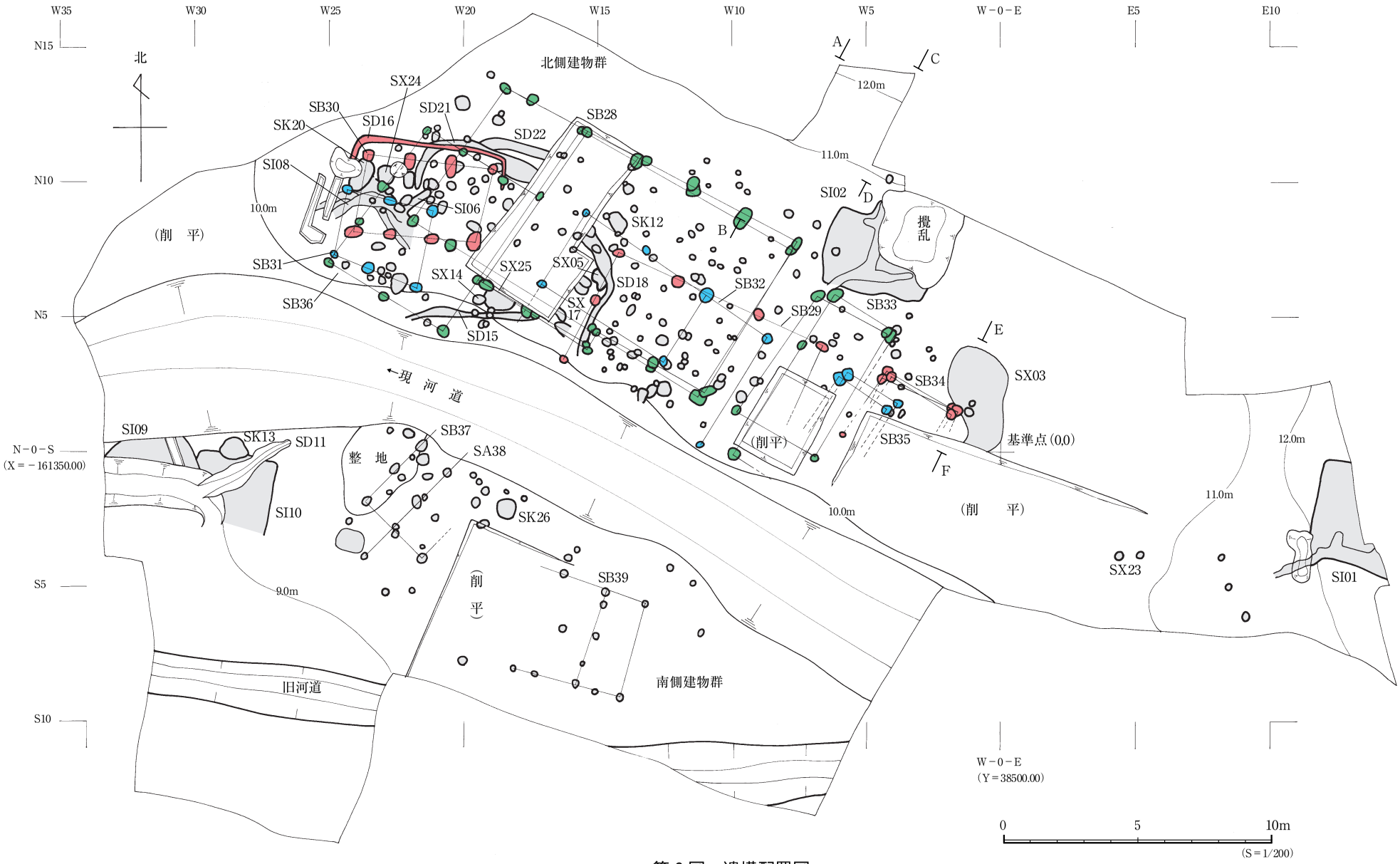
Ⅶ層　褐色～黄褐色に移行するシルト層（９層以下）である。地山岩盤の風化土壌の堆積層で、遺物は含まない。

調査の結果、宅地部分の丘陵南緩斜面で掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土器埋設遺構他を検出（第２図）した。宅地部分の調査であったために、削平･攪乱が著しく、遺構の掘り込み面は必ずしも明らかではないが、掘立柱建物跡の柱穴群がⅤ層を掘り込んでいること、古代の竪穴住居の堆積土をⅤ層が覆っていることを確認している。調査対象面積は宅地部分を中心とした約900ｍである。

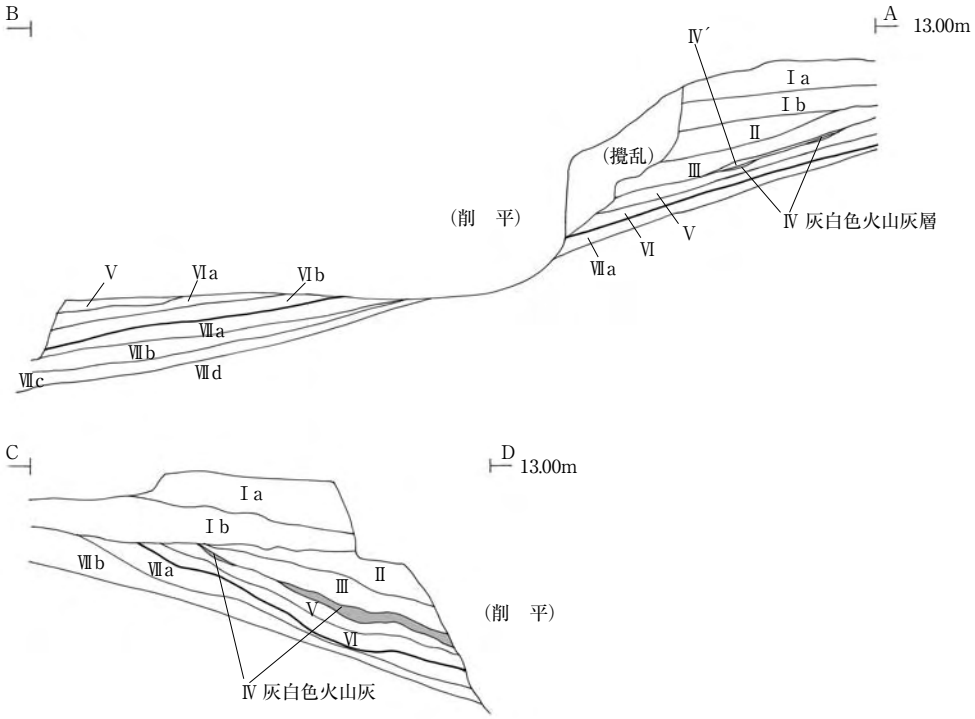
調査の方法

調査は日本測地系の国家座標Ｘ＝－161350.00、Y=38500.00を任意の基準点（0･0）とし、国家座標上に３ｍ×３ｍグリッドを設定して行った。基準点から東に３ｍ、6m、・・・の基準線をE-3、E-6、・・・と呼称し、同様に西に３ｍ、６ｍ、・・・の基準線をW-3、W-6、・・・とした。南北についても同様に、基準点からS-3、S-6、・・・あるいはN-3、N-6、・・・と呼称した。検出した遺構については１/20平面図・断面図を作成した。一部、トータルステーションによって実測した箇所もある。

写真撮影は35mmと6×７のモノクロ・カラーリバーサルおよびデジタルカメラを用いた。

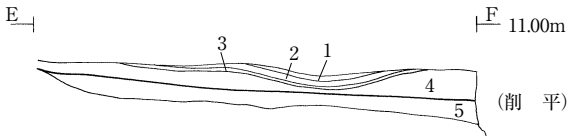

W35
W30
W25
W20
W15
W10
W5
W－0－E
E5
E10
N15
N10
N5
S5
S10
N－0－S
(X＝－161350.00)
W－0－E
(Y＝38500.00)
北
北側建物群
SX24
SB30
SD21
SD16
SK20
SB28
SD22
SI08
SI06
SK12
SX25
SX05
SD18
SB32
SB31
SX14
SB36
SD15
SX17
SB29
SB33
SI02
D
A
C
B
E
F
12.0m
11.0m
10.0m
9.0m
(削　平)
攪乱
(削平)
SX03
SB34
SB35
基準点(0,0)
SX23
SI01
←現 河 道
SI09
SK13
SD11
SI10
整 地
SB37
SA38
SK26
SB39
(削平)
旧河道
南側建物群
0
5
10m
(S＝1/200)

第２図　遺構配置図



番号	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa	褐色（10YR6/4）	シルト	崩れやすい。5mm以下の小礫をごく少量含む。しまりなし。粘性なし。
Ⅰb	にぶい黄褐色（10YR4/4）	シルト	1cm以下の小礫を少量含む。2cm以下の地山礫を少量含む。焼礫1cm以下を少量含む。
Ⅱ	黄褐色（10YR6/5）	シルト	20cm以下の地山礫がほとんど。しまりあり（強）。粘性なし。崖錐性堆積物。
Ⅲ	褐色（10YR4/6）	シルト	炭化物を少量含む。1cm以下の地山礫を含む。5mm以下の焼礫を少量含む。旧表土。
Ⅳ´	黒色（10YR2/1）	炭化物層	炭化物多く含む。しまりなし。粘性なし。散発的に分布。
Ⅳ	灰白色（10YR3/2）	火山灰層	粘性なし。灰白色火山灰層。
Ⅴ	褐色（7.5YR4/4）	シルト	1cm以下の地山礫を多く含む。炭化物・焼礫を含む。古代・縄文両方の遺物含む。
Ⅵ	暗褐色（10YR3/4）	シルト	2cm以下の地山礫を含む。炭化物・焼礫を少量含む。縄文の遺物含む。
Ⅶa	暗褐色（7.5YR3/4）	砂質シルト	20cmの石をやや多く含む。3cm以下の地山礫を少量含む。以下、すべて無遺物層。
Ⅶb	にぶい褐色（7.5YR5/4）	砂質シルト	10cm以下の石をごく少量含む。橙（7.5YR6/6）色のブロックを少量含む。
Ⅶc	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	にぶい黄褐色（10YR4/3）のブロックがまだらに入り込む。2cm以下の地山礫を含む。水の影響あり。
Ⅶd	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	1cm以下の地山礫を多く含む。しまりあり（強）。粘性あり。水の影響あり。

第 3 図　基本層序



番号	土　　色	土　性	備　　考
1	黒色（10YR2/1）	シルト	地山礫を含む。焼土・炭を含む。SX03包含層1層。
2	黒褐色（10YR3/1）	シルト	地山礫を含む。焼土・焼礫を多く含む。SX03包含層2層。
3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山礫を含む。焼土・焼礫を若干含む。SX03包含層3層。
4	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山礫・焼礫を含む。遺物が若干あり。基本層序Ⅵ層。
5	灰黄褐色（10YR4/2）	砂礫	無遺物層。基本層序Ⅶa層。

第 4 図　SX03遺物包含層・基本層序断面図

Ⅱ　発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡６軒、土器埋設遺構１基、墓壙１基、掘立柱建物跡11棟以上、柱列跡１条等である。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、瓦、鉄製品、縄文土器、石器等で、整理用平箱20箱出土した。

ここでは、古代、縄文時代、中近世以降の順で記述する。

A. 古代の遺構と遺物

①　竪穴住居跡

【SI01竪穴住居跡】

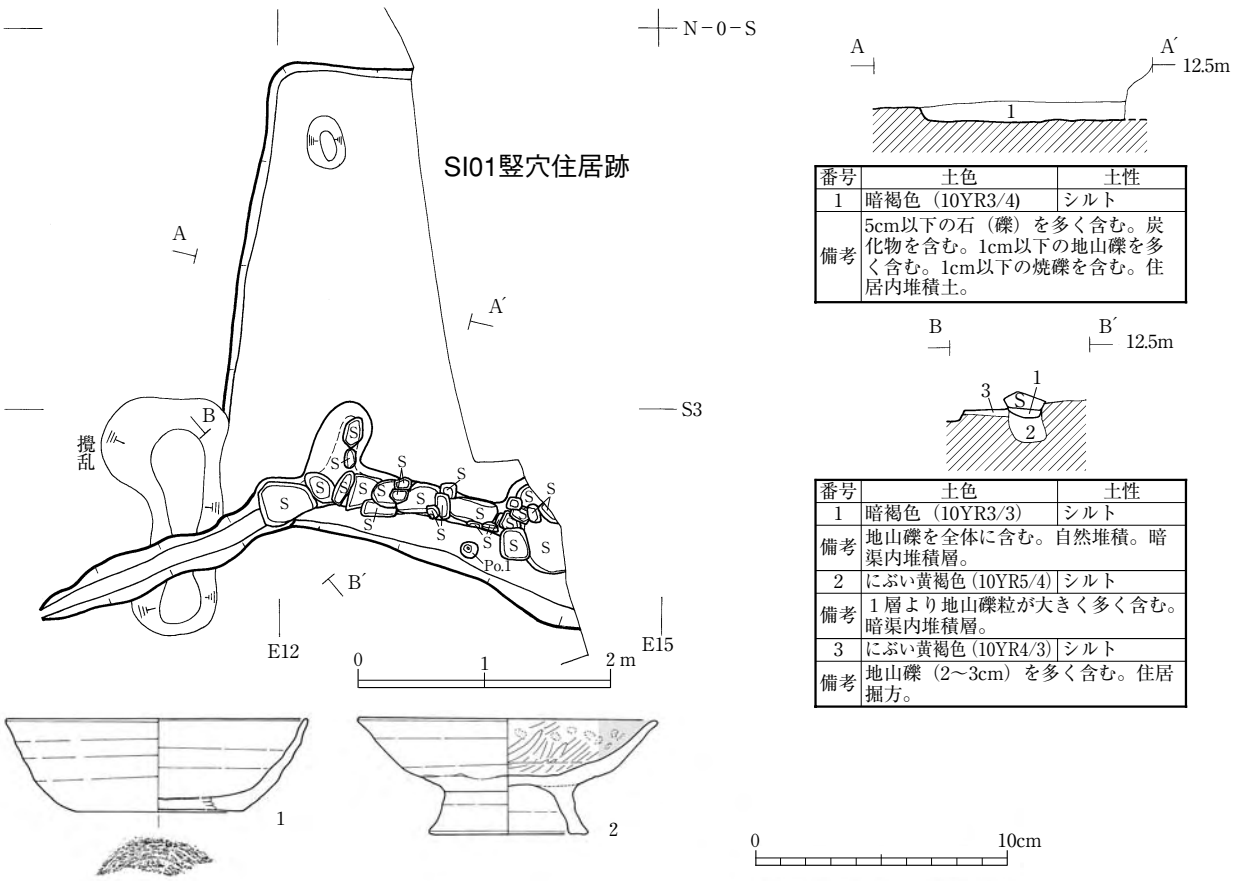
Ｓ－3・Ｅ－13付近の地山で検出され、住居跡の東半分は調査区外である。外延溝を持つ住居跡である。

［平面形・規模］住居跡の東側は調査区外のため全体形は知れないが、隅丸方形ないしは隅丸長方形状を呈するものと推定される。大きさは西辺で3.64m、南辺で3m以上である。

［方向］西辺でＮ－12°－Ｅである。

［堆積土］暗褐色シルトが自然堆積している。

［壁］ほぼ直立し、高さは西辺で約12cm残っている。



番号	土色	土性
1	暗褐色（10YR3/4)	シルト
備考	5cm以下の石（礫）を多く含む。炭化物を含む。1cm以下の地山礫を多く含む。1cm以下の焼礫を含む。住居内堆積土。	

番号	土色	土性
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト
備考	地山礫を全体に含む。自然堆積。暗渠内堆積層。	
2	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト
備考	１層より地山礫粒が大きく多く含む。暗渠内堆積層。	
3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト
備考	地山礫（2～3cm）を多く含む。住居掘方。	

No.	種類	出土遺構・層位	特　　徴	口径	底径	器高	写真図版
1	赤焼土器・坏	SI01・暗渠内堆積土	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。底面：回転糸切り無調整。胎土：やや軟質。摩滅。	(12.0)	(6.5)	3.8	6－1
2	土師器・高台坏	SI01・床面po.1	外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理、ハジケ痕。炭化物付着。付け高台。	12.0	6.3	4.7	6－2

第５図　SI01竪穴住居跡・出土遺物

［床面］ほぼ平坦である。斜面下部の南壁寄りの部分には、掘方が認められ、掘方埋土を床面としている。

［主柱穴・カマド・周溝・貯蔵穴］検出されなかった。

［外延溝～暗渠］住居南西隅から斜面下方にあたる西南西に外延溝が延びている。住居内では一部、二又に分かれ、主となる溝は南壁にほぼ平行して設けられ、扁平な礫を蓋石とした暗渠状の施設となっていた。溝内の堆積土は暗褐色シルトの自然堆積である。

［出土遺物］ロクロ調整の土師器高台坏１点が伏せた状態で、南壁寄りの暗渠南側床面から出土した。器内面には火ハジケと見られる小剥落が全体を覆い、斑状に炭化物の付着する箇所も認められる。このほか、暗渠内堆積土から赤焼土器坏破片が出土している。

【SI02竪穴住居跡】

Ｎ－７・Ｗ－５付近の地山で検出された。堆積層の状況から焼失住居と考えられた。

［平面形・規模］東西4.2m、南北2.8mの隅丸長方形である。

［方向］西辺でＮ－23°－Ｅである。

［堆積土］堆積層は２層に分けられ、上層は褐色シルトの自然堆積層、下層は焼土・焼礫・炭化物を非常に多く含む暗赤褐色シルト層である。さらに全体を古代・縄文時代の遺物が混じるＶ層が覆っている。

［壁］ほぼ直立し、高さは西辺で約10cm残っている。

［床面］ほぼ平坦である。掘方埋土を床面としている。

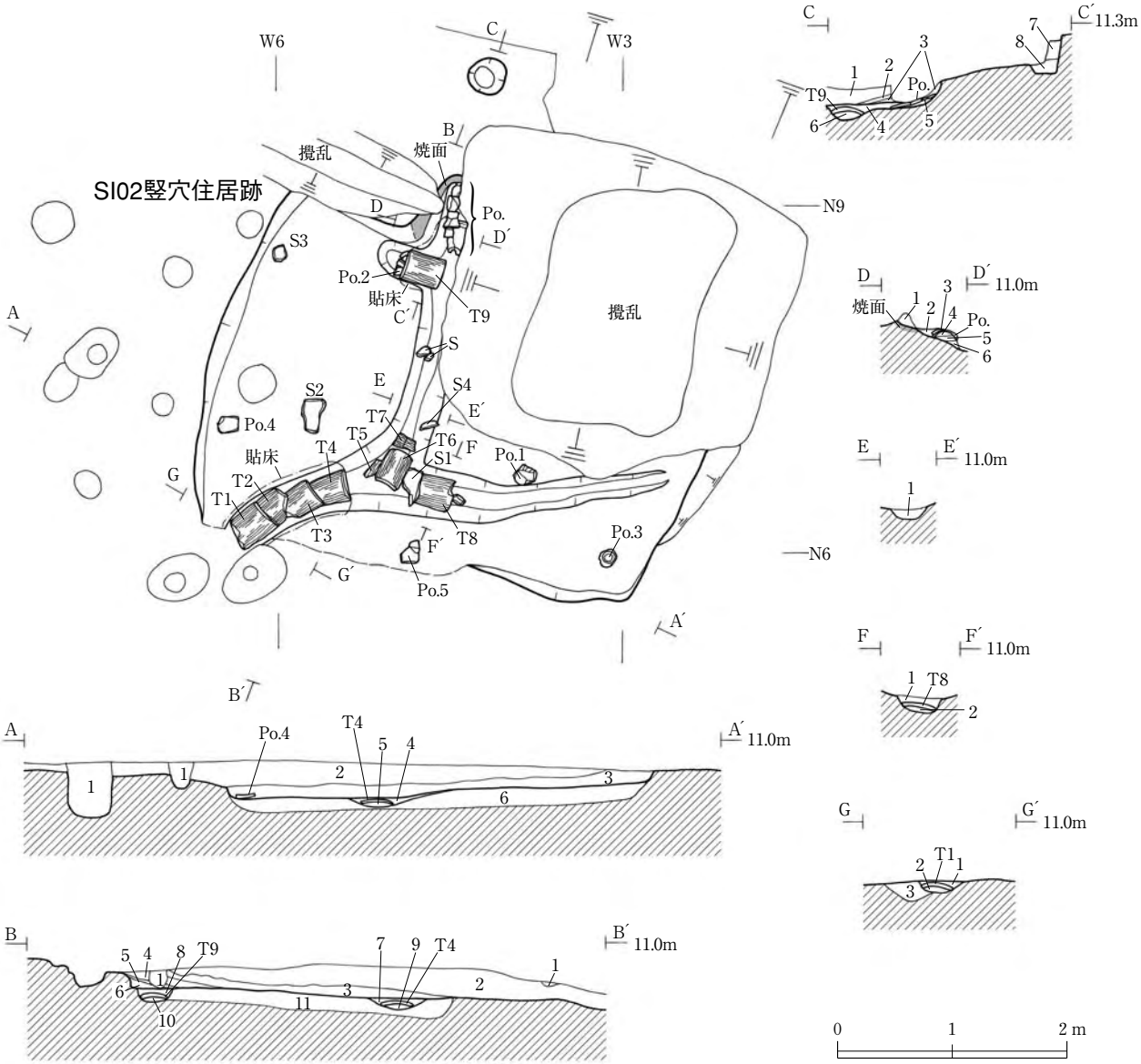
［主柱穴］検出されなかった。

［カマド］北辺西寄りに設けられている。全体的に攪乱が著しく、残存状況は良好ではない。煙出ピット、カマド本体の西側部分、暗渠施設が残存している。カマド本体は北辺から58cmほど突出するように作られている。奥壁～左側壁の内面に顕著な焼面が認められた。東側壁は攪乱で完全に破壊されていた。

カマド奥壁から74cmのところで、煙出ピットが検出された。煙出ピットは32～28cmの楕円形を呈し、深さ36cmである。堆積土は自然堆積の褐色･暗褐色土で炭化物・焼礫を含んでいる。

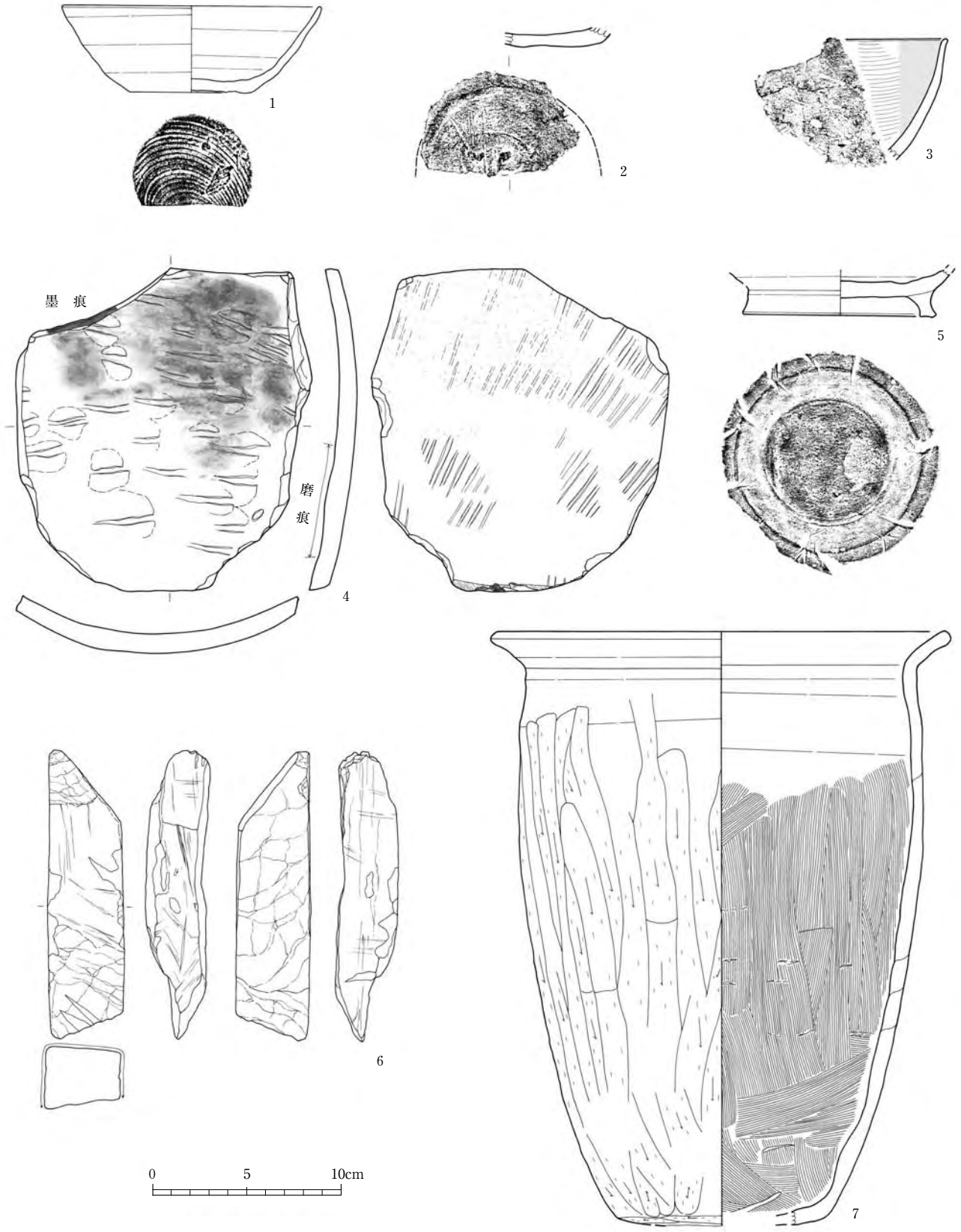
［暗渠施設］カマドから延びる暗渠施設と住居東側から延びる暗渠施設とが合流し、住居南西隅寄りの方向に延びていく。暗渠の出口部分には、貼床と貼床下の蓋石状に並べた平瓦Ｔ１～４が検出された。暗渠の合流部分は粘板岩の平石と平瓦が蓋石状に配されていた。この部分では貼床は認められず、焼失の際の火を直接受けた平瓦が検出された。暗渠内の堆積土は焼土・炭化物を多量に含む暗褐色シルトの自然堆積で、蓋状の施設の検出されない部分においても同様の堆積状況であった。こうした部分では火を受けた礫が斜めに落ち込んでいる様子が観察され、暗渠が開口していたか、木質の蓋が焼失した可能性が考えられた。

カマドから延びる暗渠施設は、土師器甕大破片をドーム状に並べた燃焼部底面、及び平瓦を用いた焚口部分で認められ、その上にはともに黄褐色粘土が貼られていた。暗渠内堆積土は焼土・炭化物を多く含む暗赤褐色シルトの自然堆積土である。



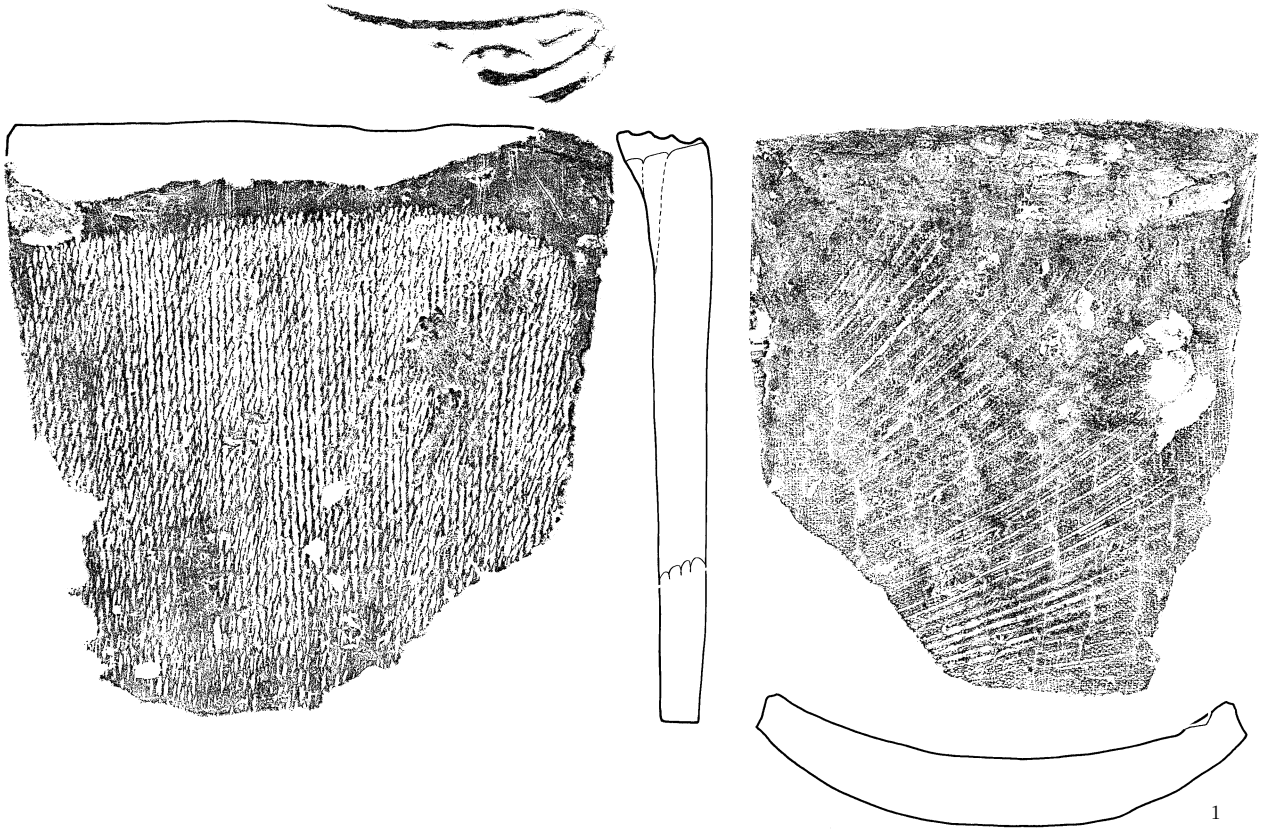
番号	土　色	土　性	備　考	
1	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	焼礫（5mm以下）を少量含む。しまりあり。柱穴埋土。	A－A´、B－B´断面
2	褐色（7.5YR4/4）	砂質シルト	凝灰岩粒～地山小礫1cm以下を多量に含む。焼礫・炭化物粒を若干含む。基本層序Ⅴ層。	
3	褐色（10YR4/4）	砂質シルト	やや暗く、灰色味あり。下部に多量の焼土・焼礫・炭化物を含む。住居内堆積土。	
4	褐色（7.5YR4/3）	シルト	凝灰岩粒を多量に含む。焼礫3mmを若干含む。下部に焼土多く含む。カマド崩壊土。	
5	黒色（7.5YR2/1）	炭化物	炭化物層。カマド内堆積層。	
6	にぶい赤褐色（5YR4/4）	シルト	焼土・炭化物を多く含む。カマド内堆積土。	
7	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘質シルト	黄褐色粘質シルトブロック（地山）をやや多く含む。凝灰岩粒（5mm以下）もやや多い。貼床。	
8	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘質シルト	黄褐色粘質シルトブロック（地山）をやや多く含む。凝灰岩粒（5mm以下）もやや多い。貼床。	
9	暗赤褐色（2.5YR3/4）	シルト	焼土粒（5mm以下）・炭化物粒（3mm以下）を多く含む。しまりなし。暗渠内自然堆積。	
10	暗赤褐色（2.5YR3/4）	シルト	焼土粒（5mm以下）・炭化物粒（3mm以下）を多く含む。しまりなし。暗渠内自然堆積。	
11	褐色（10YR4/6）	シルト	礫を多量に含む。住居掘方。	
1	褐色（7.5YR4/3）	シルト	地山角礫多く含む。炭化物を少量含む。焼礫・焼礫をやや多く含む。下部に焼土あり。カマド崩壊土。	C－C´断面
2	黒色（7.5YR2/1）	炭化物	上部に焼土若干あり。カマド内堆積層。	
3	にぶい黄褐色（5YR4/4）	シルト	地山角礫含む。炭化物を含む。焼土を多く含む。しまりあり。粘性なし。カマド内堆積土。	
4	赤褐色（5YR4/8）	砂質シルト	焼土を多く含む。しまりなし。粘性あまりなし。カマド内堆積土。	
5	褐色（7.5YR4/3）	シルト	地山小礫・焼礫・炭化物を含む。粘性なし。暗渠内堆積土。自然堆積。	
6	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山小礫・焼礫・炭化物を含む。粘性なし。暗渠内堆積土。自然堆積。	
7	褐色（7.5YR4/3）	シルト	地山粒・焼土粒・焼礫を含む。煙出ピット。自然堆積。	
8	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山粒・焼土粒・焼礫を含む。煙出ピット。自然堆積。	
1	暗赤褐色（10YR3/3）	シルト	焼土粒・炭粒を含む。カマド内堆積土。底面は焼面。	D－D´断面
2	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	暗渠を埋め戻した貼床。	
3	褐色（10YR4/4）	シルト	やわらかい。土師器甕の暗渠直下土。自然堆積。	
4	暗赤褐色（10YR3/3）	シルト	木炭片・焼土を含む。暗渠内堆積土。自然堆積。	
5	黒褐色（5YR2/2）	シルト	木炭を多く含む。暗渠内堆積土。自然堆積。	
6	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	小礫含む。暗渠の土師器据方。	
1	暗赤褐色（2.5YR3/4）	シルト	焼土・炭を多く含む。しまりなし。自然堆積。	E－E´断面
1	暗赤褐色（2.5YR3/4）	シルト	焼土・炭を多く含む。自然堆積。	F－F´断面
2	暗赤褐色（10YR3/3）	シルト	木炭片・焼土を含む。暗渠内堆積土。	
1	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	小礫含む。暗渠瓦上部の貼床。	G－G´断面
2	暗赤褐色（2.5YR3/4）	シルト	焼土・炭を多く含む。しまりなし。暗渠内自然堆積土。	
3	褐色（10YR4/6）	シルト	地山礫を多く含む。住居掘方。	

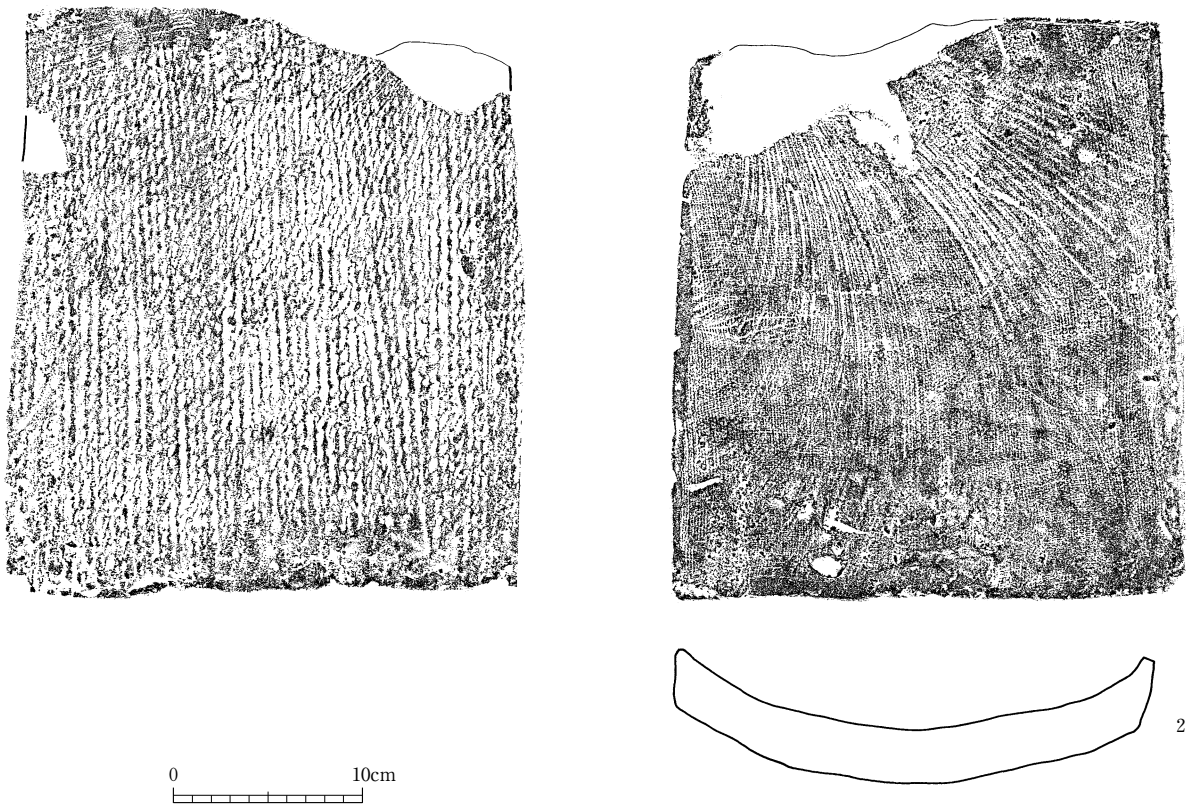
第 6 図　SI02竪穴住居跡



No.	種　　類	出土遺構・層位	特　　徴	口径	底径	器高	写真図版
1	須恵器・坏	SI02・堆積土	外面：ロクロナデ。内面→ロクロナデ。底面：回転糸切り無調整。残1/3。	(13.8)	(6.4)	4.7	6－3
2	須恵器・坏	SI02・堆積土	外面：ロクロナデ。内面→ロクロナデ。底面：回転ヘラ切り。残1/4。	-	(10.0)	-	6－4
3	土師器・坏	SI02・床面	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理（一部被熱による色ヌケ）。	-	-	-	6－6
4	須恵器・ 転用硯	SI02・床面po.4	須恵器甕（外面：平行タタキ→ヘラケズリ（下部）。内面：アテ具痕→ナデ。）破片からの転用硯（縁辺に敲打痕・擦痕）内面に墨痕と磨耗箇所。割れ口に墨痕。外面にスレ痕。被熱？	長18.0、幅15.7、厚0.9			6－5
5	須恵器・壷	SI02・床面po.3	外面：ロクロナデ。内面→ロクロナデ（粗い）。底面：回転ヘラ切り→付け高台（ロクロナデ）。被熱。	-	10.3	-	6－7
	須恵器・甕	SI02・床面po. 1	被熱による赤変顕著。	-	-	-	6－8
	須恵器・甕	SI02・床面po.5	被熱による赤変顕著。写真図版6－8と同一個体か。	-	-	-	6－9
6	砥石	SI02・床面Ｓ4	擦痕。砂岩。	長15.4、幅4.0、厚3.3			6－10
7	土師器・甕	SI02・カマド部暗渠	外面：ロクロナデ→ヘラケズリ。内面：ロクロナデ→ヘラナデ・ナデ。底面：ヘラケズリ。	(24.6)	(11.2)	31.8	7 － 1
	土師器・甕	SI02・カマド部暗渠	外面：ロクロナデ→ヘラケズリ。内面：ロクロナデ→ナデ（縦）。摩滅。	-	-	-	7－2
	土師器・甕	SI02・カマド部暗渠	口縁端部：凹線状。外面：外面：ロクロナデ→ヘラケズリ。内面：ロクロナデ→ナデ（縦）→ナデ（横）	-	-	-	7－･3･4

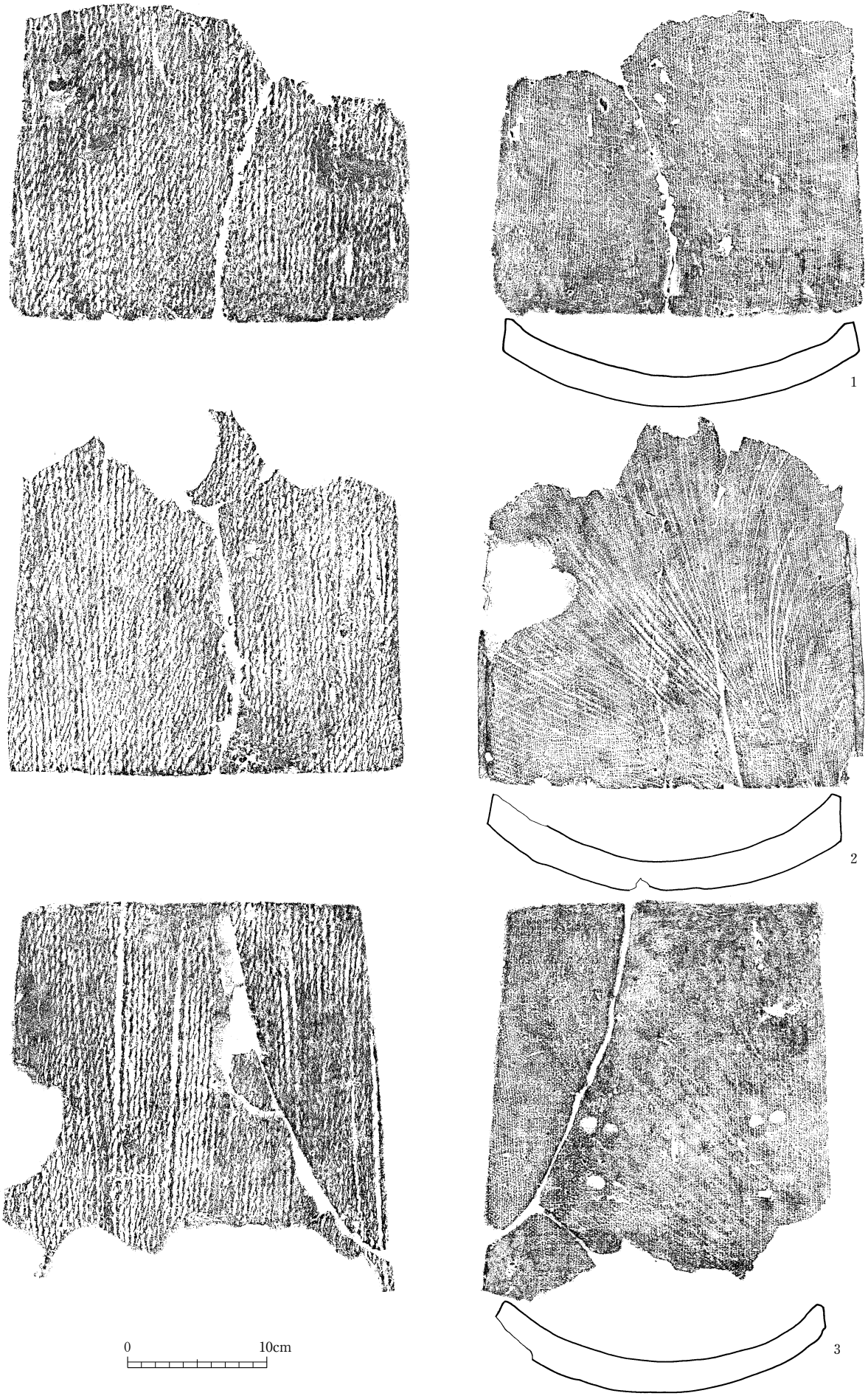
第７図　SI02竪穴住居跡出土遺物（1）





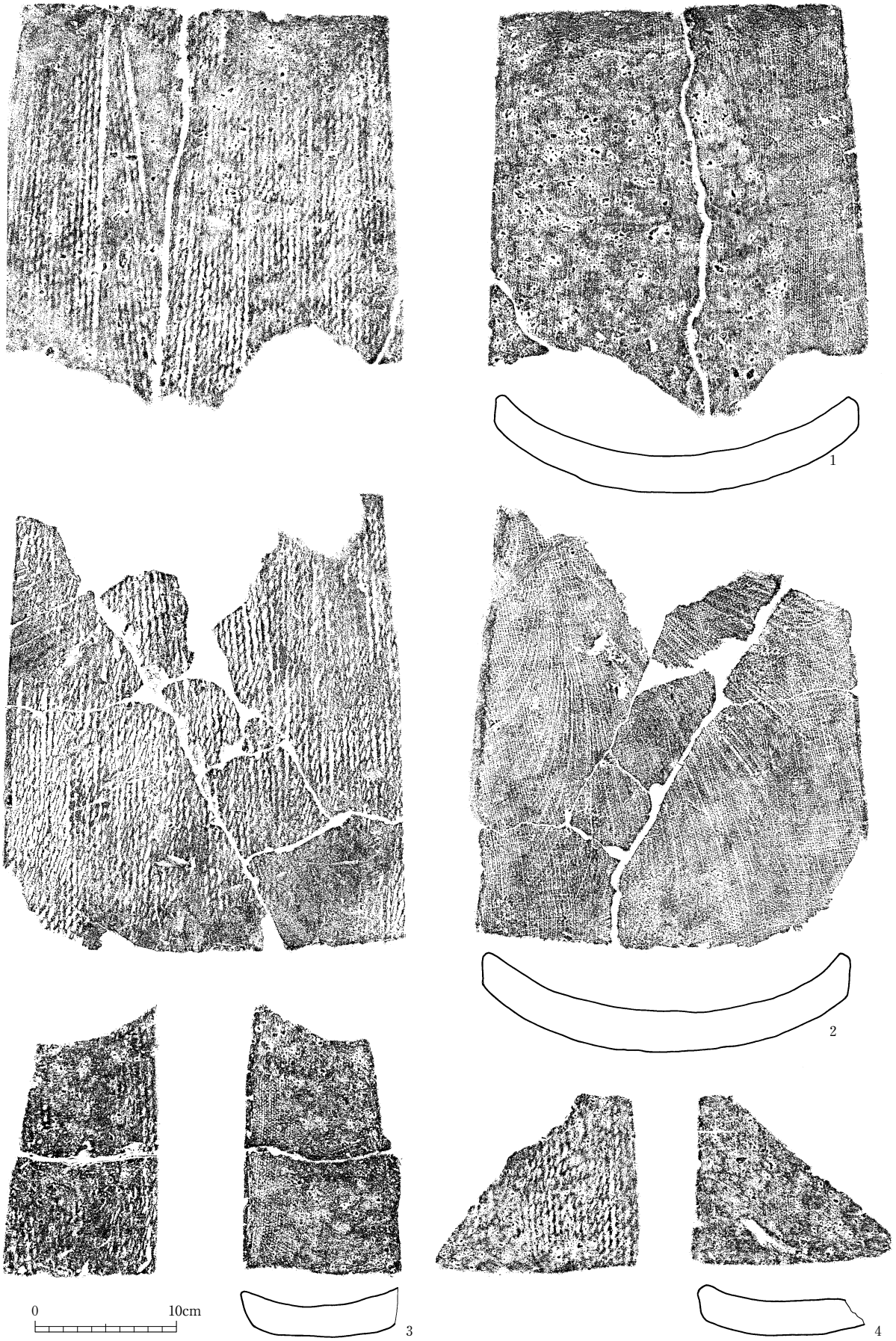
No.	種　　類	出土遺構・層位	特　　徴	法　　量	写真図版
1	軒平瓦	SI02・暗渠T4	笵による均整唐草文。凸面に縦方向の長い縄目。凹面に布目→糸切り痕。側面：ヘラケズリ。	広端幅29.0、長30.9	7－5
2	平瓦	SI02・暗渠T1	凸面に縦方向の長い縄目。凹面に布目→糸切り痕。側面：ヘラケズリ。	広端幅26.1、狭端幅（23.5）、長30.9	8－1

第 8 図　SI02竪穴住居跡出土遺物（2）



No.	種　　類	出土遺構・層位	特　　徴	法　　量	写真図版
1	平瓦	SI02・暗渠T2	凸面に縦方向の長い縄目。凹面に布目→糸切り痕。側面：ヘラケズリ。	広端幅（26.6）	8−2
2	平瓦	SI02・暗渠T3	凸面に縦方向の長い縄目。凹面に布目→糸切り痕。側面：ヘラケズリ。	広端幅25.4	8−3
3	平瓦	SI02・暗渠T6	凸面に縦方向の長い縄目。凹面に布目→糸切り痕。側面：ヘラケズリ。被熱による劣化顕著。	狭端幅22.8	9−1

第 9 図　SI02竪穴住居跡出土遺物（3）



No.	種　　類	出土遺構・層位	特　　徴	法　　量	写真図版
1	平瓦	SI02・暗渠T8	凸面に縦方向の長い縄目。凹面に布目。側面：ヘラケズリ。被熱による劣化顕著。	狭端幅23.9	9－2
2	平瓦	SI02・暗渠T9	凸面に縦方向の長い縄目。凹面に布目→糸切り痕。側面：ヘラケズリ。被熱による赤変。	広端幅（27.1）、 狭端幅（23.5）、長32.2	9－3
3	平瓦	SI02・暗渠T7	凸面に縦方向の長い縄目。凹面に布目。側面：ヘラケズリ。被熱による劣化顕著。	-	10－1
4	平瓦	SI02・暗渠T5	凸面に縦方向の長い縄目。凹面に布目。側面：ヘラケズリ。被熱による劣化顕著。	-	10－2
	平石	SI02・暗渠S1	粘板岩を薄く割り、敲打により整形。被熱による赤変。	長30.8、幅18.9	10－3
	平石	SI02・床面S2	粘板岩を薄く割り、敲打により整形。	長31.5、幅14.8	10－4

第10図　SI02竪穴住居跡出土遺物（4）

［周溝・貯蔵穴］検出されなかった。

［出土遺物］住居堆積土から須恵器坏片、カマド焚口部暗渠に自然流入する土師器片、床面から須恵器破片・砥石が出土している。暗渠施設に使用された土師器甕・軒平瓦・平瓦・粘板岩平石がある。

堆積土出土の須恵器坏の底部は回転糸切りで調整が施されていないものと回転ヘラ切りのものがある。床面出土の土師器坏片はやや大振りのもので、体部下半に手持ちヘラ削りが施されている。転用硯は須恵器大甕体部破片を用いている。縁辺には製作の際の敲打痕や擦痕が残されている。須恵器壺は回転ヘラ切りの後に高台が付されている。砥石は暗渠に落ち込む形で発見された。暗渠の蓋石に使用されたと見られる粘板岩平石１点は暗渠に落ち込む形で、もう１点は床面から発見された。ともに粘板岩を薄く割り敲打によって整形されている。暗渠に据えられた土師器甕はロクロ調整の後に、外面下部にケズリ、内面にヘラナデを加えている。軒平瓦・平瓦は凸面に長軸方向に縄叩き目、凹面に細かい布目が見られる。瓦頭文様は笵による均整唐草文である。

【SI06竪穴住居跡】

Ｎ－９・Ｗ－23付近の地山で確認された。SI08竪穴住居跡より新しく、SK20より古い。中近世以降の柱穴や現建物の基礎や埋設管によって壊されている。住居跡の南側は大きく削平され、北西部とカマド部分を残すのみである。

［平面形・規模］北西コーナー部分で東西3.0ｍ以上×南北2.0ｍ以上の規模である。

［方向］西辺の推定ラインでＮ－39°－Ｅである。

［堆積土］自然堆積である。８層に細分される。

［壁］ほぼ直立し、高さはカマド付近で約15cmほどである。

［床面］床面はほぼ平坦である。住居掘方埋土を床にする。

［主柱穴］検出されなかった。

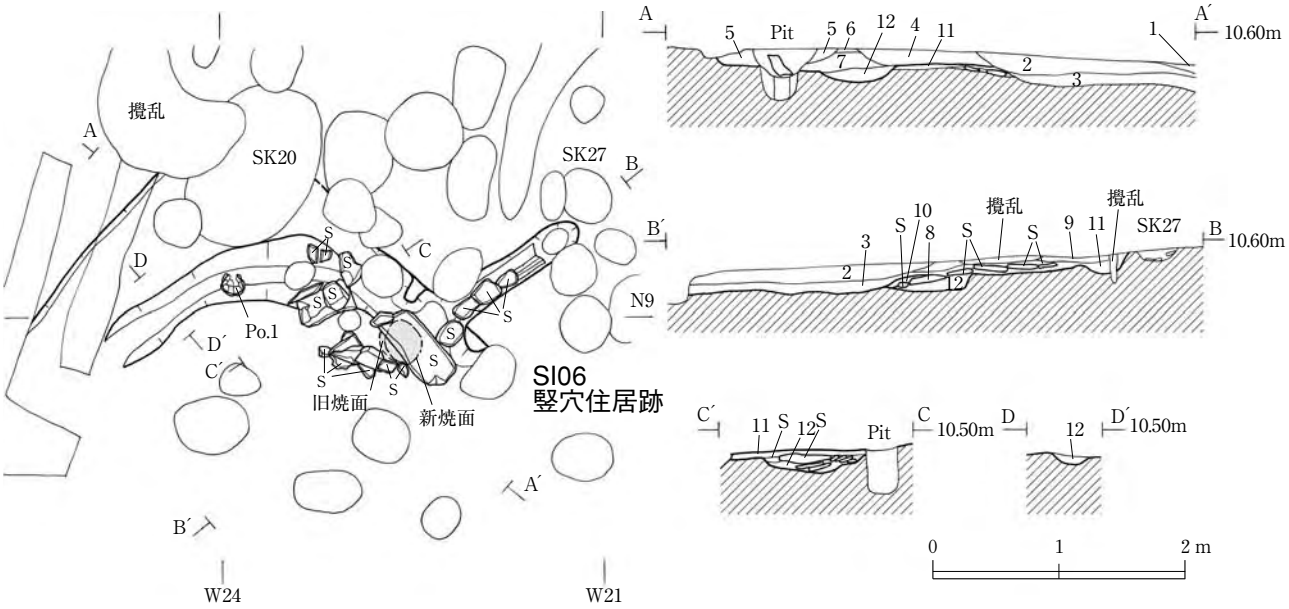
［カマド］カマドは北辺側で検出された。カマド本体はすでに崩落しており、焼面と煙道・煙出ピットが検出された。焼面は約40×30cmの大きさで粘土による貼床上面に硬化面が認められた。煙道底面から焼面貼床下には、連続して粘板岩の平石が並べられ、暗渠の排水施設が作られている。特に焼面貼床下には、約30×60cmの大きな平石が検出された。この平石下で煙道からの暗渠とT字状に交わる暗渠が検出された。幅30～40cm、深さ10～12cmで、残存状況の良い箇所では、粘板岩の蓋石と貼床が認められた。暗渠内堆積土は炭化物・焼土混じりの自然堆積である。

こうした暗渠施設に壊される形で約15×30cmの古い焼面の残痕が検出され、カマドの作り換えが行われていることが確認された。

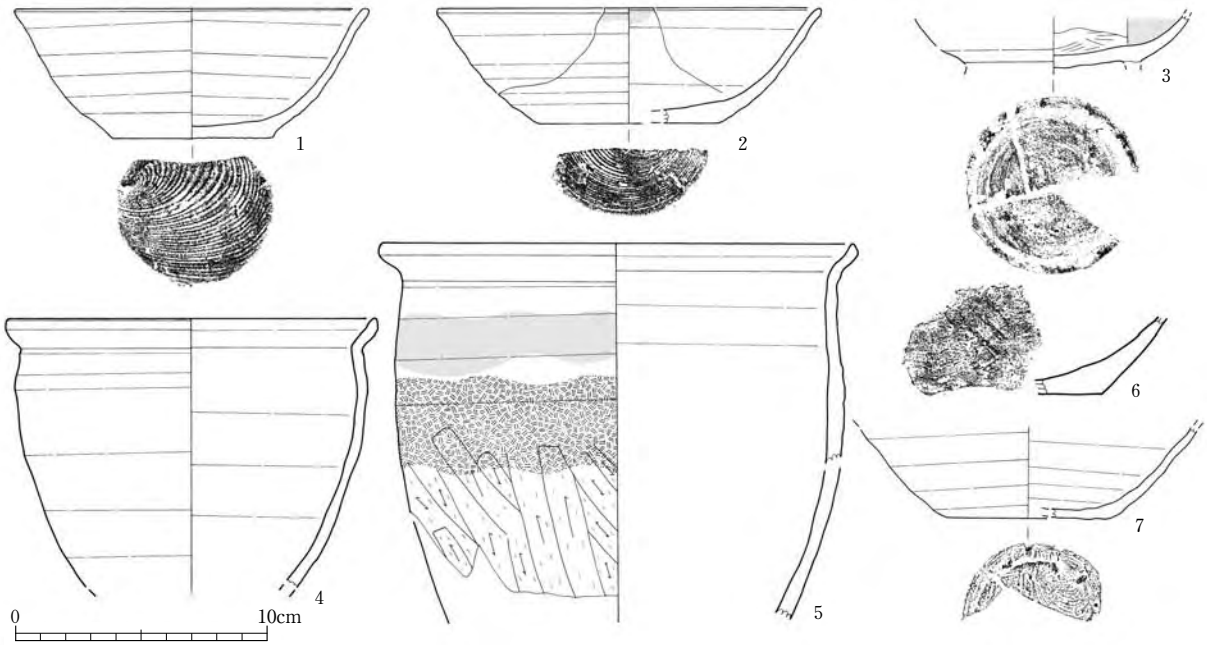
煙出ピットは長軸40cm×短軸22cmの楕円形で深さ16cmである。堆積土は自然堆積で、下層の堆積土は暗渠蓋石下の堆積層と連続している。

［周溝・貯蔵穴］検出されなかった。

［出土遺物］暗渠内堆積土から、赤焼土器坏１点、須恵器坏１点、土師器高台坏１点が出土している。いずれも破片資料である。赤焼土器坏・須恵器坏の底部は回転糸切りで調整が施されていない。カマド内堆積土及び暗渠堆積土上面から土師器甕が出土している。ともに成形にはロクロが用いられてい

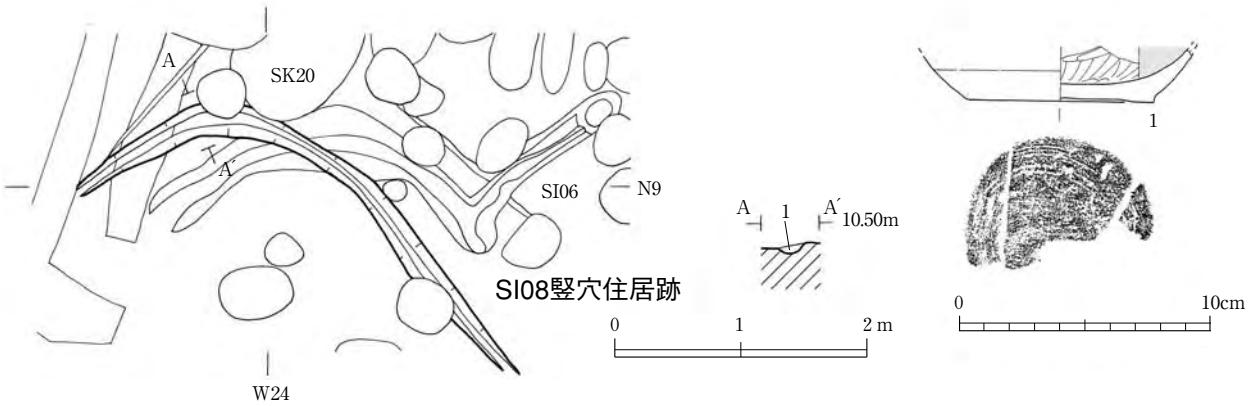


番号	土　色	土　性	備　考
1	褐色（10YR4/4）	シルト	地山礫・炭化物を含む。
2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂質シルト	凝灰岩粒～地山小礫1cm以下を多量に含む。焼礫5mmもやや多く含む。炭化物粒3mm以下を若干含む。
3	灰黄褐色（10YR4/2）	砂質シルト	下層をブロック状に若干含む。凝灰岩粒～小礫・焼礫を含む。しまり良。
4	褐色（10YR4/4）	シルト	凝灰岩粒（5m以下）を多量に含む。焼礫3mmを若干含む。住居内堆積土。
5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	凝灰岩粒（5m以下）をやや多く含む。住居内堆積土。
6	暗褐色（10YR3/3）	シルト	凝灰岩粒～地山小礫1cm以下をやや多くに含む。炭化物粒3mm以下を若干含む。住居内堆積土。
7	暗褐色（10YR3/3）	シルト	凝灰岩粒（5mm以下）を若干含む。焼土粒・焼土ブロック・炭化物（5mm以下）を多量に含む。しまりやや不良。
8	褐色（10YR4/4）	シルト	焼土粒（5mm以下）をやや多く含む。炭化物粒（3mm以下）を若干含む。凝灰岩粒（5mm以下）をやや多く含む。
9	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	黄褐色粘質シルトブロック（地山）をやや多く含む。炭化物粒・焼土粒を若干含む。
10	暗褐色（10YR3/4）	粘質シルト	焼土粒を多量に含む。炭化物粒（5mm以下）を若干含む。凝灰岩粒（5mm以下）を比較的多く含む。カマド内堆積土。
11	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山ブロック・凝灰岩片含む。貼床。
12	暗褐色（10YR3/3）	粘質シルト	炭化物粒（3mm以下）・焼土粒（3mm以下）を多量に含む。しまり不良。暗渠内堆積土。自然堆積。



No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口径	底径	器高	写真図版
1	赤焼土器・坏	SI06・暗渠	外面：ロクロナデ。炭化物付着。内面：ロクロナデ。	(14.2)	6.4	5.2	11－1
2	須恵器・坏	SI06・暗渠	内外面：ロクロナデ。口端部：炭化物付着（灯火具）。底面：回転糸切り無調整。被熱による赤変。	(15.4)	(7.2)	4.6	11－2
3	土師器・高台坏	SI06・暗渠	外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。底面：回転糸切り？→付け高台（ロクロナデ）	-	7.1	-	11－3
4	土師器・甕	SI06・カマド内堆積土	外面：ロクロナデ（ロクロ目顕著）。内面：ロクロナデ。残1/8。	(14.8)	-	-	11－4
5	土師器・甕	SI06・暗渠po.1	外面：ロクロナデ→ヘラケズリ（下部）。胴上部：煤状炭化物付着。胴中部：粘土付着。胴下部：二次加熱痕顕著。内面：ロクロナデ。	19.7	-	-	11－5
6	土師器・甕	SI06・暗渠po.1	外面：ヘラケズリ→平行タタキ。内面：ユビナデ？ 底面：ヘラケズリ。	-	-	-	11－6
7	須恵器・坏	SI06・掘方	内外面：ロクロナデ。底面：回転糸切り無調整。	-	(6.2)	-	11－7

第11図　SI06竪穴住居跡・出土遺物



番号	土　色	土　性	備　考
1	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	凝灰岩粒（5m以下）を少し含む。しまりなし。壁材痕なし。

No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口径	底径	器高	写真図版
1	土師器・坏	SI08・周溝	外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理	-	7.8	-	11－8

第12図　SI08竪穴住居跡・出土遺物

る。掘方からは須恵器坏片が出土している。底部は回転糸切りで調整が施されていない。

【SI08竪穴住居跡】

Ｎ－9・Ｗ－24付近の地山で確認された。SI06竪穴住居跡より古い。中近世以降の柱穴や現建物によって全体が大きく削平され、周溝を残すのみである。

［平面形・規模］東西3.0m以上×南北2.0m以上である。

［方向］西辺でN－62°－Eである。

［堆積土・壁・床面・カマド］残存しない。

［主柱穴］検出されなかった。

［周溝］一部残存している。幅20～25cm、深さ５～10cmで、周溝内堆積土は褐色粘土質シルトである。

［貯蔵穴］検出されなかった。

［出土遺物］周溝内埋土から、土師器坏片が出土している。土師器坏底面は回転糸切りで調整が施されていない。

【SI09竪穴住居跡】

Ｎ－０－Ｓ、Ｗ－31付近の地山で検出された。SI10竪穴住居跡より新しい。全体に攪乱孔や溝、柱穴等によって大きく削平され、北東コーナー付近の一部が残存しているのみである。

［平面形・規模］南北１m以上×東西1.8m以上である。

［方向］東辺でN－24°－Wである。

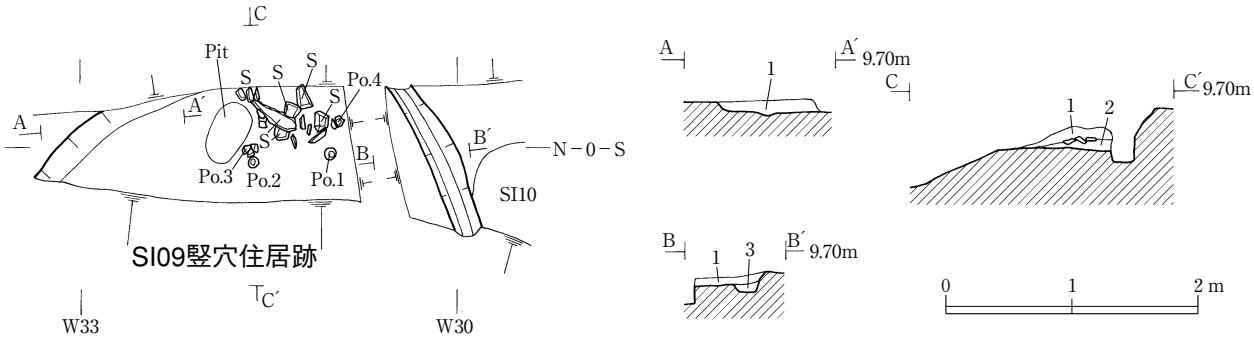
［堆積土］暗褐色シルトが自然堆積している。

［壁］ほぼ直立し、高さは北側で約８cmほどである。

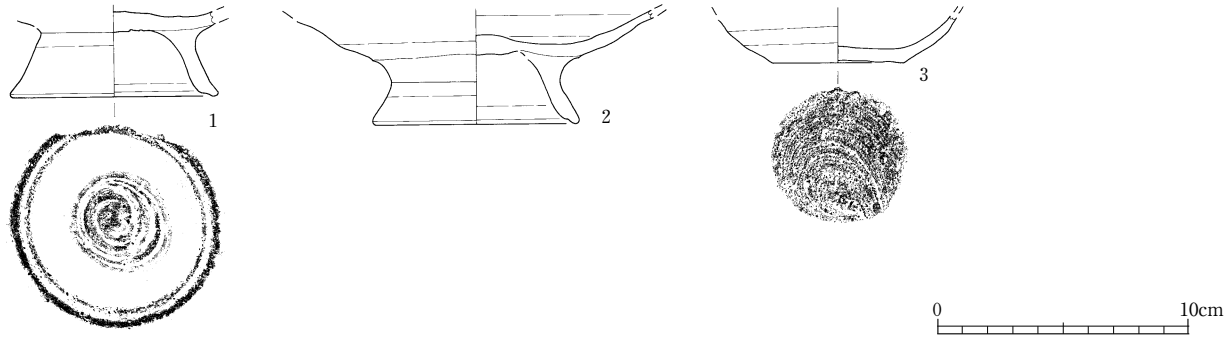
［床面］ほぼ平坦である。地山を床面としている。

［カマド］検出されなかった。ただし、北東部で焼土・炭化物混じりの焼礫を含む褐色土層が確認され、カマド崩壊土と推測された。

［周溝］東側にのみ認められた。幅13～16cm、深さ約10cmである。褐色シルトの自然堆積である。



番号	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山小礫・焼礫1を含む。炭化物粒3mm以下を若干含む。住居内堆積土。
2	暗赤褐色（2.5YR3/4）	シルト	焼土・炭を多く含む。しまりなし。カマド崩壊土。
3	褐色（10YR4/4）	シルト	地山ブロックを少し含む。壁材痕なし。周溝内堆積土。



No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口径	底径	器高	写真図版
1	赤焼土器・高台坏	SI09・床面po.1	内外面：ロクロナデ。底面：切り離し不明→付け高台（ロクロナデ）。高台径：8.4cm。	-	6.7	-	11－9
2	赤焼土器・高台坏	SI09・床面po.2・3	内外面：ロクロナデ。炭化物付着（外面）。底面：回転糸切り無調整→付け高台。高台径：8.3cm。	-	(7.0)	-	11－10
3	赤焼土器・坏	SI09・床面po.4	外面：ロクロナデ。内面：コテナデ。炭化物付着。底面：回転糸切り無調整。	-	5.3	-	11－11

第13図　SI09竪穴住居跡・出土遺物

［主柱穴・貯蔵穴］検出されなかった。

［出土遺物］床面から赤焼土器高台坏２点・坏１点が出土している。坏底部は回転糸切りで調整が施されていない。

【SI10竪穴住居跡】

Ｎ－０－Ｓ、Ｗ－28付近の地山で検出された。SI09・SK13・SD11よりも古い。南側は攪乱孔や削平を受けており、概して残存状況は良くない。また、東側も削平されており、掘方と貯蔵穴のみが残存する。

［平面形・規模］東西約2.0m以上×南北約1.9m以上の隅丸方形である。

［方向］西辺でN－15°－Eである。

［堆積土］オリーブ褐色・暗褐色シルトが自然堆積している。

［壁］ほぼ直立し、高さは北側で約８cmほどである。

［床面］ほぼ平坦である。掘方を床面としている。

［カマド］北側のほぼ中央約15×20cmほどの焼面が検出された。カマド本体は崩落し残っていない。カマド奥壁～煙道の想定される箇所にはSK13があり、残っていない。

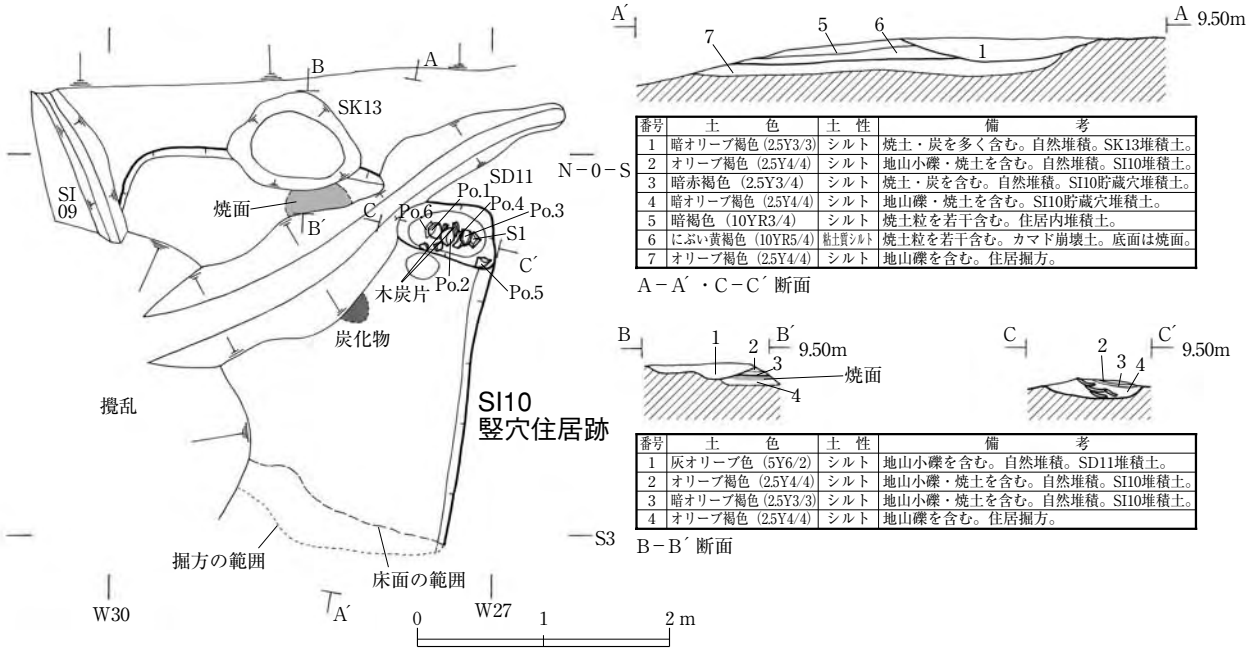
［主柱穴・周溝］検出されなかった。

［貯蔵穴］北東コーナーで検出された。坏類を中心に重なり合って発見された。

［掘方］深さ10～14cmの掘方が認められた。掘方埋土は地山礫を多く含むオリーブ褐色シルトである。
［出土遺物］遺構確認時に鉄鏃１点、堆積土から底部穿孔の施された両黒の耳皿１点、貯蔵穴から須恵器壺１点、土師器坏２点、赤焼土器坏１点が出土した。土師器坏・赤焼土器坏の底部はともに回転糸切りで調整が施されていない。

②　その他の遺構

その他の遺構として、焼面や土壙、溝跡等がある。これらのうちには、本来、住居の貯蔵穴や暗渠～外延溝、周溝の可能性がある遺構も認められるが、全般に攪乱・削平が著しく、明確に「住居跡」

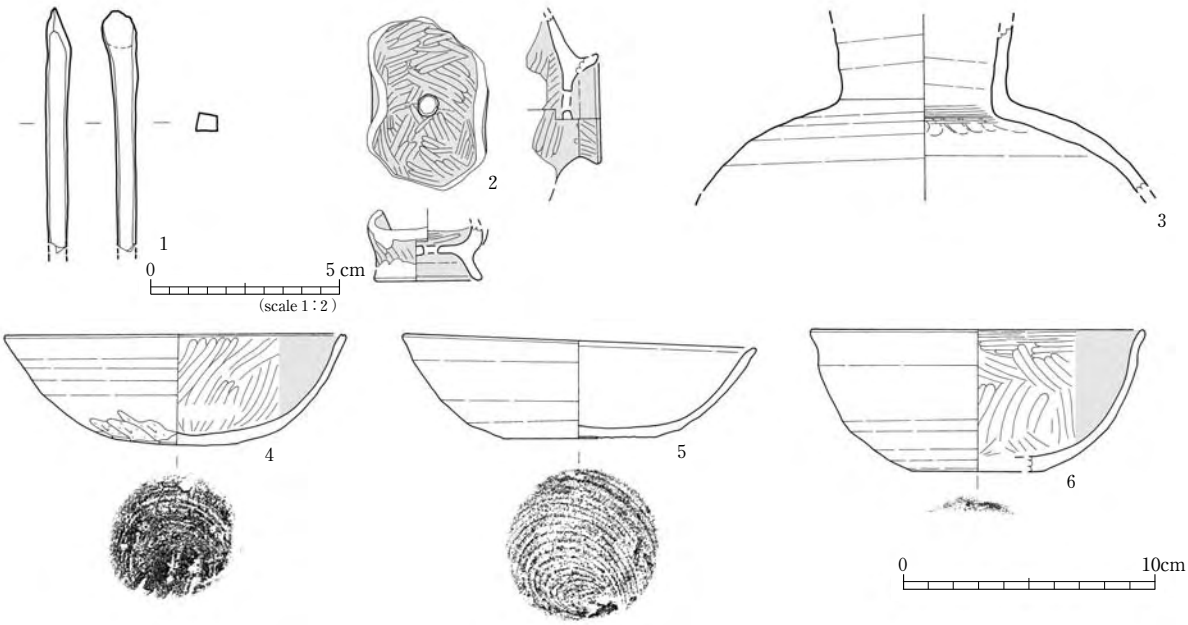


番号	土　色	土　性	備　考
1	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）	シルト	焼土・炭を多く含む。自然堆積。SK13堆積土。
2	オリーブ褐色（2.5Y4/4）	シルト	地山小礫・焼土を含む。自然堆積。SI10堆積土。
3	暗赤褐色（2.5Y3/4）	シルト	焼土・炭を含む。自然堆積。SI10貯蔵穴堆積土。
4	暗オリーブ褐色（2.5Y4/4）	シルト	地山礫・焼土を含む。SI10貯蔵穴堆積土。
5	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土粒を若干含む。住居内堆積土。
6	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	焼土粒を若干含む。カマド崩壊土。底面は焼面。
7	オリーブ褐色（2.5Y4/4）	シルト	地山礫を含む。住居掘方。

A－A´・C－C´断面

番号	土　色	土　性	備　考
1	灰オリーブ色（5Y6/2）	シルト	地山小礫を含む。自然堆積。SD11堆積土。
2	オリーブ褐色（2.5Y4/4）	シルト	地山小礫・焼土を含む。自然堆積。SI10堆積土。
3	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）	シルト	地山小礫・焼土を含む。自然堆積。SI10堆積土。
4	オリーブ褐色（2.5Y4/4）	シルト	地山礫を含む。住居掘方。

B－B´断面



No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口径	底径	器高	写真図版
1	鉄鏃	SI10・遺構確認	断面四角形状。先端部：両刃状をなす。		長6.7		11－12
2	土師器・耳皿	SI10・堆積土	内外面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成後、穿孔。底面：切り離し不明→付け高台→黒色処理	-	-	-	11－13
3	須恵器・壺	SI10・貯蔵穴po.5	内外面：ロクロナデ。内面頸部：指頭によるオサエ→ナデ	-	-	-	
4	土師器・坏	SI10・貯蔵穴 po.1･6	外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。底面：回転糸切り→一部手持ちヘラケズリ。外面底部に炭化物付着。	13.7	4.8	4.5	11－15
5	赤焼土器・坏	SI10・貯蔵穴po.1	外面：ロクロナデ。内面：コテナデ。底面：回転糸切り無調整	14.1	6.0	4.0	11－16
6	土師器・坏	SI10・貯蔵穴po.4	外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。底面：回転糸切り無調整。	(13.4)	(5.4)	5.7	11－17
	磨石	SI10・貯蔵穴S1	外面：磨痕、擦痕。	長8.9、幅7.5、高6.2			11－18

第14図　SI10竪穴住居跡・出土遺物

と認定するには至らなかった。ここでは、地点ごとにまとめて概要を述べ、最後に単独の土壙について記述する。

a.【SX05貼床・SX17・SD18溝跡】

Ｎ－６・Ｗ－15付近の地山で検出された。全体に大きく削平され、中近世以降の柱穴や攪乱が多く見られる箇所である。SX05貼床上面で、約30cmと約10cm程の不整形の焼面が検出された。さらに全体を掘り下げると、SD18溝跡が検出された。SX05がカマドの残痕でSD18溝跡が暗渠、あるいは全く別の住居の外延溝の可能性も考えられたが、詳細は不明である。SX05掘方の掘り下げ中にSX17を検出している。平石の下には、焼土･炭化物を多く含む堆積土が認められた。SX05掘方中に高台坏破片1点が出土している。

b.【SK27土壙・SD21溝跡・SD22溝跡】

SK27はＮ－10・Ｗ－21、SD21・SD22はＮ－11・Ｗ－18付近の地山で検出された。中近世以降の建物跡によって大きく削平されている箇所である。SD22溝跡を切る形でSD21溝跡が検出された。SK27土壙底面からは、礫・土師器破片が出土している。

c.【SX14貼床・SD15溝跡】

Ｎ－５・Ｗ－19付近の地山で検出された。全体に大きく削平されている箇所である。SX14貼床上面に約20cm程の焼面が認められ、全体を掘り下げるとSD15溝跡が確認された。出土遺物はない。

d.【SK13土壙・SD11溝跡】

Ｎ－０－Ｓ・Ｗ－29付近の地山で検出された。現水路の南側部分にあたる。SI10竪穴住居跡を壊すSK13土壙とSD11溝跡が検出された。SK13土壙の堆積土には焼土・炭化物が多く含まれていた。堆積土から内黒土師器坏2点が出土している。SD11溝跡の堆積土は自然堆積である。出土遺物はない。

e.【SK12土壙】

Ｎ－８・Ｗ－14付近の地山で検出された。長軸約90cm、短軸約50cm、深さ18cmの土壙である。焼土・炭化物混じりの暗褐色・にぶい黄褐色シルトが自然堆積している。出土遺物はない。

f.【SK20土壙】

Ｎ－10・Ｗ－24付近の地山で検出された。SI06竪穴住居跡よりも新しい。長軸130cm、短軸90cm、深さ約5cmである。堆積土は褐色シルトが自然堆積している。底面から、土師器高台坏2点、土師器坏１点、土師器鉢１点、赤焼土器坏１点、須恵器坏１点が出土している。

g.【SK25土壙】

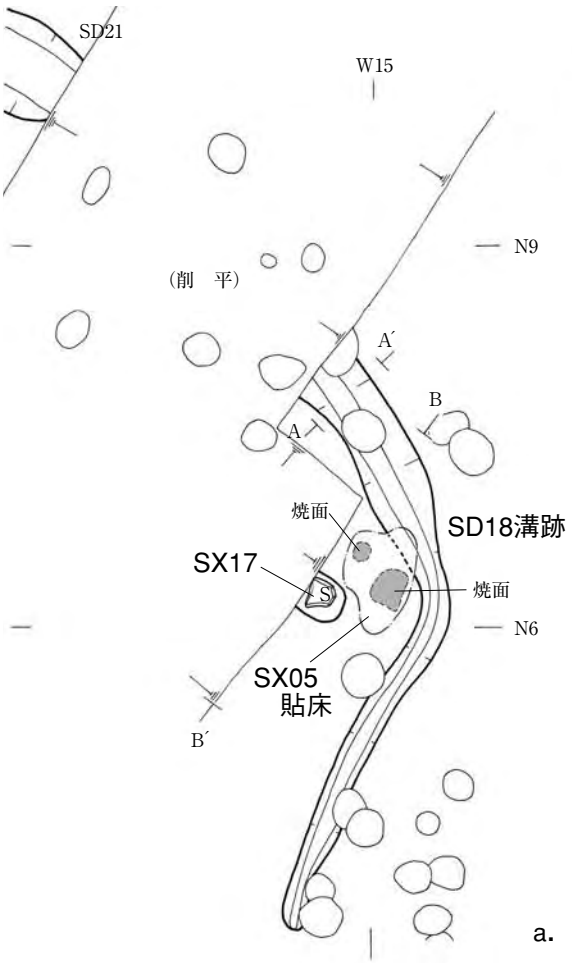
Ｎ－６・Ｗ－19付近の地山で検出された。北側は削平されている。径110cm程のほぼ円形をなす土壙である。堆積土は炭化物を少量含む暗オリーブ粘土の自然堆積である。出土遺物はない。

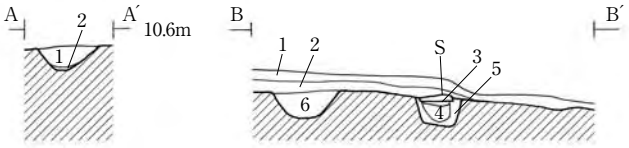
h.【SK26土壙】

Ｓ－２・Ｗ－18付近の地山で検出された。径65cm程の円形をなす土壙である。堆積土は暗褐色・灰黄褐色粘土質シルトの自然堆積である。出土遺物はない。

③　遺構外の出土遺物

Ⅴ層を中心に、若干の古代の遺物が縄文土器片等とともに出土した。いずれも層中の遺物で出土状





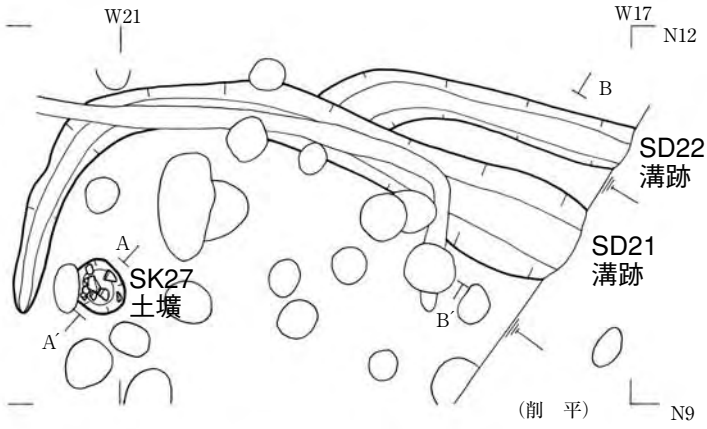
A－A´断面

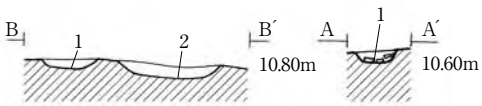
番号	土　色	土　性	備　考
1	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）	シルト	地山小礫を多く含む。自然堆積。SD18堆積土。
2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	地山小礫・炭化物を含む。自然堆積。SD18堆積土。

B－B´断面

番号	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	地山礫・ブロックを含む。
2	褐色（10YR4/4）	シルト	地山礫・ブロックを含む。
3	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土粒を若干含む。SX17。
4	暗赤褐色（5Y3/4）	シルト	焼土・炭を含む。SX17。
5	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	焼土小ブロックを若干含む。SX17。
6	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）	シルト	地山小礫を多く含む。自然堆積。SD18堆積土。

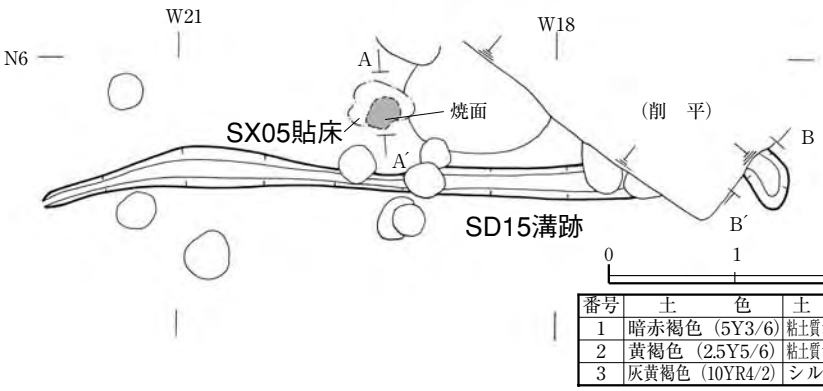
a．SX05貼床・SX17・SD18溝跡

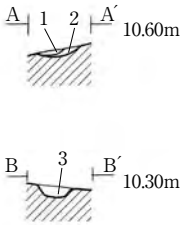




番号	土　色	土　性
1	暗褐色（10YR3/4）	粘土
備考	地山小礫・粒を含む。自然堆積。SD22堆積土。	
2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土
備考	地山小礫・炭化物を若干含む。自然堆積。SD21堆積土。	
1	褐色（10YR4/4）	シルト
備考	焼土粒・炭化物を含む。SK27堆積土。	

b．SK27土壙・SD21溝跡・SD22溝跡

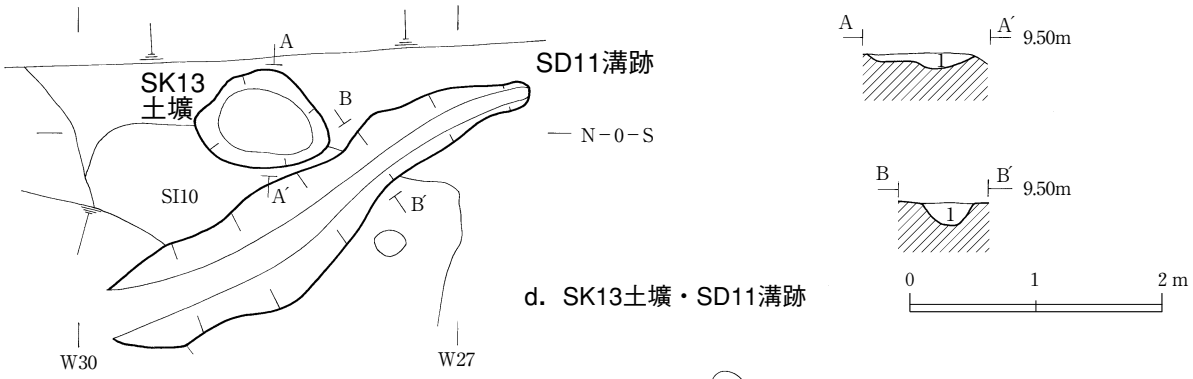




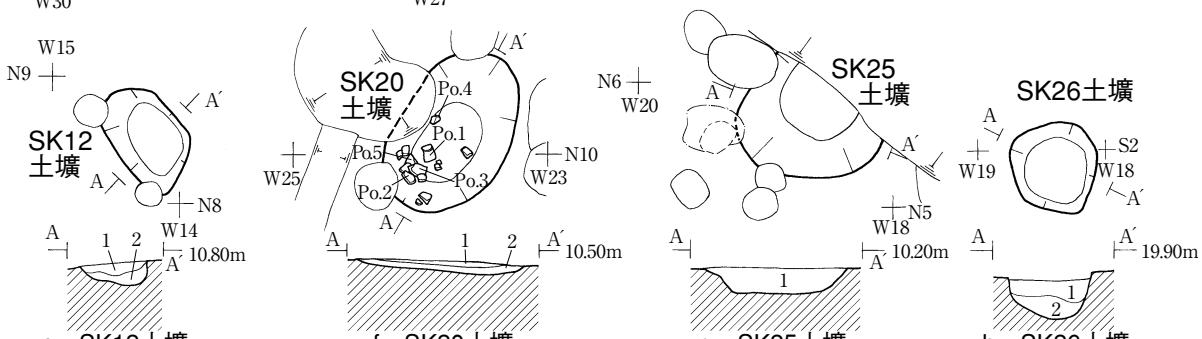
番号	土　色	土　性	備　考
1	暗赤褐色（5Y3/6）	粘土質シルト	熱により赤化。堅くしまっている。SX14貼床。
2	黄褐色（2.5Y5/6）	粘土質シルト	白色粘土が混じっている。炭化物を少量含む。しまりあり。粘性大。SX14貼床。
3	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	地山小礫・粒を含む。炭化物を若干含む。自然堆積。SD15堆積土。

c．SX14貼床・SD15溝跡

第15図　その他の遺構（1）



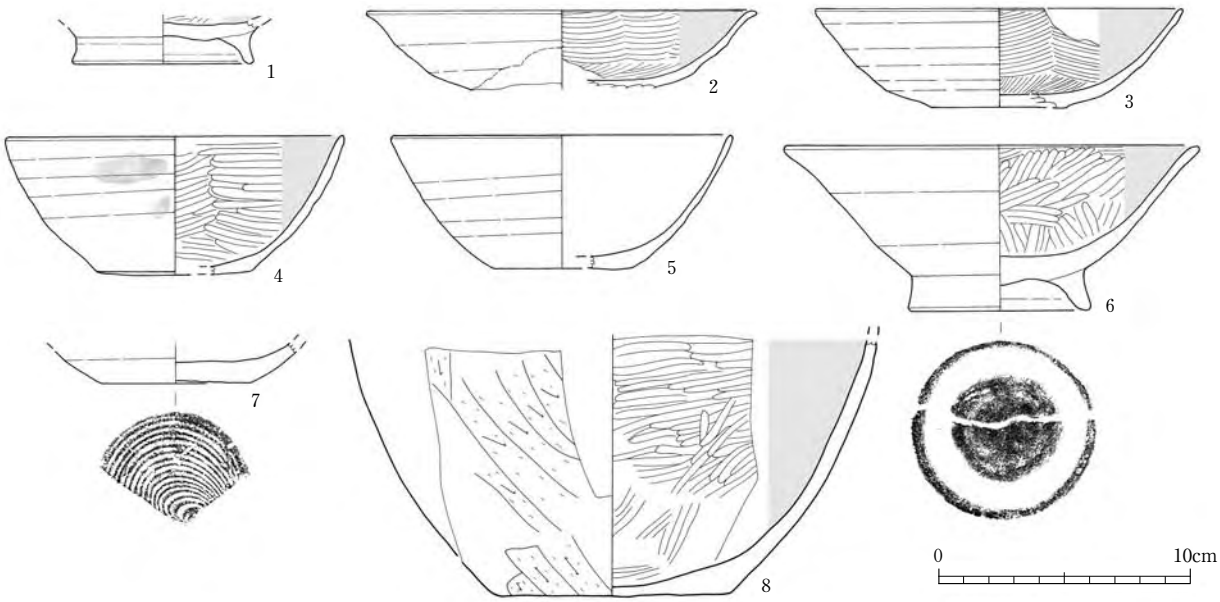
d．SK13土壙・SD11溝跡



e．SK12土壙　f．SK20土壙　g．SK25土壙　h．SK26土壙

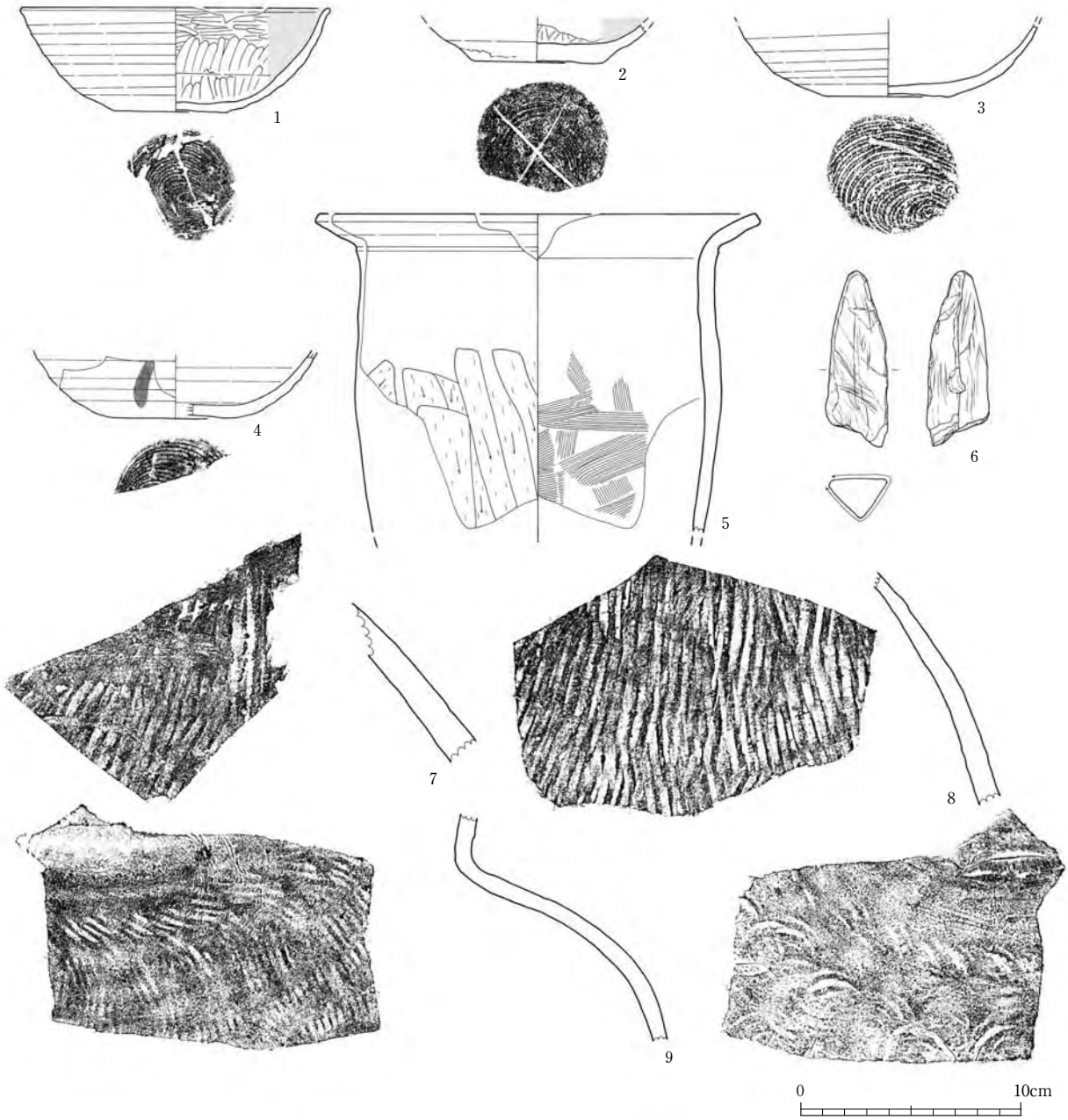
番号	土　色	土　性	備　考	
1	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）	シルト	焼土・炭を多く含む。自然堆積。	SK13堆積土
1	灰オリーブ色（5Y6/2）	シルト	地山小礫を含む。自然堆積。	SD11堆積土
1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山粒・焼土粒・炭化物を若干含む。	SK12堆積土
2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	地山粒・焼土粒・炭化物を若干含む。底面付近に薄い炭化物層がある。	
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物含む。	SK20堆積土
2	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	地山ブロックを若干含む。しまり不良。自然堆積。	
1	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）	粘土	地山小礫・炭化物を含む。	SK25堆積土
1	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山粒・焼土粒を若干含む。しまり不良。	SK26堆積土
2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	山小礫を含む。しまりなし。自然堆積。	

第16図　その他の遺構（2）



No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口径	底径	器高	写真図版
1	土師器・高台坏	SX05・掘方	外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。底面：切り離し不明→付け高台。摩滅顕著。	-	-	-	12－1
2	土師器・坏	SK13・堆積土	外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。台付き？	(15.6)	-	-	12－2
3	土師器・坏	SK13・堆積土	外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理→被熱による色トビ。	(14.8)	-	-	12－3
4	土師器・坏	SK20・底面一括	外面：ロクロナデ。油煙状炭化物付着。内面：ヘラミガキ→黒色処理。底面：回転糸切り無調整。	13.7	4.8	4.5	12－4
5	赤焼土器・坏	SK20・底面po.2	外面：ロクロナデ。内面：コテナデ。底面：回転糸切り無調整。胎土軟質。やや摩滅。	(13.6)	(5.5)	5.3	12－5
6	土師器・高台坏	SK20・底面po.1	外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。底面：切り離し不明→付け高台	16.6	7.3	6.6	12－6
7	須恵器・坏	SK20・底面po.4	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。磨痕。底面：回転糸切り無調整。残：1/8（1片）。	-	(6.0)	-	12－7
8	土師器・甕？	SK20・底面po.3・一括	外面：ヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。底面：切り離し不明→ヘラケズリ	-	(9.2)	-	12－8

第17図　その他の遺構出土遺物



No.	種類	出土遺構・層位	特　徴	口径	底径	器高	写真図版
1	土師器・坏	遺構外・灰白下	外面：ロクロナデ（ロクロ目顕著）。内面：ヘラミガキ→黒色処理。底面：回転糸切り無調整。	14.1	5.2	4.7	12－9
2	土師器・坏	遺構外	外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。底面：回転糸切り無調整→ヘラ書き（「×」）。1片。	-	6.1	-	12－10
3	赤焼土器・坏	遺構外・灰白下	外面：ロクロナデ。内面：コテナデ。底面：回転糸切り無調整。被熱による赤変。	-	6.0	-	12－11
4	須恵器・坏	遺構外	外面：ロクロナデ。墨書「□」。内面：ロクロナデ。底面：回転糸切り無調整。1片。	-	(5.6)	-	12－12
5	土師器・甕	遺構外	外面：ロクロナデ→ヘラケズリ（下部）。内面：ロクロナデ→ヘラナデ（縦）→ナデ（横）。	-	-	-	12－13
6	砥石	遺構外	断面三角形。磨痕・擦痕。下部：自然面。砂岩。	長8.0、幅3.9、高1.9			12－16
7	須恵器・甕	遺構外・灰白下	外面：平行タタキ→ケズリ（下部）ロクロナデ。内面：アテ具痕→ナデ	-	-	-	12－14
8	須恵器・甕	遺構外	外面：平行タタキ→ロクロナデ（頸部）。内面：アテ具痕→ロクロナデ。	-	-	-	12－15

第18図　遺構外の出土遺物

態は良好ではない。図化できるものは第18図のとおりである。

B. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構には、土器埋設遺構1基がある。このほか、調査区北側のⅥ層上面の窪地に形成されたSX03遺物包含層がある。また、Ⅵ層・Ⅴ層からも縄文時代の遺物が出土している。

① 土器埋設遺構

【SX23土器埋設遺構】

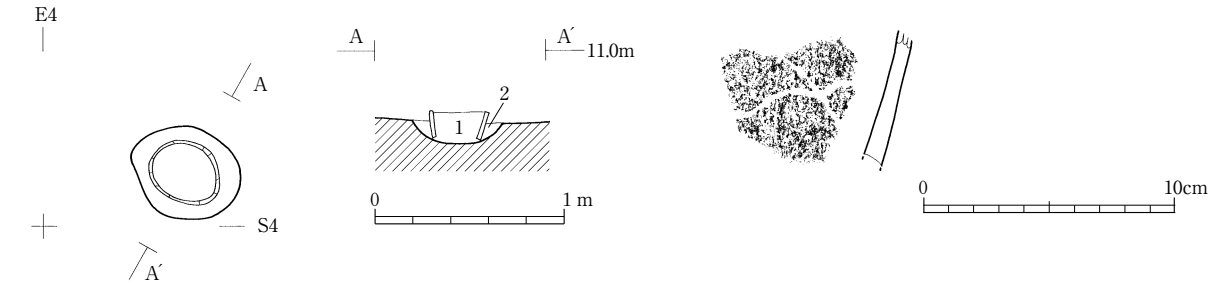
［重複・残存状況］遺構上部は削平されている。

［平面形･規模］長軸30cm×短軸25cmの楕円形を呈し、深さ10cmである。

［堆積土］土器の据方部分はにぶい黄褐色シルト、土器内には炭化物・地山粒を含む暗褐色シルトが堆積していた。特に骨片・骨粉は検出されなかった。

［壁］砂礫に富む地山を掘り込んで壁としている。

［土器］底部を欠いた深鉢形土器の胴下部を正立して、埋設している。確認時の上面径で20cmである。土器は摩滅が著しく復元できなかったため、一部を図示する。縦走撚糸文（L）が施されており、胎土に繊維は含まれていない。内面には炭化物が付着しており、実際に煮沸に用いられた土器の転用である。



番号	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物・地山粒を含む。
2	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山粒を含む。埋設土器掘方。

No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	分類	写真図版
1	深鉢	SX23土器埋設遺構	外面：撚糸文（L）。内面：ミガキ。炭化物付着。	Ⅱ類	16－1

第19図　SX23土器埋設遺構・出土土器

② 遺物包含層

【SX03遺物包含層】

［重複・残存状況］南側は大きく削平されている。中近世以降の柱穴に一部壊されている。

［平面形･規模］東西2.2m×南北4.0mの窪地に形成されている。

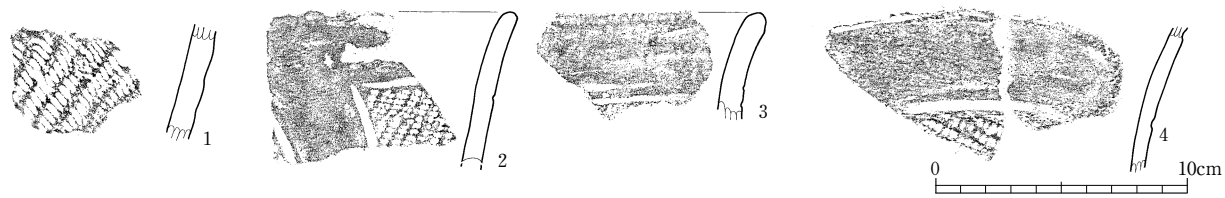
［堆積層］Ⅵ層上面に形成（第4図参照）されている。包含層1層は最大厚4cmで焼土・炭化物を含む黒色シルト、包含層2層は最大厚10cmで焼土・焼礫・炭化物を多く含む黒褐色シルト、包含層3層は最大厚2cmで焼土・焼礫を若干含む黒褐色シルトで、いずれも人為起源の堆積層である。

［出土土器］層ごとに出土土器を記述する。石器に関しては後述する。

ａ．包含層1層出土土器（第20図）

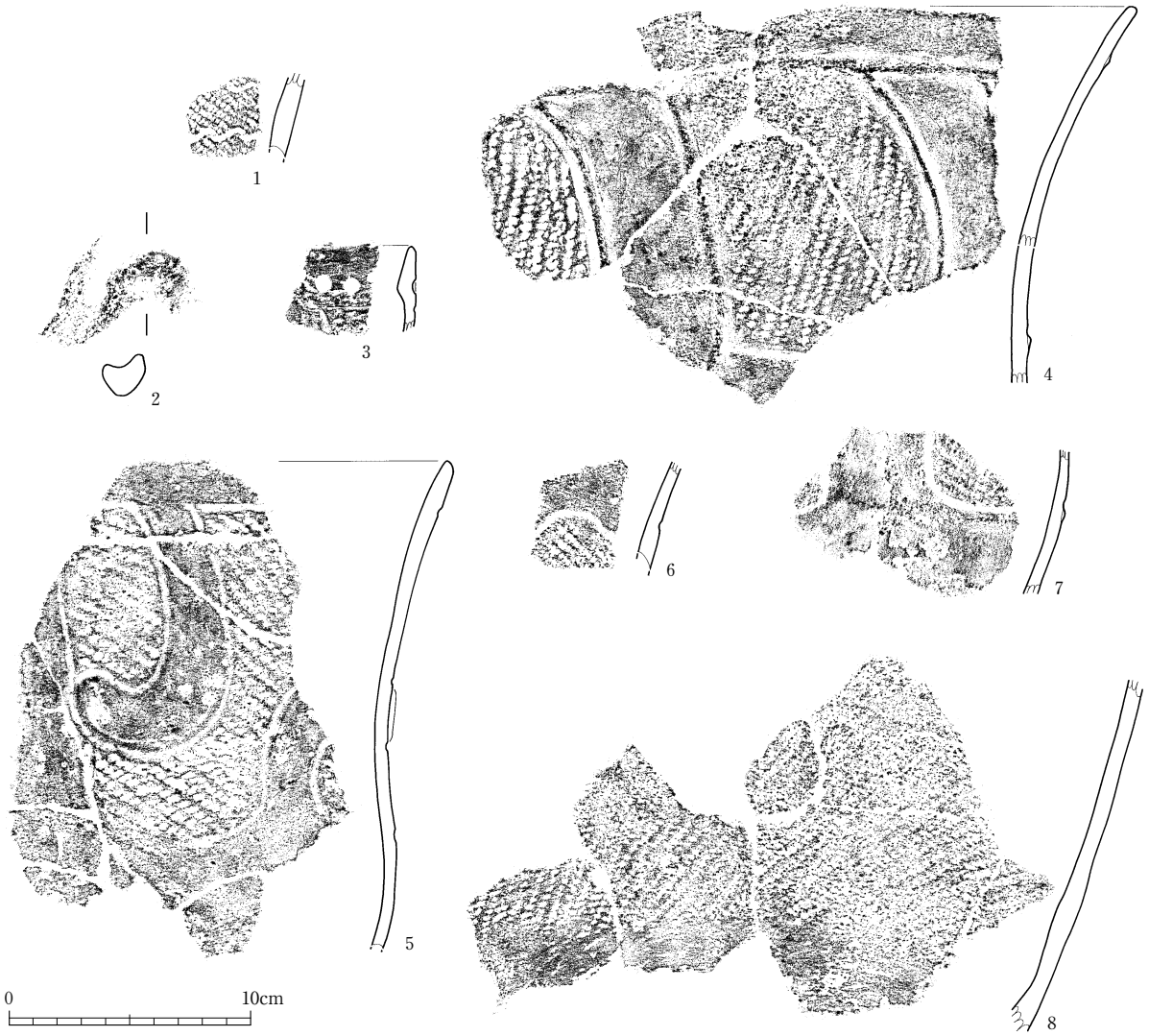
4点、図化した。1は繊維土器片で、古い時期の土器の流れ込みによるものである。

ｂ．包含層2層上面～2層中出土土器（第21図）



No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	分類	写真図版
1	深鉢	SX03包1層	外面：縄文（LR-0段多条-横回転）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。摩滅。	Ⅰ類	13－1
2	深鉢	SX03包1層	平縁。外面：縄文（RLR）、ミガキ→沈線文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	13－2
3	深鉢	SX03包1層	波状縁？（波底部か）。外面：横位沈線文。内面：ナデ。摩滅。	Ⅱ類	13－3
4	深鉢	SX03包1層	外面：縄文（LR）、ヒレ状隆線文、ミガキ→沈線文。炭化物付着。内面：ミガキ。	Ⅱ類	13－4

第20図　SX03遺物包含層１層出土土器



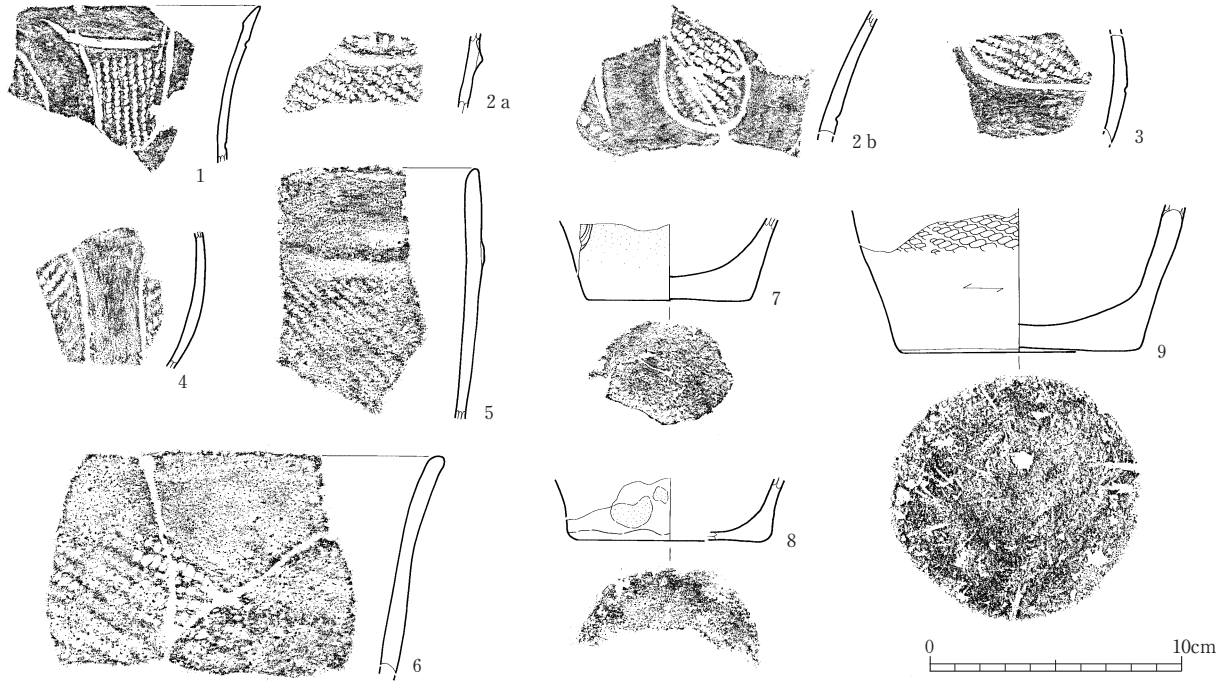
No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	分類	写真図版
1	深鉢	SX03包2層上面～2層中	外面：縄文（RL）＋結節文。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	13－5
2	深鉢	SX03包2層上面～2層中	環状把手。摩滅。	Ⅱ類	13－6
3	深鉢	SX03包2層上面～2層中	波状縁？。外面：沈線文、刺突文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	13－9
4	深鉢	SX03包2層上面～2層中	平縁。外面：方形区画文の一種（J字状）、縄文（RLR縦回転）→隆線→沈線・ミガキ、炭化物付着。内面：ナデ。	Ⅱ類	13－7
5	深鉢	SX03包2層上面～2層中	平縁。外面：J字状文（先端部にヒレ状隆線文）、縄文（LRL縦回転）→隆線→沈線・ミガキ。内面：ナデ。	Ⅱ類	13－8
6	深鉢	SX03包2層上面～2層中	外面：縄文（LR）→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	13－10
7	深鉢	SX03包2層上面～2層中	外面：縄文（LR）、隆線文→沈線文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	13－11
8	深鉢	SX03包2層上面～2層中	外面：縄文（RLR)→ミガキ（底部付近）。内面：ナデ・ミガキ	Ⅱ類	13－12

第21図　SX03遺物包含層・２層上面～２層中出土土器

8点、図化した。1は繊維土器片で、古い時期の流れ込みによるものである。環状把手（2）、方形区画文の一種（4）、先端部にヒレ状隆線文（突起）を伴うJ字状に無文部が垂下する文様（5）などがある。

c．包含層3層上面出土土器（第22図）

9点、図化した。無文帯が文様として展開するもの（1･2･4）がある。地文には縄文と撚糸文（1）がある。底部破片が3点ある。



No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	分類	写真図版
1	深鉢	SX03包3層上面	平縁。外面：沈線文→撚糸文（LR）。内面：ミガキ。	Ⅱ類	13－13
2	深鉢	SX03包3層上面	外面：縄文（LR）→ミガキ・刺突文。内面：ナデ。	Ⅱ類	13－14･15
3	深鉢	SX03包3層上面	外面：縄文（LR）→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	13－16
4	深鉢	SX03包3層上面	外面：縄文（RL）→ミガキ・沈線文。内面：ナデ	Ⅱ類	13－17
5	深鉢	SX03包3層上面	平縁。外面：横位隆線文、縄文（LR）→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	13－18
6	深鉢	SX03包3層上面	平縁。外面：縄文（LR）。内面：ナデ。	Ⅱ類	13－19
7	深鉢	SX03包3層上面	外面：沈線文。摩滅。	Ⅱ類	13－20
8	深鉢	SX03包3層上面	外面：剥落。摩滅。	Ⅱ類	13－21
9	深鉢	SX03包3層上面･Ⅵa層	外面：縄文（LR）→ミガキ。底面：ミガキ→網代痕？。内面：ナデ。	Ⅱ類	13－22

第22図　SX03遺物包含層・3層上面出土土器

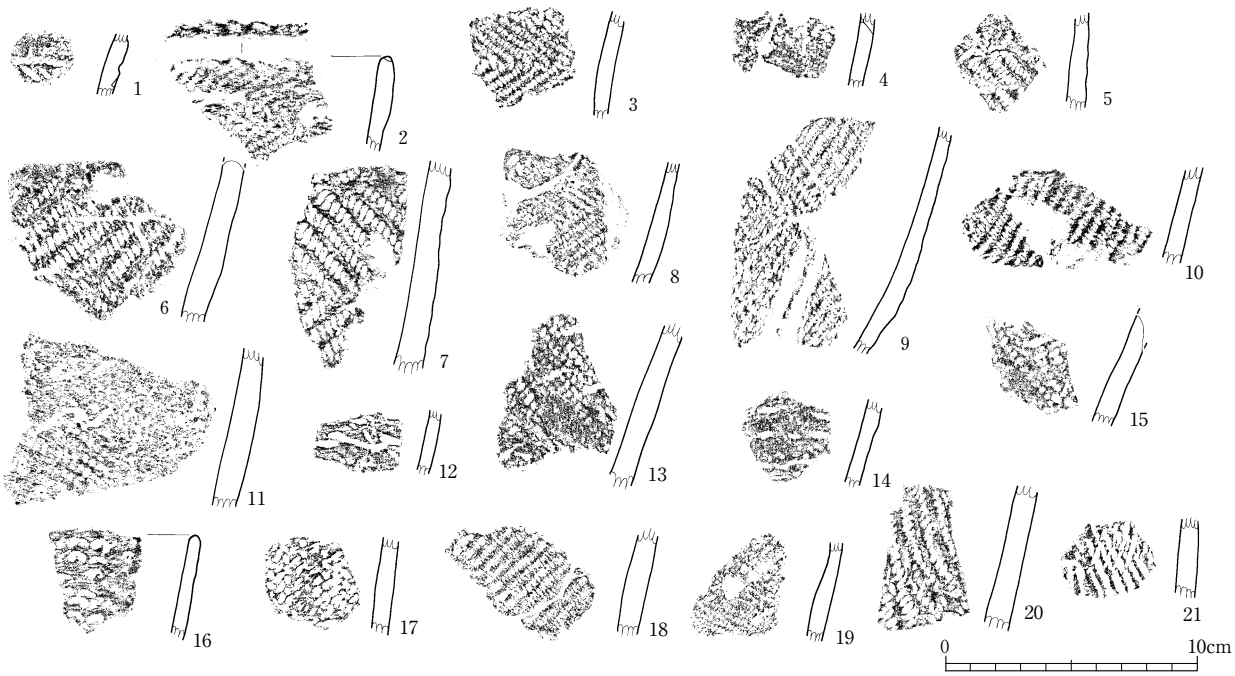
③　Ⅵ層

北側の調査区ほぼ全体に認められる暗褐色～黒褐色シルト層である。斜面の下方では色調によって、2層に細分された。層ごとに出土土器を記述する。石器に関しては後述する。

a．Ⅵa層中出土土器（第23～26図）

71点図化した。第23図に図示した21点はすべて繊維土器で、古い時期の流れ込みによるものと考えられる。縄の側面圧痕文と短沈線文の文様意匠を持つもの（1）、結束羽状縄文（2～4）、非結束羽状縄文（5～8）、交差状縄文（9～10）、横走結節（綾繰）文（11～15）、側面環付文（16）、組紐回転文（17）、縄文（18～20）、交差状撚糸文（21）がある。

第24･25図が比較的接合状況の良く、この層で主体となるものである。第24図1～4は環状把手を伴い、5～7の口縁部には刺突の点列がある。口縁部～胴部の文様は、無文部が文様として器面



No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	分類	写真図版
1	深鉢	Ⅵa層	外面：縄（R）の側面圧痕文（緩い弧状）、斜位の短沈線文。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。摩滅。	Ⅰ類	14－1
2	深鉢	Ⅵa層	平縁＋指頭状圧痕。外面：結束第1種羽状縄文（LR・RL）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	14－2
3	深鉢	Ⅵa層	外面：結束第1種羽状縄文（LR・RL）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	14－3
4	深鉢	Ⅵa層	外面：結束第1種羽状縄文（LR・RL-0段多条-）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。補修孔。	Ⅰ類	14－4
5	深鉢	Ⅵa層	外面：非結束羽状縄文（LR、RL-0段3条－横回転）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	14－5
6	深鉢	Ⅵa層	外面：非結束羽状縄文（RLR^3、LRL^3-1段3条－横回転）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。摩滅。	Ⅰ類	14－6
7	深鉢	Ⅵa層	外面：非結束羽状縄文（LR、RL横回転）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。摩滅。	Ⅰ類	14－7
8	深鉢	Ⅵa層	外面：非結束羽状縄文（LR、RL-0段3条－横回転）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。摩滅。	Ⅰ類	14－8
9	深鉢	Ⅵa層	外面：交差状縄文（LR・RL-0段3条-横回転）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	14－9
10	深鉢	Ⅵa層	外面：交差状縄文（LR-0段多条-横回転）。内面：ナデ。胎土：繊維・海綿状骨針を含む。	Ⅰ類	14－10
11	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（RL）＋結節文。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。摩滅。	Ⅰ類	14－11
12	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（RL）＋結節文。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	14－12
13	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（RL)＋結節文。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	14－13
14	深鉢	Ⅵa層	外面；縄文（RL？）＋結節文。内面：ミガキ、炭化物付着。胎土：繊維を含む。摩滅。	Ⅰ類	14－14
15	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（RL)＋結節文。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	14－15
16	深鉢	Ⅵa層	平縁。外面：側面環付。内面：ナデ。摩滅。	Ⅰ類	14－16
17	深鉢	Ⅵa層	外面：組紐（LL左巻・LL右巻）回転文。内面：ナデ。胎土：繊維・海綿状骨針を含む。	Ⅰ類	14－17
18	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（LR-0段多条-）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	14－18
19	深鉢	Ⅵa層	外面：非結束羽状縄文（RL、LR横回転）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。摩滅。	Ⅰ類	14－19
20	深鉢	Ⅵa層	外面：縦走縄文（RL-0段多条-）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。摩滅。	Ⅰ類	14－20
21	深鉢	Ⅵa層	外面：交差状撚糸文（L）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	14－21

第23図　Ⅵa層中出土土器（1）

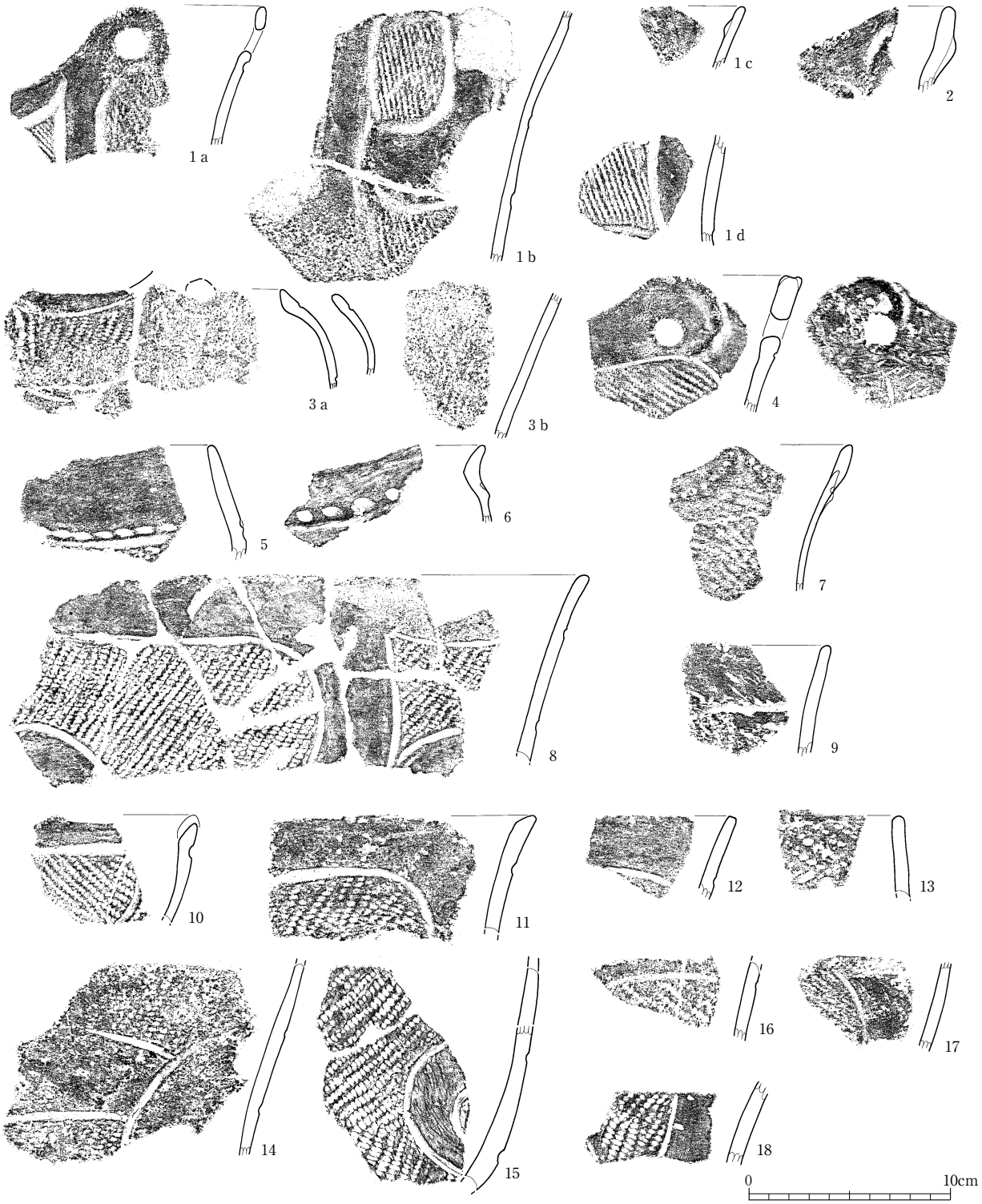
全体に展開し、地文部が楕円形状をなすもの（1）、方形状をなすもの（3）等がある。ヒレ状隆線文（突起）を伴いもの（1･4）等がある。第25図17は細線によって多重弧線文が描かれた袖珍土器である。同図18はやや上面観が楕円形状をなす袖珍土器である。同図22の底面には、ミガキ残された部分に木葉痕を残し、さらに剥落部にも木葉痕が残されている。

第26図１環状把手の周囲に刺突列を持つものや、同図2の縦位隆線文に2個1対の刻目文を持つものも同期のものと考えられる。

後世の攪乱等によって上位の層から混入したと見られる土器片が第26図3～10である。口縁部に縄文帯を持つもの（3）、薄手の無文土器（4）、刻目を伴う縦位隆線文（5）、横位弧状沈線文（6）、薄手の羽状縄文（7）などがある。

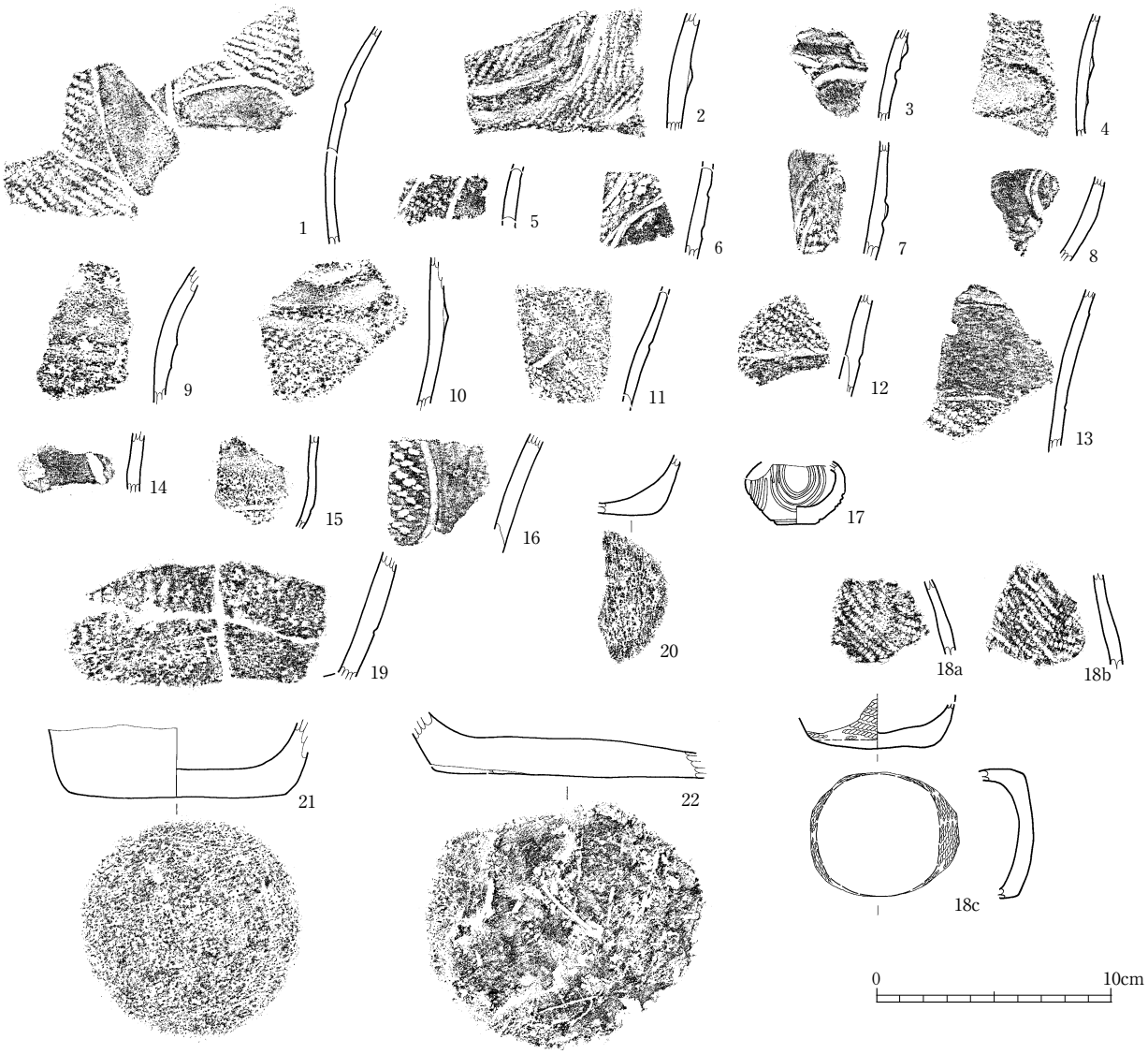
b．Ⅵb層上面～b層中出土土器（第27図）

Ⅵb層上面からややまとまった資料（1）が得られている。胴部全体に縄文が施され、底面近く



No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	分類	写真図版
1	深鉢	Ⅵa層	波状縁＋環状把手。外面：楕円形区画文。撚糸文（LR）→ヒレ状隆線文・沈線文。炭化物付着。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－22
2	深鉢	Ⅵa層	波状縁＋環状把手。隆線文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－23
3	深鉢	Ⅵa層	平縁＋環状把手。外面：方形区画文の一種。沈線文→縄文（RL－0段3条）。内面：ミガキ。被熱による赤変顕著。	Ⅱ類	14－24
4	深鉢	Ⅵa層	平縁＋環状把手。環状部の内外面にヒレ状隆線文。外面：縄文（LR）→ミガキ、沈線文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－25
5	深鉢	Ⅵa層	波状縁。外面：沈線文→縄文（LR）。刺突文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－26
6	深鉢	Ⅵa層	波状縁。外面：口縁部に平行する弧状隆線文＋刺突文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－27
7	深鉢	Ⅵa層	波状縁。外面：口縁部に平行する弧状隆線文＋円形竹管文、縄文（LR？）。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－28
8	深鉢	Ⅵa層	平縁。外面：クランク状文の一部、縄文（RLR）→ミガキ・沈線。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－29
9	深鉢	Ⅵa層	平縁。外面：ケズリ→ミガキ。内面：ナデ。	Ⅱ類	14－30
10	深鉢	Ⅵa層	平縁＋突起。外面：縄文（LR）→沈線文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－31
11	深鉢	Ⅵa層	平縁。外面：縄文（RLR）→沈線文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－32
12	深鉢	Ⅵa層	平縁。外面：縄文（不明）→沈線文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－33
13	深鉢	Ⅵa層	平縁。外面：縄文（LRL）。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－34
14	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（RLR）→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	14－35
15	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（RL）→沈線文→ミガキ。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－36
16	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（LR）→沈線文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－37
17	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（LR）→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	14－38
18	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（RL）、ミガキ→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	14－39

第24図　Ⅵa層中出土土器（2）

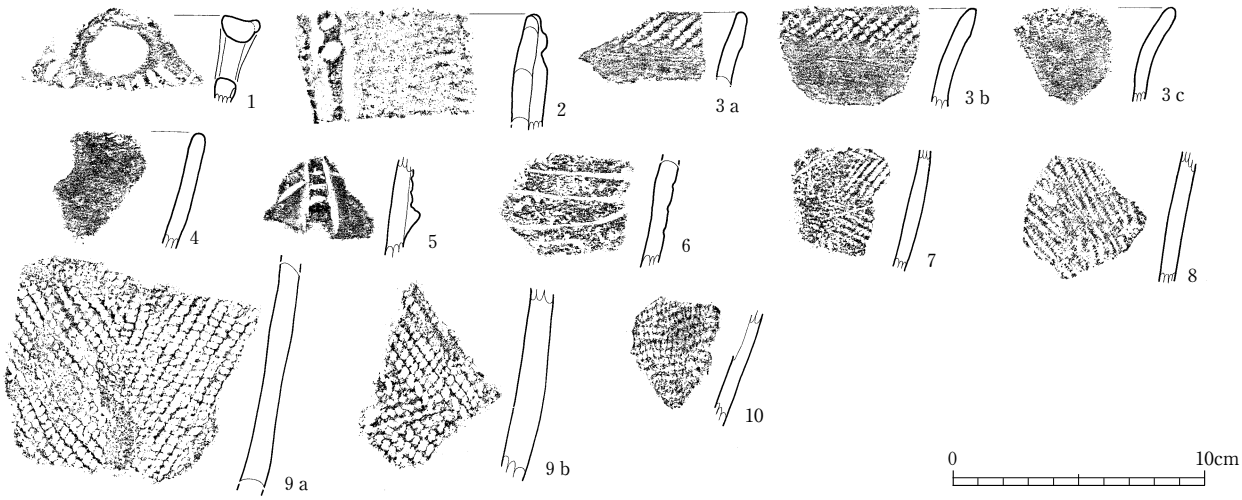


No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	分類	写真図版
1	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（LR）→ミガキ・沈線文。炭化物付着。内面：ナデ。	Ⅱ類	14－40
2	深鉢	Ⅵa層	外面：クランク状文の一部？、隆線文→縄文（LRｒ横～斜回転）→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	14－41
3	深鉢	Ⅵa層	外面：ヒレ状隆線文→沈線文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－42
4	深鉢	Ⅵa層	外面：ヒレ状隆線文。縄文（LR）。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－43
5	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（LR）→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	14－44
6	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（RLR）→沈線文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	14－45
7	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（LR-0段多条-）。内面：ナデ。	Ⅱ類	14－46
8	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文、隆線文、沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	14－47
9	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（？）、隆線文。内面：ナデ。摩滅。	Ⅱ類	14－48
10	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（RLR）→隆線文・ミガキ。内面：ナデ。摩滅。	Ⅱ類	14－49
11	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（LR）→沈線文。内面：ナデ。摩滅。	Ⅱ類	14－50
12	深鉢	Ⅵa層	外面：沈線文→縄文（LR）。内面：ナデ。	Ⅱ類	14－51
13	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（LR）→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	14－52
14	深鉢	Ⅵa層	外面：沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	15－1
15	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文？、沈線文。内面：ミガキ。摩滅。	Ⅱ類	15－2
16	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（LRL）、ミガキ→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	15－3
17	袖珍土器	Ⅵa層	外面：多重弧線文（3単位）。内面：手捏ね状。胎土：白色砂顕著。	Ⅱ類	15－4
18	袖珍土器	Ⅵa層	外面：縄文（LR）。内面：ナデ、一部手捏ね状。	Ⅱ類	15－5
19	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（LR？）。内面：ナデ。摩滅。	Ⅱ類	15－6
20	深鉢	Ⅵa層	外面：ナデ。底面：摩滅。内面：ナデ。	Ⅱ類	15－7
21	深鉢	Ⅵa層	外面：ナデ。底面：摩滅。内面：ナデ。	Ⅱ類	15－8
22	深鉢	Ⅵa層	外面：ナデ。底面：木葉痕。内面：ナデ。	Ⅱ類	15－9

第25図　Ⅵa層中出土土器（3）

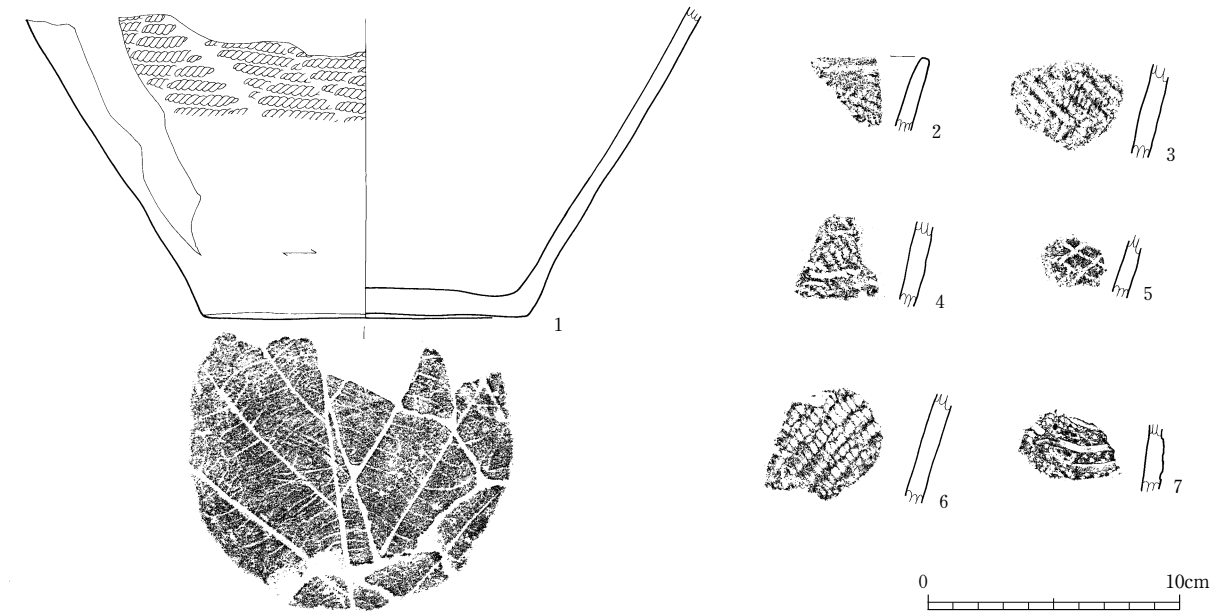
にミガキが施される深鉢形土器である。底面には木葉痕が残されている。

Ⅵb層中は6点図化した。うち、5点が繊維土器である。7は繊維を含まない多条沈線による文様が描かれており、より上位の層からの混入の可能性がある土器である。同一個体と見られる破片がⅤ層中（第28図11）にある。



No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	分類	写真図版
1	深鉢	Ⅵa層	環状把手（内面の無文帯と外面の無文帯がメビウス環状につながる）。 外面：沈線文・刺突文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	15－10
2	深鉢	Ⅵa層	平縁。外面：横走縄文（LRL３－1段多条－）→縦位隆線文→刻目文。内面：ナデ。	Ⅱ類	15－11
3	深鉢	Ⅵa層	平縁。外面：縄文（LR）。内面：ナデ。	その他	15－12
4	深鉢	Ⅵa層	平縁。外面：無文（ミガキ）。内面：摩滅。	その他	15－13
5	深鉢	Ⅵa層	外面：縦位隆線文＋刻目文、沈線文。内面：ナデ。	その他	15－14
6	深鉢	Ⅵa層	外面：沈線文（横位、横位弧状）。内面：ナデ。	その他	15－15
7	深鉢	Ⅵa層	外面：非結束羽状縄文（LR、RL）。内面：ナデ。	その他	15－16
8	深鉢	Ⅵa層	外面：縄文（RL－0段多条-）。内面：ナデ。	その他	15－17
9	深鉢	Ⅵa層	外面：同一原体による羽状縄文（RLR縦回転・横回転）。内面：ナデ。	その他	15－18
10	深鉢	Ⅵa層	外面：横走縄文（LR斜回転）。内面：摩滅。	その他	15－19

第26図　Ⅵa層中出土土器（4）



No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	分類	写真図版
1	深鉢	Ⅳb層上面一括	外面：縄文（LR）。底面：木葉痕。内面：ナデ。	Ⅱ類	15－20
2	深鉢	Ⅵb層中	平縁。外面：縄文（RL→LR重複施文）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	15－21
3	深鉢	Ⅵb層中	外面：非結束羽状縄文（LR、RL）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	15－22
4	深鉢	Ⅵb層中	外面：縄文（RL）＋結節文。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	15－23
5	深鉢	Ⅵb層中	外面：網目状撚糸文（L）。内面：ミガキ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	15－24
6	深鉢	Ⅵb層中	外面：縄文（LR）。内面：ナデ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	15－25
7	深鉢	Ⅵb層中	外面：縄文（LR）→沈線文。内面：ミガキ。	その他	15－26

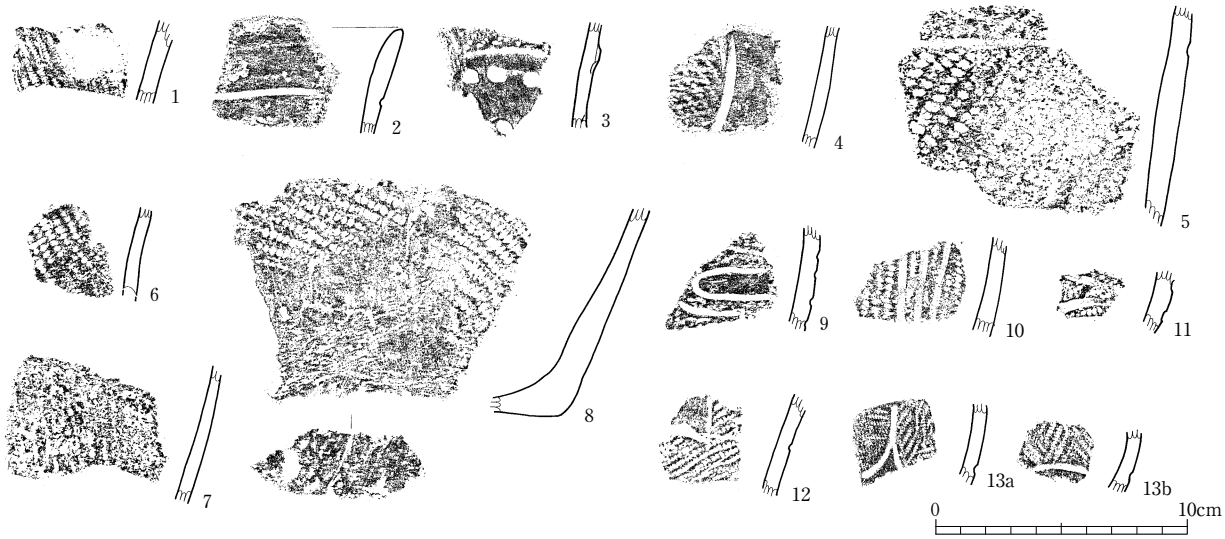
第27図　Ⅵb層上面～b層中出土土器

④　**Ⅴ層**（第28図）

古代の遺物とともに出土した土器片である。縄文時代前期初頭～後期中葉までの土器があり、再堆積したものである。

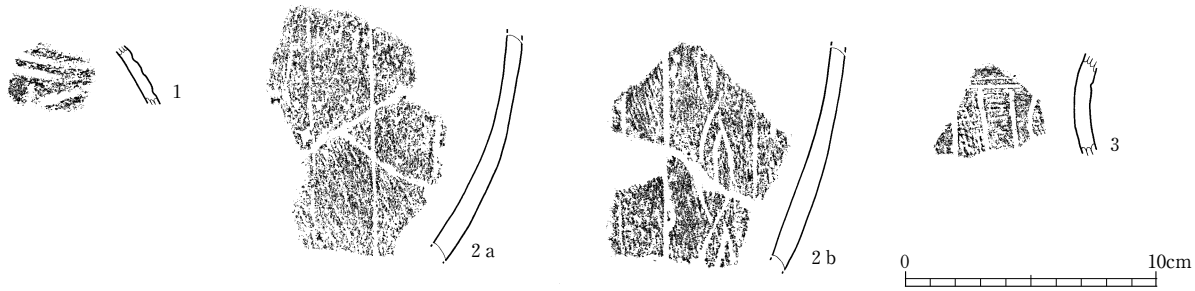
⑤　**南側Ⅴｃ層**（第29図）

南側の調査区Ⅴｃ層中から１～３の土器が出土した。１は壺形土器、２・３は縦位の連鎖状沈線文の施された深鉢形土器である。調査区が離れており、北側調査区との層位的な関係は不明である。



No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	分類	写真図版
1	深鉢	Ⅴ層中	外面：縄文（RL-0段多条-横回転）。内面：ミガキ。胎土：繊維を含む。	Ⅰ類	15－27
2	深鉢	Ⅴ層中	平縁。縄文（LR？）、沈線文。内面：ミガキ。摩滅。	Ⅱ類	15－28
3	深鉢	Ⅴ層中	外面：縄文（RL）→隆線文、ミガキ、沈線文、刺突文。内面：ミガキ。	Ⅱ類	15－29
4	深鉢	Ⅴ層中	外面：縄文（LR縦回転→LR横回転の重複施文）→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	15－30
5	深鉢	Ⅴ層中	外面：縄文（RLR-0段多条-）→沈線文。内面：ナデ。	Ⅱ類	15－31
6	深鉢	Ⅴ層中	外面：縄文（LR）。内面：ナデ。	Ⅱ類	15－32
7	深鉢	Ⅴ層中	外面：縄文？。摩滅。	Ⅱ類	15－33
8	深鉢	Ⅴ層中	外面：縄文（LR）。底面：木葉底。内面：ナデ。	Ⅱ類	15－34
9	深鉢	Ⅴ層中	外面：縄文（RL）→沈線文。内面：ナデ。	その他	15－35
10	深鉢	Ⅴ層中	外面：縄文（LR）→多条沈線文。内面：ナデ。	その他	15－36
11	深鉢	Ⅴ層中	外面：縄文（LR）→沈線文。内面：ミガキ。	その他	15－37
12	深鉢	Ⅴ層中	外面：縄文（LR）→沈線文。内面：ナデ。	その他	15－38
13	深鉢	Ⅴ層中	外面：同一原体による羽状縄文（RL）→沈線文。内面：ナデ。	その他	15－39

第28図　Ⅴ層中出土土器

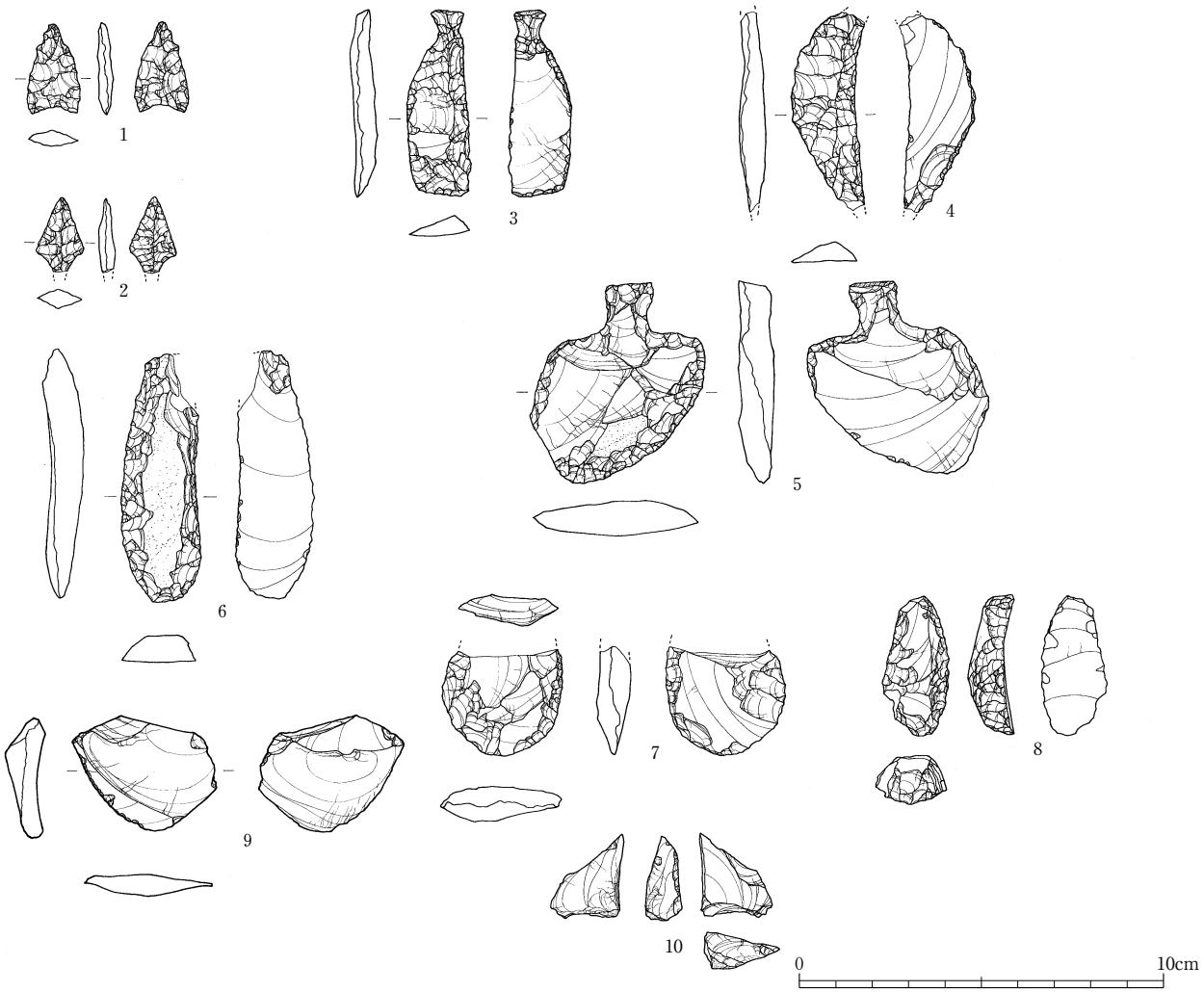


No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	分類	写真図版
1	深鉢	南側Ⅴc層中	外面：沈線文。内面：ミガキ。摩滅。	その他	15－40
2	深鉢	南側Ⅴc層中	外面：撚糸文（L？）→沈線文。内面：ミガキ。摩滅。	その他	15－41
3	深鉢	南側Ⅴc層中	外面：撚糸文（R）→沈線文。内面：ナデ。	その他	15－42

第29図　南側Ⅴc層中出土土器

⑥　出土石器（第30図）

各遺構・遺物包含層・基本層序から出土した縄文時代の石器である。石鏃（1･2）、石匙（3～5）、石篦（6～8）、不定形石器（9･10）がある。土器の年代から、縄文時代前期初頭、中期末葉～後期中葉に属するものと考えられる。



No.	器　種	出土遺構・層位	特　徴	長	幅	厚
1	石鏃	SX03包1層	凹基。珪化凝灰岩？	2.5	1.7	0.4
2	石鏃	Ⅴ層中	凹基。玉髄。	2.1	1.3	0.5
3	石匙	SD11堆積土	縦型。珪化凝灰岩？	5.1	1.7	0.6
4	石匙	Ⅵ層中	縦型。珪化凝灰岩？ つまみ部欠損。	(5.5)	1.9	0.6
5	石匙	遺構確認	横型。珪質頁岩。	5.5	4.9	1.0
6	石篦？	Ⅵ層中	一部欠損。珪質頁岩。	6.8	2.2	1.0
7	石篦	SI02堆積土	基部欠損。珪質頁岩。	(2.9)	(3.3)	(0.9)
8	石篦	Ⅴ層中	新しいキズ。珪質頁岩。	(3.8)	1.8	1.1
9	剥片	Ⅴ層中	微細剥離痕ある剥片。珪質頁岩。	3.1	3.9	1.1
10	剥片	Ⅴ層中	微細剥離痕ある剥片。黒曜石。	2.3	2.0	1.0

第30図　出土石器

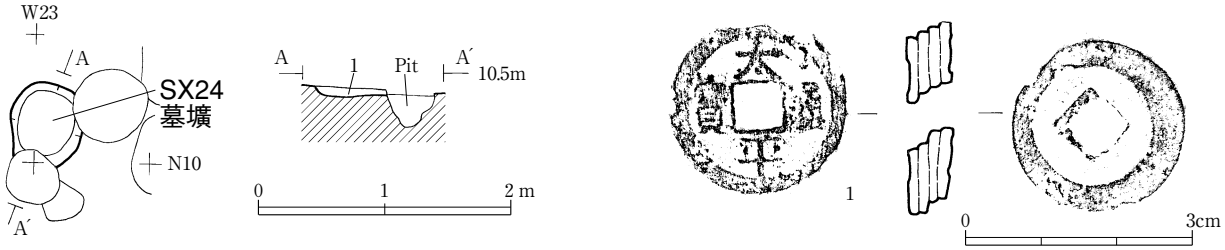
C. 中近世以降の遺構と遺物

中近世の遺構として、SX24墓壙１基、SB28～38掘立柱建物跡11棟以上がある。

１．墓壙

【SX24墓壙】（第31図）

中近世以降の掘立柱建物跡に壊され、さらに現代の建物基礎等によって大きく削平されている。平面形は長軸66cm以上、短軸56cmの楕円形で、深さ６cm、断面形は皿状を呈している。埋土は地山ブロックを含む暗オリーブ褐色シルトである。副葬品として六道銭が出土している。六道銭は錆で４枚密着しており、表面の１枚しか文字を読み取ることができない。「太平通寶」と記された北宋銭である。銭の状態はいずれも良好で、薄く磨耗したいわゆる「鐚銭」と呼ばれる粗悪銭ではない。初鋳は976年である。



番号	土　色	土　性	備　考
1	暗オリーブ褐色（2.5Y4/6）	粘土	地山土主体。地山小礫を含む。埋め戻し。SX24埋土。

第31図　SX24墓壙・出土遺物

２．掘立柱建物跡

現在の建物敷地の攪乱・盛土を剥ぐと、柱穴群が検出された。旧河道の北側で、現河道の南北にまたがって検出された。主要な柱穴の切り合い関係から大きく３時期に分けられる。柱穴の分布が立ち退いた現在の建物の範囲と概ね一致しており、現建物に先行する建物群と考えられる。

建物規模などについては第１表のとおりである。

【SB28掘立柱建物跡】（第32図）

主柱は概ね二つの柱穴が切り合っており、規模を変えて１回建て替えが行われている。新しい時期に西側に２間拡張している。Ｐ１～８の部分が主屋に相当する部分で、東西４間、南北１間である。Ｐ9～11の２間分は南縁ないしは南庇である。

【SB36掘立柱建物跡】（第32図）

SB28の旧建物跡の柱列の延長上に検出された東西２間・南北２間の建物跡である。位置関係からSB28旧建物跡に接続していた可能性もある。

【SB33掘立柱建物跡】（第32図）

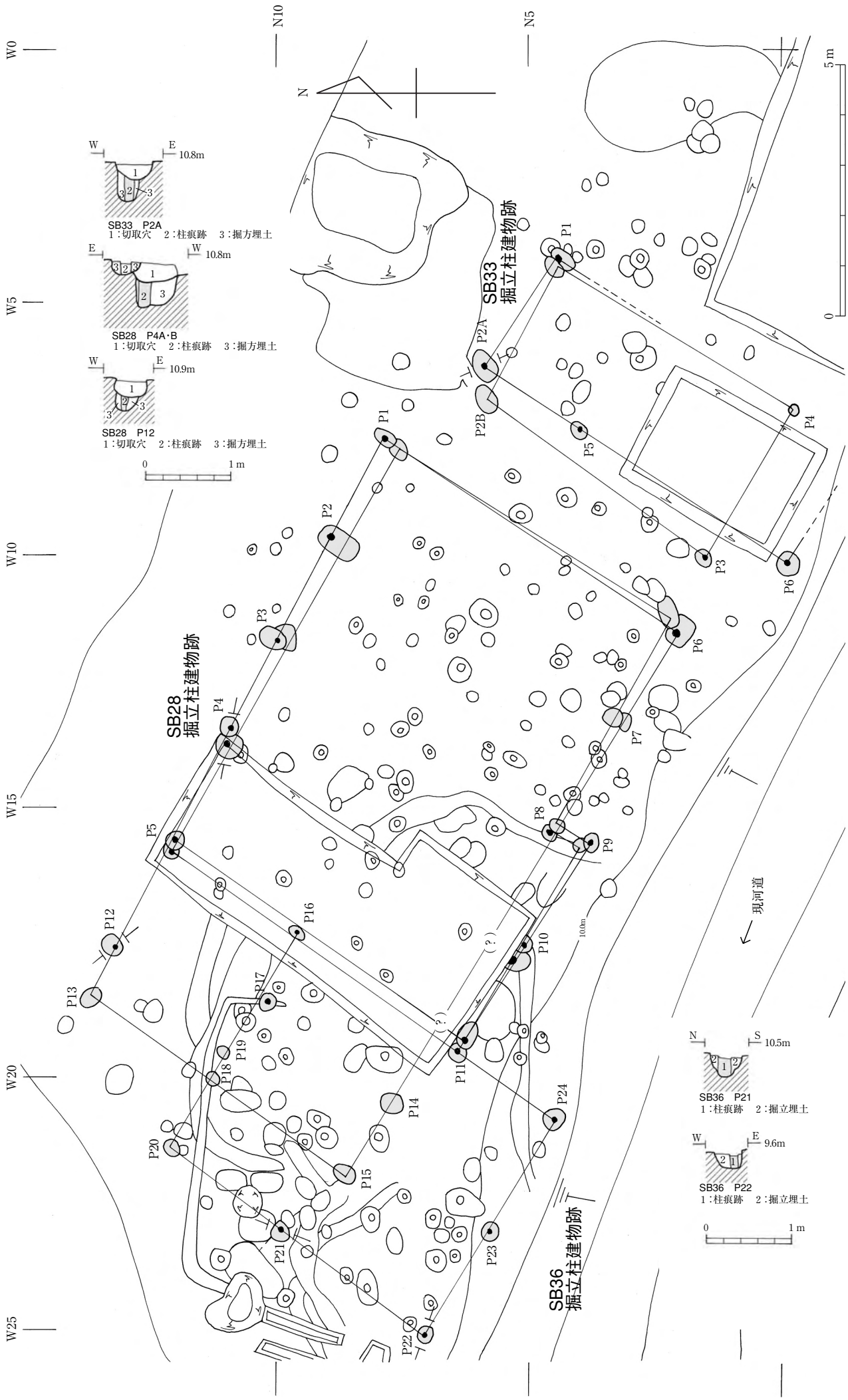
主柱はほぼ同一位置で建て替えが行われている。東西１間、南北１間以上の細長い建物跡である。

【SB29掘立柱建物跡】（第33図）

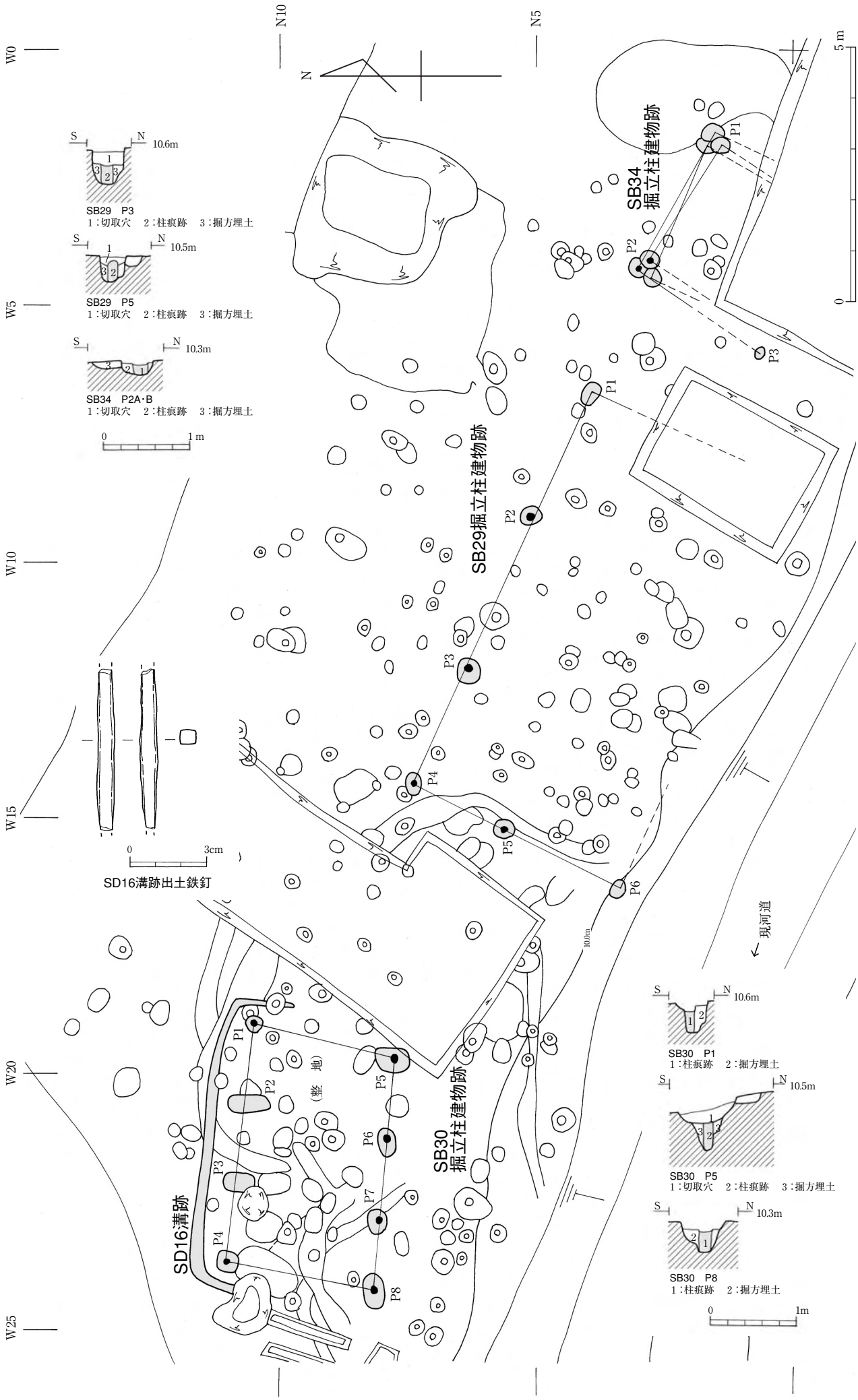
２間×３間の東西棟が主屋に相当する。建て替えは行われていない。

【SB30掘立柱建物跡】（第33図）

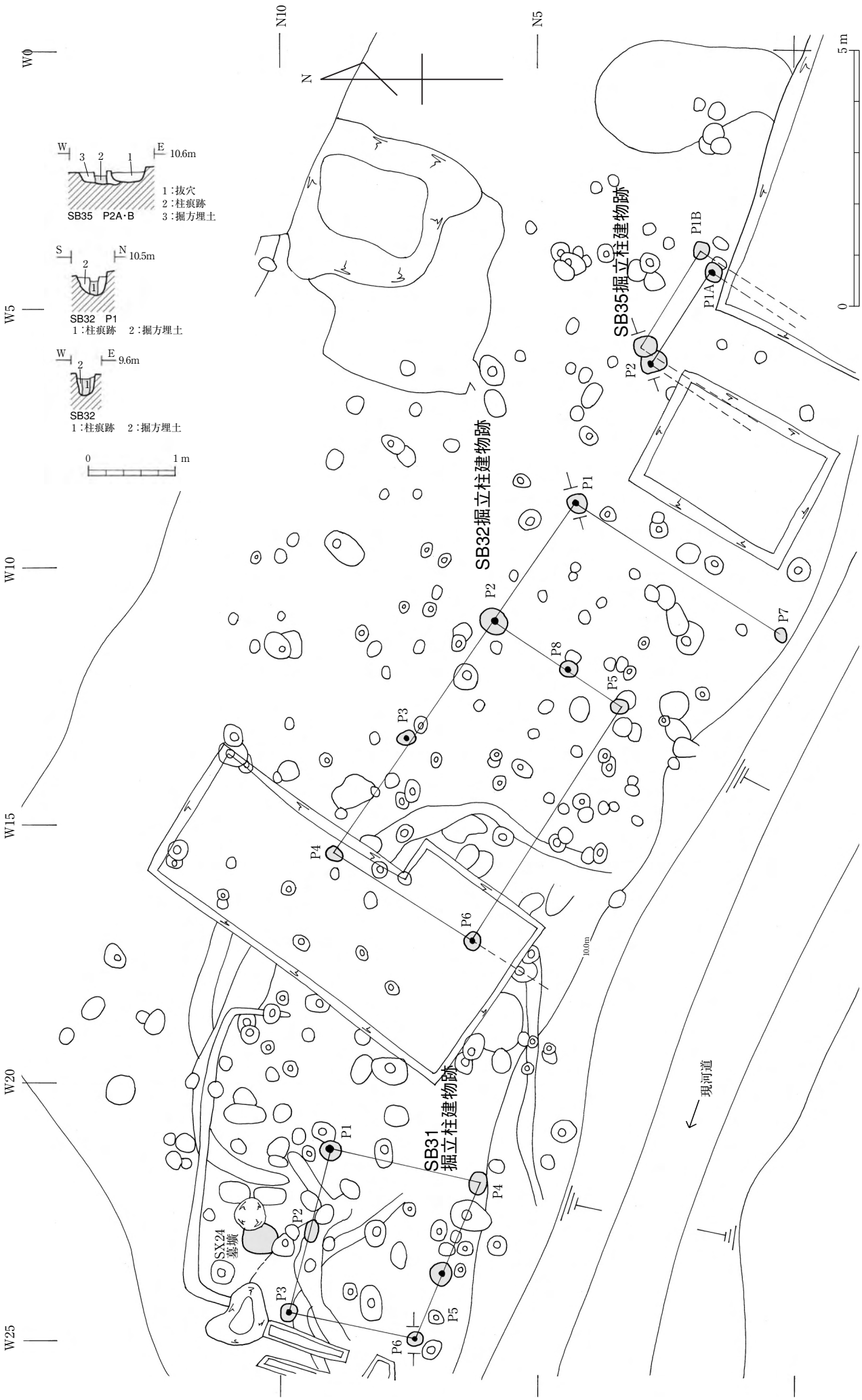
１間×３間の東西棟である。雨落ち溝SD16を伴う。北側では一部整地層が認められた。建て替えは行われていない。鉄釘１本がSD16から出土している。



第32図　中近世以降の掘立柱建物跡（1）（北側調査区）



第33図　中近世以降の掘立柱建物跡（2）（北側調査区）



第34図　中近世以降の掘立柱建物跡（3）（北側調査区）

【SB34掘立柱建物跡】（第33図）

ほぼ同じ位置で2回建て替えが行われている。東西1間、南北1間以上の建物である。SB29主屋北側桁行とほぼ同じ柱列となっている。

【SB32掘立柱建物跡】（第34図）

南北1間以上、東西3間の東西棟が主屋に相当する。建て替えは行われていない。

【SB31掘立柱建物跡】（第34図）

1間×2間の東西棟である。建て替えは行われていない。位置関係ではSX24墓壙と重複しない建物跡になる。

【SB34掘立柱建物跡】（第34図）

北妻1間の建物跡と見られる。ほぼ同一位置で建て替えが行われている。SB32主屋北側桁行とほぼ同じ柱列となっている。

【SB37掘立柱建物跡】（第35図）

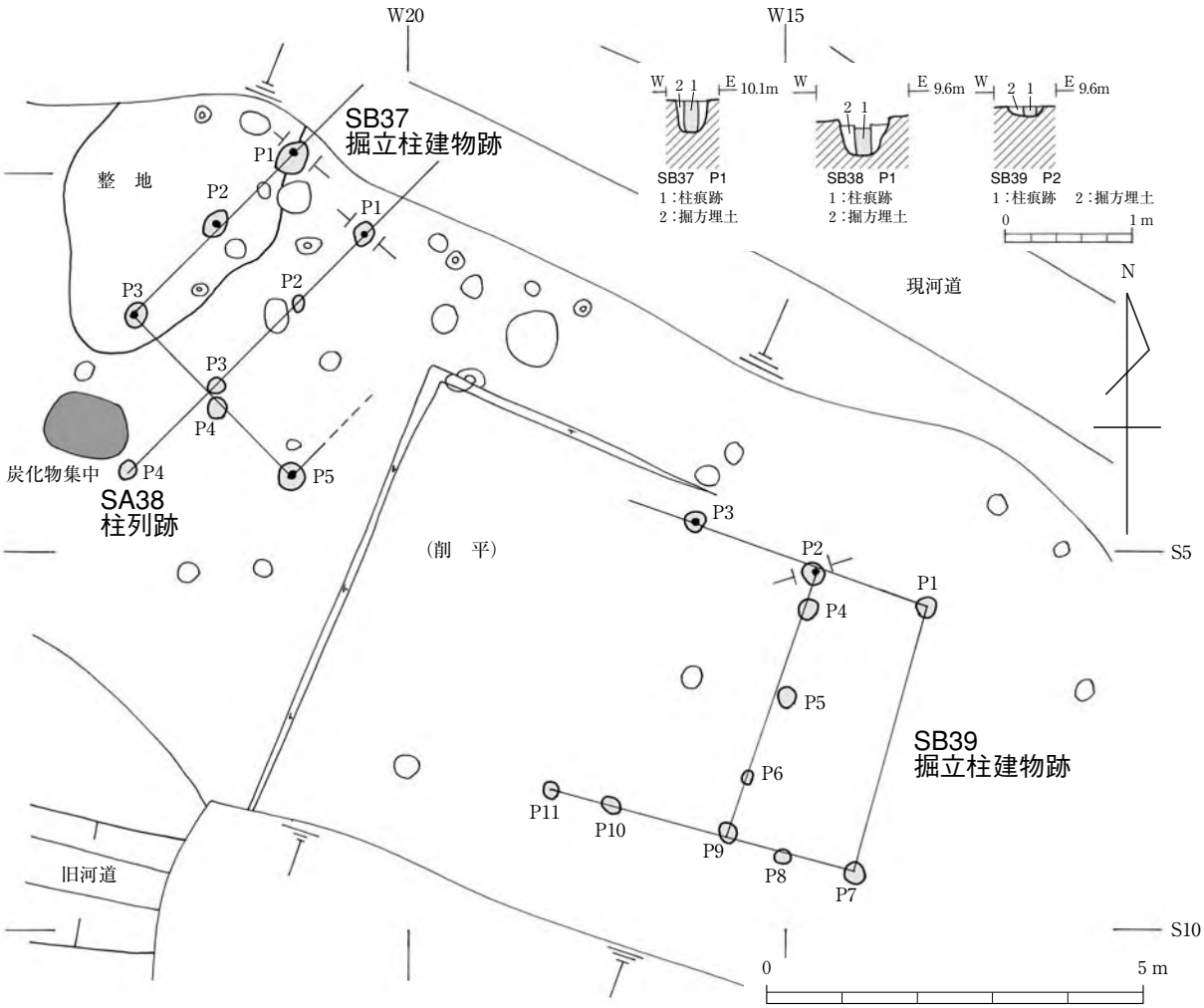
2間×2間以上の建物跡である。Ｐ1～3は整地層を切っている。

【SA38柱列跡】（第35図）

Ｐ1～4の柱列跡である。詳細は不明である。

【SB39掘立柱建物跡】（第35図）

2間×2間以上の建物跡である。補助柱を伴っている。



第35図　中近世以降の掘立柱建物跡（4）（南側調査区）

遺構名	SB28	SB36	SB33
規模	東西 4 間×南北 1 間	東西 2 間×南北 2 間	東西 1 間×南北 1 間以上
方向	東西棟 E－30°－N（北桁）	南北棟 E－30°－N（北妻）	南北棟 E－30°－N（北妻）
建て替え	1 回	なし	1 回
桁行	総長9.0m 2.5、2.2、2.1、2.2m	総長6.1m 3.5、2.6m	総長7.1m 2.3、（4.8攪乱のため不明）m
梁行	6.5m（東妻）	5.0m（南妻）	2.6m（北妻）
備考	主屋相当・新期に拡幅	SB28旧建物跡に接続か？	

遺構名	SB29	SB30	SB34
規模	東西 3 間×南北 2 間	東西 3 間×南北 1 間	東西 1 間×南北 1 間以上
方向	東西棟 E－25°－N（北桁）	東西棟 E－8°－N（北桁）	南北棟 E－28°－N（北妻）
建て替え	なし	なし	2 回
桁行	総長8.5m 2.4、3.2、2.9m	総長4.6m 1.5、1.5、1.6m	攪乱のため不明
梁行	4.6m（西妻）	2.8m（東妻）	2.6m（北妻）
備考	主屋相当	SD16雨落溝を伴う	

遺構名	SB32	SB31	SB35
規模	東西 3 間×南北 2 間？	東西 2 間×南北 1 間	東西 1 間×南北 1 間以上
方向	東西棟 E－22°－N（北桁）	東西棟 E－15°－N（北桁）	南北棟 E－30°－N（北妻）
建て替え	なし	なし	1回
桁行	総長8.2m 2.6、2.8、2.8m	総長3.3m 1.6、1.7m	攪乱のため不明
梁行	4.8m（東妻）	3.0m（東妻）	2.2m（北妻）
備考	主屋相当		

遺構名	SB37	SB39	SA38
規模	東西 2 間×南北 2 間以上	東西 2 間以上×南北 2 間	3 間以上
方向	南北棟 E－45°－S（西桁）	東西棟 E－20°－N（北桁）	E－45°－S
建て替え	なし	なし	なし
桁行	総長3.4m以上 1.6、1.5、（　）m	総長3.2m以上	総長4.5m以上 1.5、1.7m
梁行	2.8m（南妻）	3.6m（東妻）	
備考	整地層を切る		

第 1 表　中近世以降の掘立柱建物跡一覧

Ⅲ　考察

１．遺物について

出土遺物には、土師器、須恵器、赤焼土器、瓦、鉄製品、石製品、縄文土器、石器、古銭などがある。

(1) 古代の土器

古代の土器には、ロクロ調整土師器、須恵器、赤焼土器がある。竪穴住居跡からまとまって出土した土器は少ないため、種類ごとの分類は行わず、出土遺構ごと個別に年代を検討することにする。

赤焼土器は、坏類がSI01・SI06・SI09・SI10竪穴住居跡の暗渠内堆積土や床、貯蔵穴から出土している。比較的大型のもので、高く外側へ開く台の付くものもある。赤焼土器坏類の出現は10世紀前葉ころ（多賀城跡調査研究所：1998）とされており、これらの住居跡出土遺物もほぼ同様の年代観をもって捉えることができる。

SI02竪穴住居跡では、床面から土師器と須恵器が出土しているほか、暗渠の蓋として使われたロクロ調整の土師器甕が出土している。土師器はすべてロクロ調整のもので、坏は体部下半に手持ちヘラケズリを施したもの、暗渠の蓋として使われた甕は体部下半部にヘラ削り調整を施したものである。須恵器は回転ヘラ切り・付け高台の須恵器壷片と甕の体部破片の転用硯がある。また、堆積土から須恵器坏の底部回転糸切りで調整が施されていないものと回転ヘラ切りのものが出土している。このような特徴を持つ土師器はこれまでの土器研究によれば、９世紀代以降のものと考えられ、非ロクロ調整の土師器と赤焼土器がともに出土していないことから、ほぼ９世紀代に限定することができる。

(2) 瓦

SI02竪穴住居跡の暗渠には、軒平瓦を含む平瓦が多数使用されていた。瓦当文様は笵による均整唐草文である。類似の資料（第36図）は桃生城跡（註１）や本遺跡に隣接する宗全山遺跡（註２）で発見されている。

(3) 縄文土器

縄文土器はⅥｂ層から胎土に繊維を含む前期の土器（Ⅰ類）とⅥａ層及びSX03遺物包含層・SX23土器埋設遺構から中期の土器（Ⅱ類）が出土している。その他、攪乱や表土から後期の土器が少量出土している。

①　Ⅰ類土器

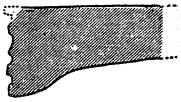
胎土に繊維を含む土器である。文様意匠に縄の側面圧痕文と短沈線文の組み合わせによるもの（第23図１）があり、地文の縄文に結束第1種・非結束の羽状縄文が多く見られる。こうした全般的な特徴は「上川名式」（伊東：1957）とされるものと一致し、前期初頭に位置づけられている。このほか、細谷Ｂ遺跡Ⅰ類土器の特徴として、ａ結節文（綾繰文）が横走するもの、ｂ網目状撚糸文、ｃ組紐回転文、ｄ側面環付がある点などを指摘することができる。これらの特徴は上川名式後半ころのものと考えられる。このうち、結節文は室浜貝塚・金山貝塚・左道貝塚（遺跡）など宮城県北半の貝塚や遺跡でより顕著な特色となっている。

1

2

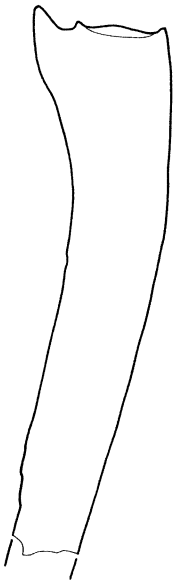
（縮尺不詳）

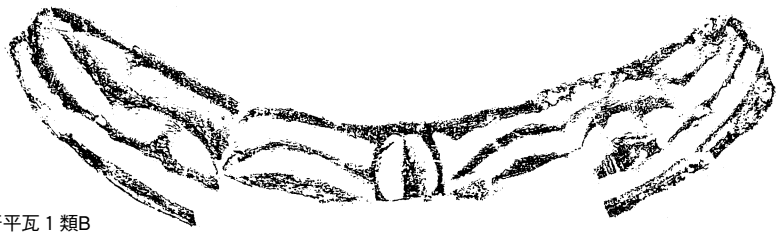
1・2：宗全山遺跡（加藤：1964）



軒平瓦１類A

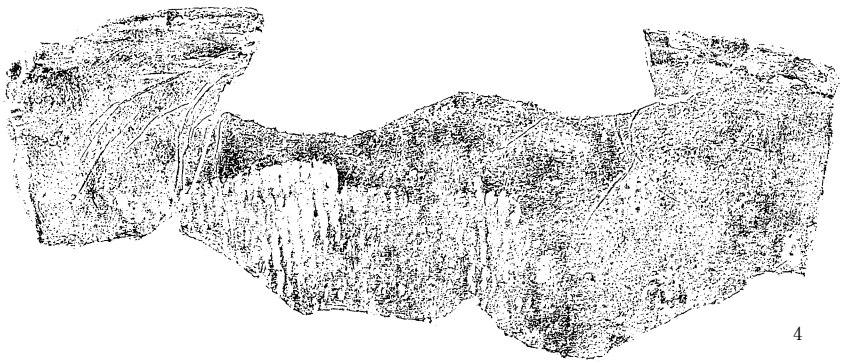
3



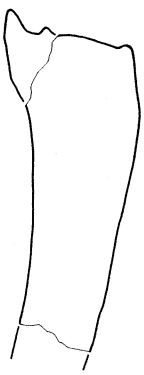


0　5　10cm

軒平瓦１類B



4



3・4：桃生城跡SB16東脇殿（多賀城跡調査研究所：1995）

第36図　軒平瓦の類例

② Ⅱ類土器

土器の文様は無文部が入り組み状に展開し、方形区画文・楕円形区画文・クランク状文、あるいはその一種で構成されるもので、「大木10式」（山内：1937）とされるものである。なかでも、いわゆるアルファベット状縄文などが展開する大木10式前半期のものは含んでおらず、中期末葉の「大木10式後半期」（須藤：1985）の特色をよく示している。環状把手やヒレ状隆線文(突起)もこの時期の一般的な特徴であり、矛盾しない。このほか、細谷Ｂ遺跡Ⅱ類土器の特徴として、①縄文・撚糸文、隆線文、沈線文の手順が一定ではなく、縄文・撚糸文→隆線文と逆の隆線文→縄文・撚糸文、あるいは縄文・撚糸文→沈線文と逆の沈線文→縄文・撚糸文の手順が存在する。このことはすなわち、一概に地文の縄文・撚糸文を全体に施してから磨り消しのミガキを加えていく狭義の「磨り消し縄文」だけではなく、最終手順で縄文や撚糸文を充填する手順が存在することを示している。②隆線や沈線文に刺突文が並列するものや、隆線上に２個１対の刻目文が施されるものが存在する。こうした特徴は宮城県北部の宮戸島貝塚梨木囲貝塚（芳賀：1968）や石巻市南境貝塚７トレンチ（後藤：2004）において把握される一方、宮城県南部の白石市菅生田遺跡や七ヶ宿町大梁川遺跡ではほとんど認められず、宮城県北部と南部の地域差を示す特徴と考えられる。

③ その他の土器

このほかに、攪乱や再堆積によって入り込んだと見られる若干の縄文時代後期前葉～中葉の土器がある。

２．遺構について

今回の調査で発見された遺構は、古代では竪穴住居跡6軒ほか、縄文時代では土器埋設遺構１基、遺物包含層１箇所、中近世以降では墓壙１基、掘立柱建物跡11棟、柱列跡１条ほかを検出した。

ａ．古代

赤焼土器を伴うSI01・SI06・SI09・SI10竪穴住居跡は10C前半ころ、赤焼土器を伴わずロクロ調整甕の暗渠を持つSI02竪穴住居跡は９C代のものと考えられた。SI02竪穴住居跡は焼失住居であり、他の住居とは異なる様相を呈している。

ｂ．縄文時代

Ⅰ類：前期初頭、Ⅱ類：中期末葉ほかとして捉えられる土器が出土している。石器もほぼこの２時期のいずれかに属するものと考えられた。このうち、土器埋設遺構１基・遺物包含層１箇所が形成されたのは、Ⅱ類の中期末葉である。

ｃ．中近世以降

明確な出土遺物がSX24墓壙から出土した六道銭とSD16溝跡から出土した鉄釘のみで、遺構の時期を特定することは難しい。六道銭に用いられた渡来銭の流通時期も概ね新寛永出現以前の17C中葉ころまでとされており、渡来銭の出土が即座に中世まで遡ることを意味するものではない。一方では、「太平通寶」の初鋳が976年であることから、中世まで遡る可能性もまた否定できない。ここでは掘立柱建物跡・柱列跡も含めて、中近世以降の遺構として把握（註３）しておく。

註

（註１）桃生城跡の調査においても類似の瓦が出土している。多賀城跡調査研究所の第３次調査では、東脇殿の柱痕跡から軒平瓦（第36図3・4）が出土している。１類Aと隆線部分を箱彫りして改笵した１類Bとがある。今回、細谷B遺跡から出土した軒平瓦の瓦当文様の隆線部分は箱彫りにはなっておらず、桃生城跡１類Aに類似している。

（註２）宗全山遺跡は昭和30、31年ごろ飯野川高校桃生分校大場氏・高倉氏によって調査が行われ、その成果は昭和36年刊行の『桃生村誌』においても紹介（加藤:1961）されている。昭和40年代には一部開田工事が行われ、その際も多数の瓦が出土し、その一部は地元の郷土史家が保管している。かつて瓦が出土したという場所を確かめてみると、丘陵の中腹あたりの斜面地で、現在瓦片などは確認されない。地形から窯跡の存在も予想されるが、詳細不明である。

（註３）文献史料では、嘉永３年『風土記御用書上』中に見える太田村屋敷名の「細谷　百姓家一軒、屋敷跡一軒」に相当するものと思われるが、安永風土記などでは確認することができず、古くは異なる屋敷名で呼称されていた可能性もある。

Ⅳ　まとめ

①　今回の調査によって発見された遺構は、古代では竪穴住居跡６軒ほか、縄文時代では土器埋設遺構１基、遺物包含層１箇所、中近世以降では墓壙１基、掘立柱建物跡11棟、柱列跡１条ほかである。

②　古代の竪穴住居跡は焼失住居の１軒が９C代、他の５軒が10C前半ごろの年代で捉えられた。焼失住居の１軒の暗渠には、桃生城跡や隣接する宗全山遺跡で出土しているものと同様の瓦が用いられていた。

③　縄文時代は中期末葉の土器埋設遺構１基・遺物包含層１箇所が確認された。このほか、前期初頭や後期の遺物が認められた。出土遺物には縄文土器と石器がある。

④　中近世以降では、墓壙１基、掘立柱建物跡11棟、柱列跡１条ほかを検出した。出土遺物として鉄釘と六道銭がある。

図版1

1　遺跡全景（南東から）

2　SI01竪穴住居跡（南から）

3　SI01暗渠出口（西から）

4　SI02竪穴住居跡（南から）

5　SI02カマド部暗渠（南から）

1　SI06・SI08竪穴住居跡
（南西から）

2　SI06竪穴住居跡カマド
（南西から）

3　SI06竪穴住居跡遺物出土状況（南西から）

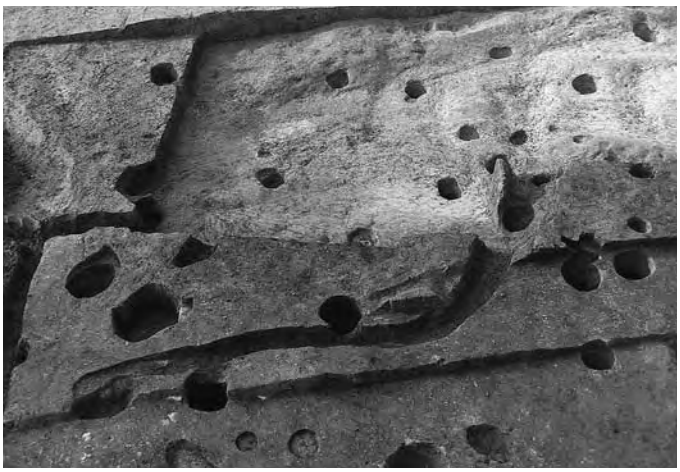
4　SI06竪穴住居跡煙道断面（南東から）

図版 3

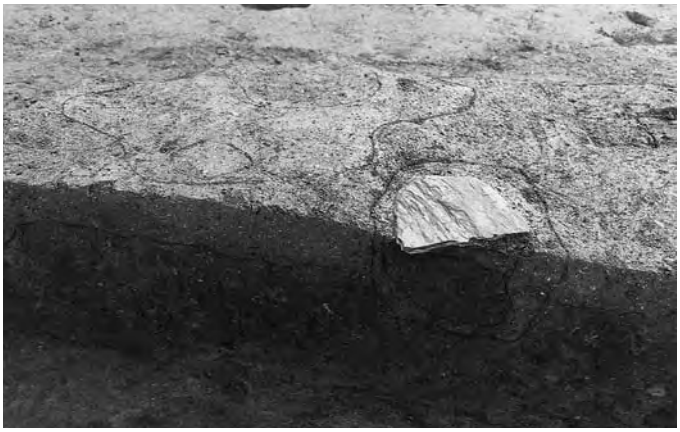
1　SI09竪穴住居跡（南から）

2　SI10竪穴住居跡（南から）

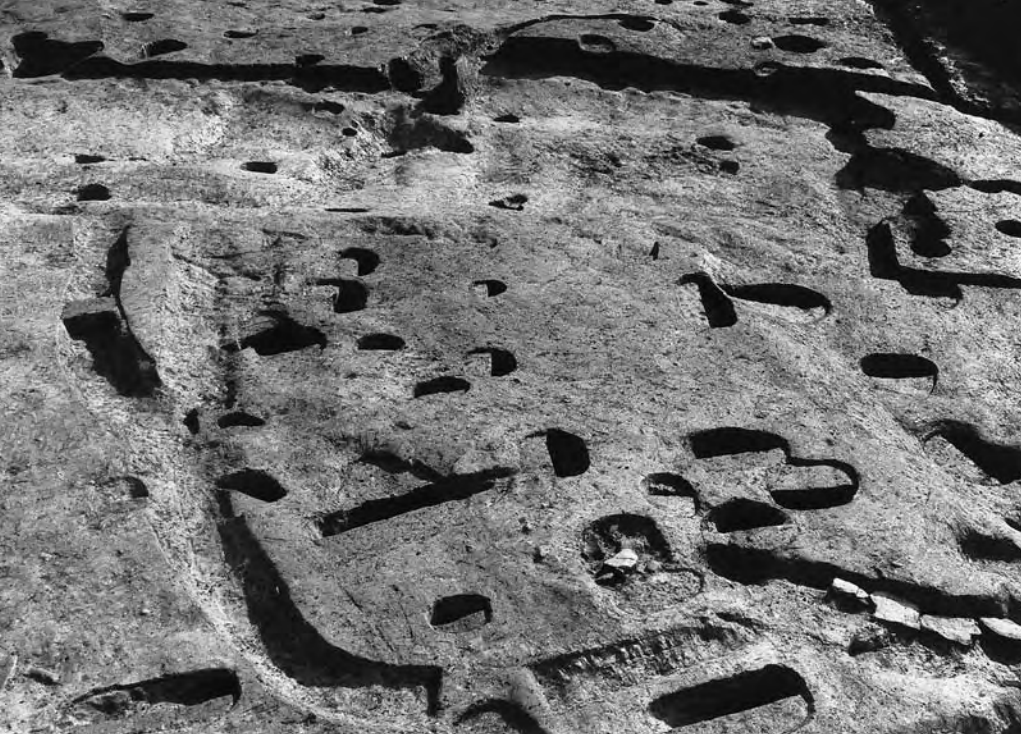
3　SI10竪穴住居跡貯蔵穴（東から）



4　SD18・SX05（東から）



5　SX17（西から）



1　SD21・SD22周辺（西から）

2　SX23土器埋設遺構（西から）

3　Ⅵb層上面土器出土状況（南から）

4　中近世以降の
掘立柱建物跡群（西から）

1　SX24墓壙（西から）

2　SB33掘立柱建物跡P 3 （南から）

3　SB29掘立柱建物跡P 5 ・SD18溝跡（南から）

4　SB29掘立柱建物跡P 3 （東から）

5　SB32掘立柱建物跡P 1 （東から）

6　SB32掘立柱建物跡P 8 （南から）

7　SB37掘立柱建物跡P 1 （南から）

8　SA38柱列跡P 1 （南から）

1

2

1 ～ 2 ：SI01竪穴住居跡出土遺物

1 ：赤焼土器坏
2 ：土師器高台坏

（scale 1 ： 3 ）

3

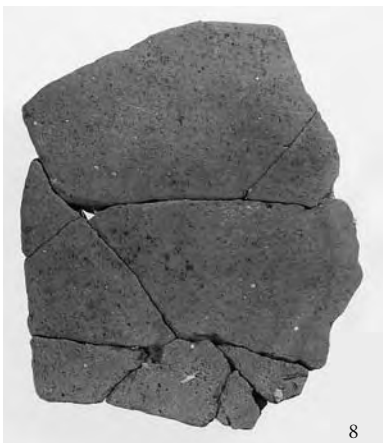
4

6

5 a

5 b

7


8

9

10

3 ～ 4 ：SI02竪穴住居跡堆積土
5 ～10：SI02竪穴住居跡床面

3 ～ 4 ：須恵器坏
5 ：転用硯（←須恵器甕
6 ：土師器坏
7 ：須恵器壺
8 ～ 9 ：被熱により赤変した須恵器甕
10：砥石　　（scale 1 ： 3 ）

SI01・SI02竪穴住居跡出土遺物（1）

1

2

3

4

1 ～ 4 ：SI02竪穴住居跡カマド部暗渠
5 ：SI02竪穴住居跡暗渠

1 ～ 4 ：土師器甕（scale 1 ： 3 ）
5 ：軒平瓦（scale 1 ： 4 ）

5 a

5 b

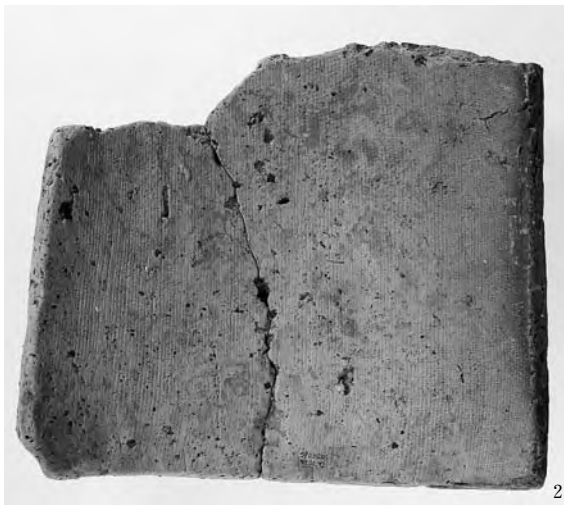
5 c

SI02竪穴住居跡出土遺物（2）

1 a

1 b

2 a


2 b

3 a

3 b

1 ～ 3 ：SI02竪穴住居跡暗渠　1 ～ 3 ：平瓦（scale 1 ： 4 ）

SI02竪穴住居跡出土遺物（3）

1 ～ 3 ：SI02竪穴住居跡暗渠　1 ～ 3 ：平瓦（scale 1 ： 4 ）

SI02　竪穴住居跡出土遺物（4）

1 a

1 b

2 a

2 b

3

4

1 ～ 4 ：SI02竪穴住居跡暗渠　1 ～ 2 ：平瓦　3 ～ 4 ：平石（scale 1 ： 4 ）

5

5 ：SI02竪穴住居跡暗渠出土瓦

SI02竪穴住居跡出土遺物（5）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13a

13b

14

15

17

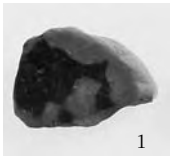
18

16

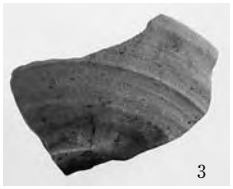
1～7：SI06竪穴住居跡出土遺物
8：SI08竪穴住居跡出土遺物
9～11：SI09竪穴住居跡出土遺物
12～18：SI10竪穴住居跡出土遺物

1・11・16：赤焼土器坏
2・7：須恵器坏
3：土師器高台坏
4～6：土師器甕
8・15・17：土師器坏
9～10：赤焼土器高台坏
13：土師器（両黒）耳皿
14：須恵器壺
12：鉄鎌
18：磨石

SI06・SI08・SI09・SI10竪穴住居跡出土遺物


1

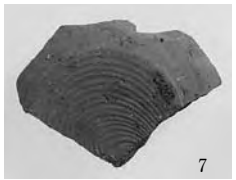
2


3

4

5

6


7

8

9

10

11

12

13

14a

14b

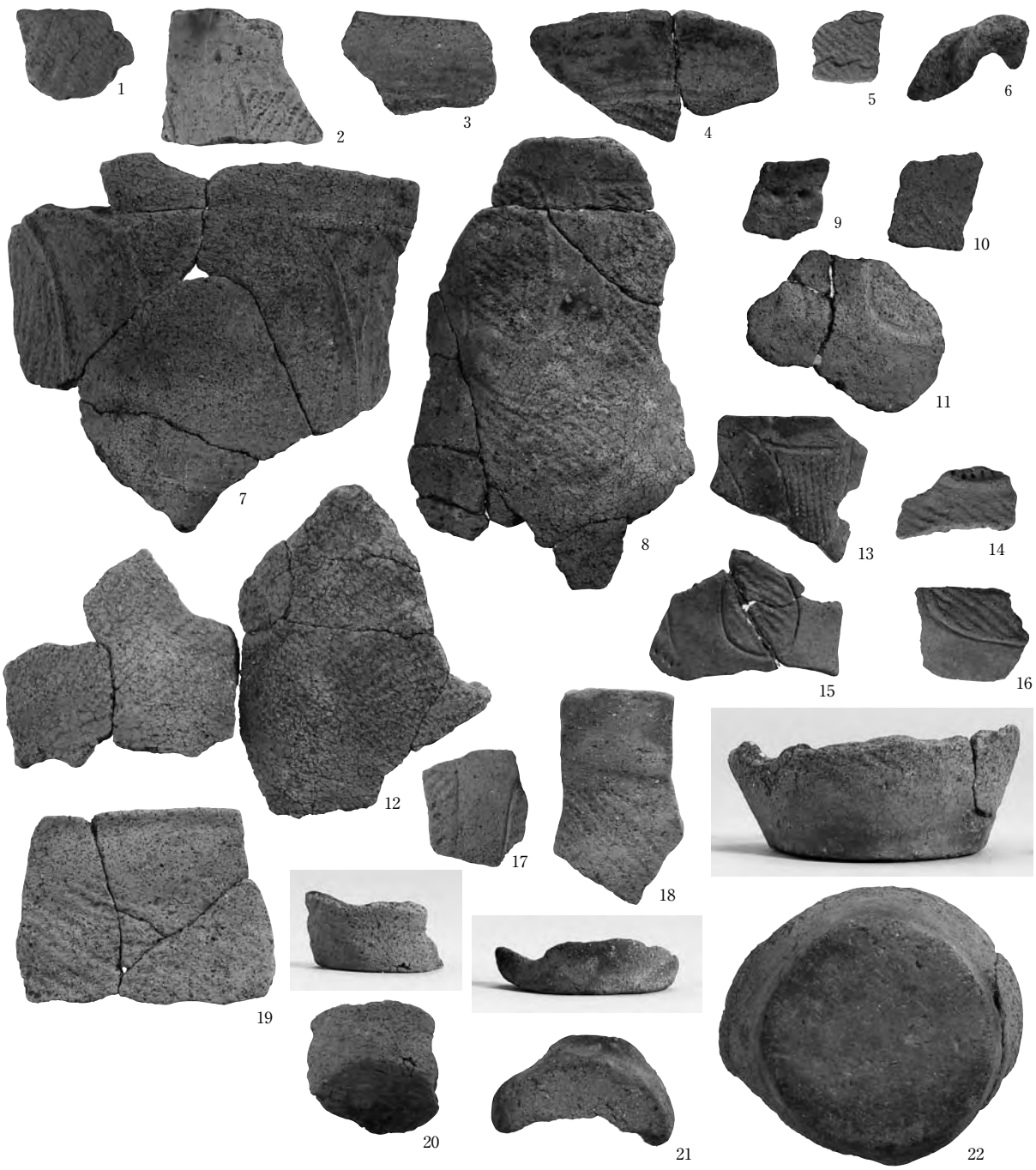
15

16

1 ：SX05出土遺物
2 ～ 3 ：SK13土壙出土遺物
4 ～ 8 ：SK20土壙出土遺物
9 ～16：遺構外の出土遺物

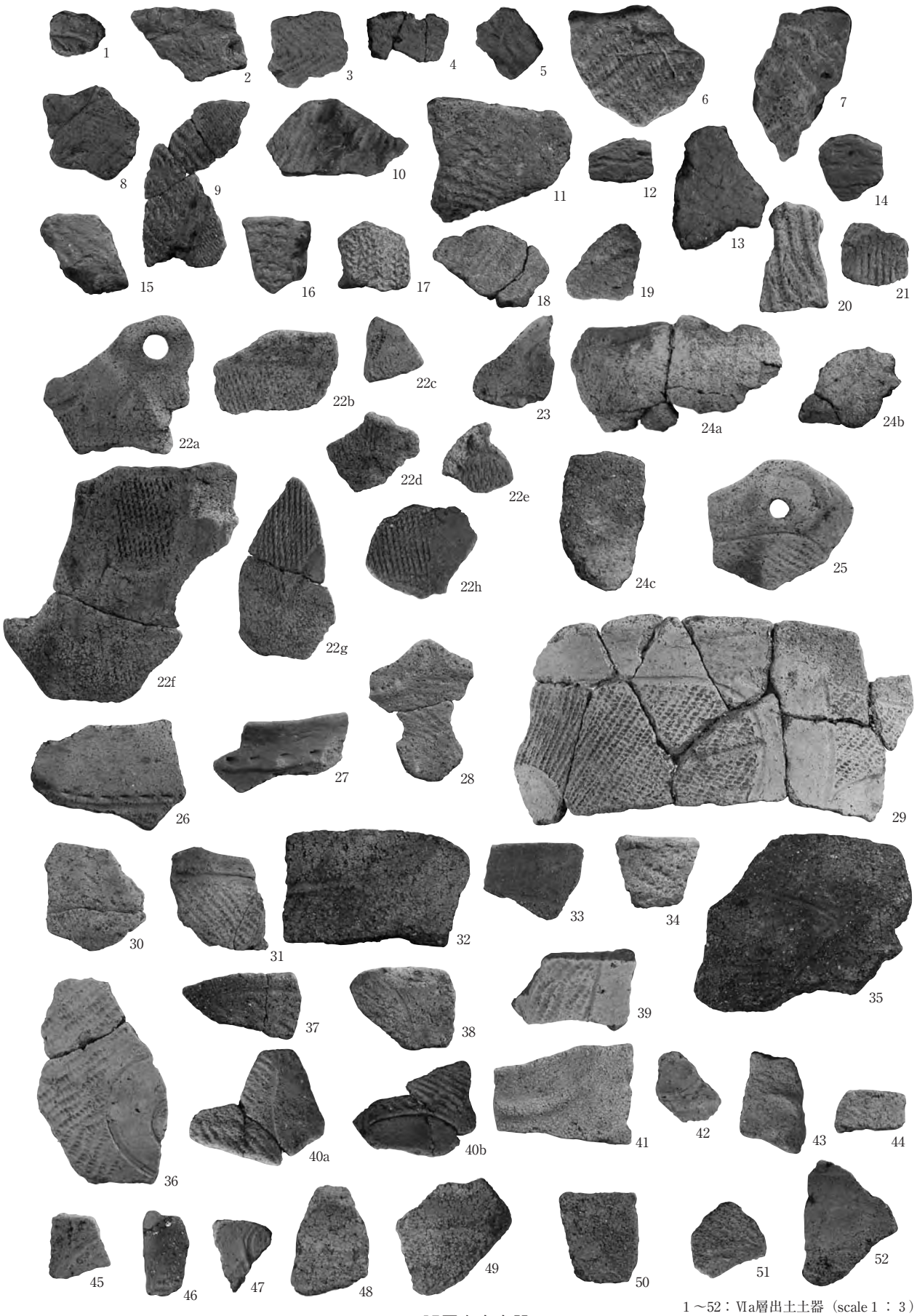
1 ～ 2 ・ 4 ・ 9 ～10：土師器坏
5 ：赤焼土器坏
3 ・ 6 ：土師器高台坏
7 ・11～12：須恵器坏
8 ：土師器鉢
13：土師器甕
14～15：須恵器甕
16：砥石

その他の遺構・遺構外出土遺物



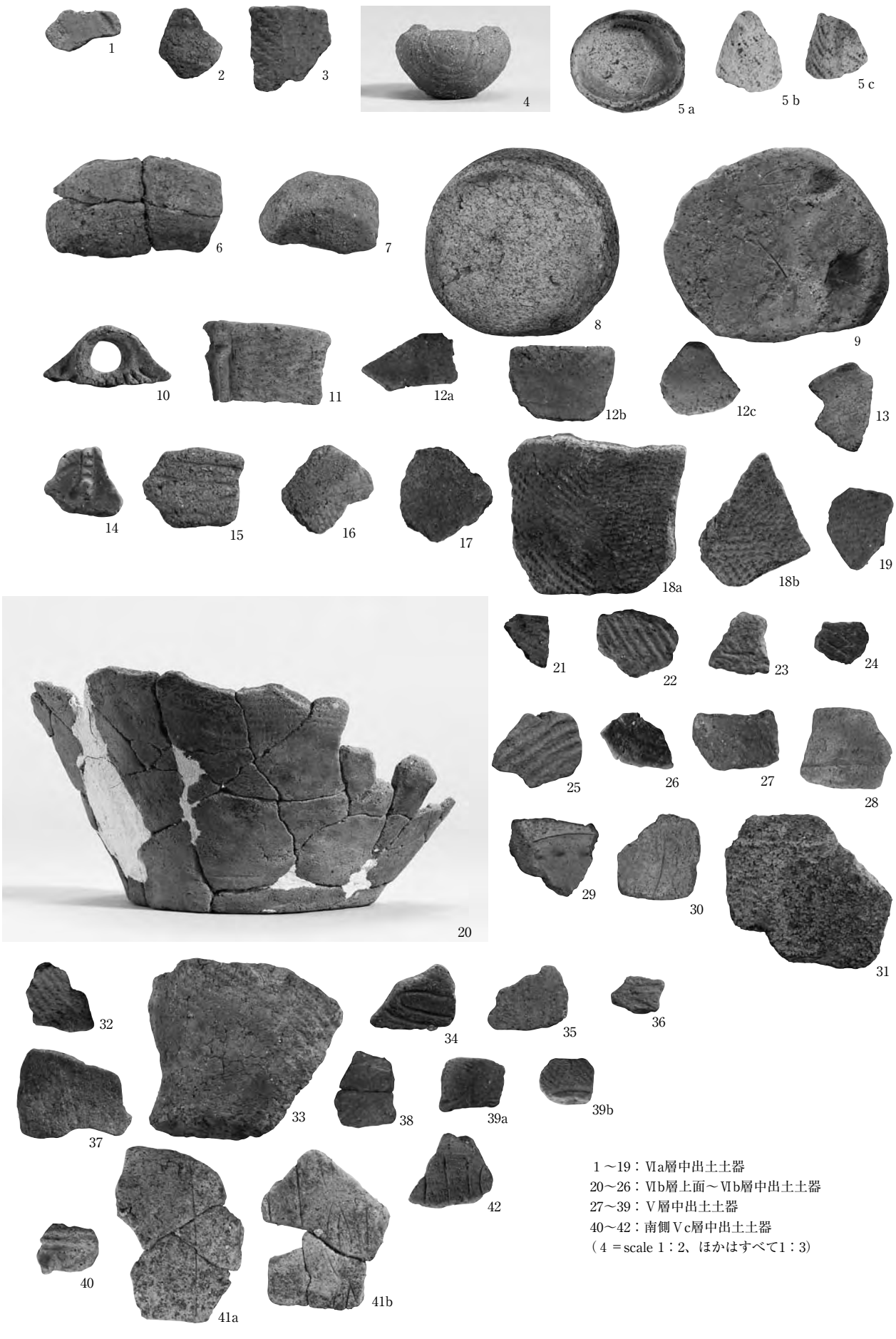
1～4：包1層中出土土器　　5～12：包2層上面～2層中出土土器　　13～22：包3層上面出土土器（scale 1：3）

SX03遺物包含層出土土器



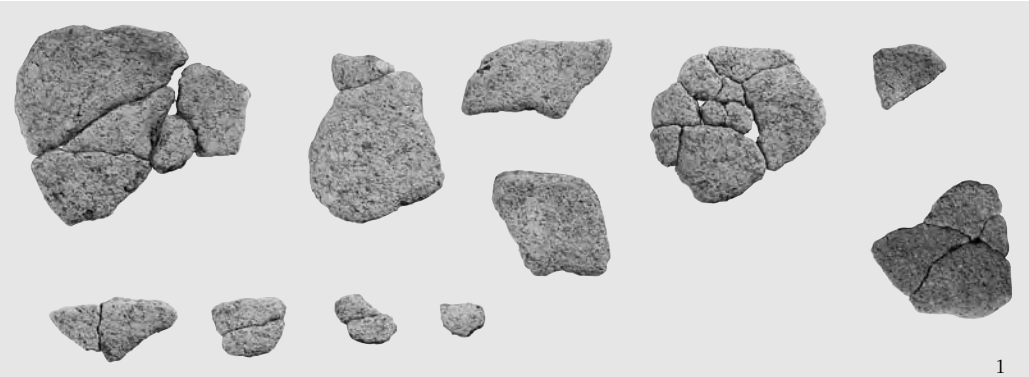
1～52：Ⅵa層出土土器（scale 1 ： 3）

Ⅵ層出土土器



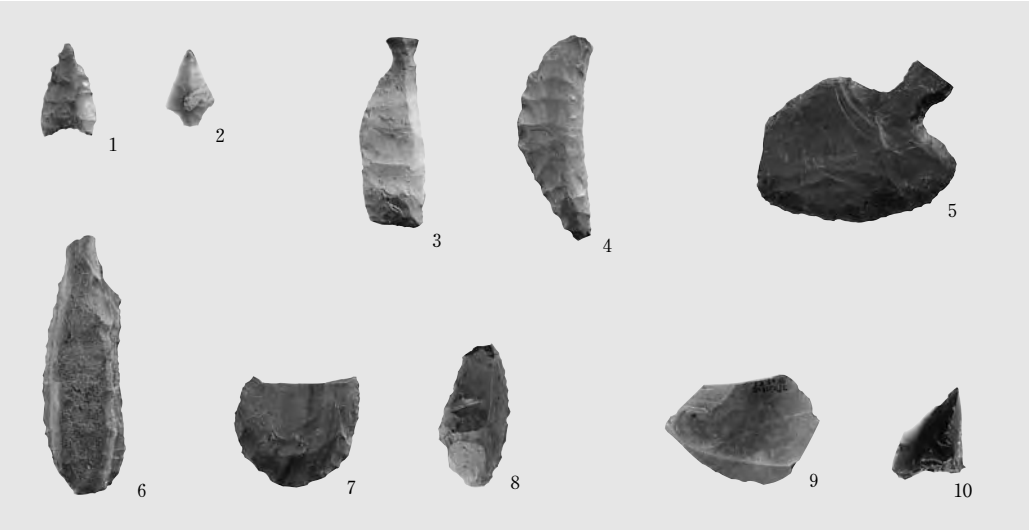
1～19：Ⅵa層中出土土器
20～26：Ⅵb層上面～Ⅵb層中出土土器
27～39：Ⅴ層中出土土器
40～42：南側Ⅴc層中出土土器
（4＝scale 1：2、ほかはすべて1：3）

Ⅵ層・Ⅴ層出土土器



1 ：SX23土器埋設遺構出土遺物

1 ：縄文土器（scale 1 ： 3 ）



1 ～10：縄文時代の石器

1 ～ 2 ：石鏃　　3 ～ 5 ：石匙
6 ～ 8 ：石篦　　9 ～10：不定形石器
（scale 1 ： 2 ）

1 ：SX24墓壙出土遺物
2 ：SD16溝跡出土遺物

1 ：古銭（六道銭）（scale 1 ： 1 ）
2 ：鉄釘　　（scale 1 ： 2 ）

土器埋設遺構・縄文時代の石器
中近世以降の遺構出土遺物

引用・参考文献

相原淳一　1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に－」『考古学雑誌』第76巻第１号 pp.1～65　日本考古学会

相原淳一　2003「桃生郡河北町桃生城跡2003」『平成15年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』宮城県考古学会

相原淳一　2004a「桃生城跡－平成15年度調査の概要－」『第30回古代城柵官衙遺跡検討会』古代城柵官衙遺跡検討会

相原淳一　2004b「すすむ三陸道建設　発掘調査から見える桃生町の歴史」平成15年度桃生町文化財講演会（町公民館）

相原淳一　2005「宮城県における複式炉－考察の前提となる諸条件を中心に－」『有限責任中間法人日本考古学協会2005年度大会　研究発表要旨』pp.24～26

吾妻俊典　2004a「多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代」『宮城考古学』第6号 pp.187～196　宮城県考古学会

吾妻俊典　2004b「2003年の考古学界の動向－古代東北」『考古学ジャーナル』516 pp.107～109　ニューサイエンス社

吾妻俊典　2004c「桃生城」『銀行倶楽部』第470号 pp.6～8　社団法人銀行協会銀行倶楽部

吾妻俊典　2004d「多賀城外郭区画施設の強化とその契機」『東北文化研究所紀要』第36号 pp.95～106　東北学院大学

阿部義平　2003「日本列島古代の城郭と都市」『国立歴史民俗博物館研究報告』第108集 pp.147～163 国立歴史民俗博物館

阿部正光・佐藤敏幸　1997「宮城県の近世墓と六道銭」『近世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会

伊東信雄　1957「古代史」『宮城県史１』宮城県史編纂委員会

氏家和典　1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

小笠原好彦　1976「東北地方における平安時代の土器についての二、三の問題」『東北考古学の諸問題』pp.407～440

尾口雅史　2003「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題」『日本律令制の展開』pp.421～456　吉川弘文館

小山正忠・竹原秀雄　1994『新版　標準土色帖　1994年度版』

海峡土器編年研究会編　2004『東北・北海道の縄文時代中期後葉の諸問題』第２回海峡土器編年研究会

加藤　孝　1961「考古学上よりみた桃生村内の古代遺跡」『桃生村誌』附録 pp.1～18

加藤道男　1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

河北町誌編纂委員会　1975『河北町誌』上巻

喜田貞吉　1922「庄内と日高見（下）」『社会史研究』第９巻第２号 pp.189～208

興野義一　1957「奈良平安朝期における遠田郡」『仙台郷土研究』第17巻第１号 pp.45～51　仙台郷土研究会

興野義一　1996「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」『画龍点睛－山内清男先生没後25年記念論集－』 pp.215～224

熊谷公男　2004a『蝦夷の地と古代国家』日本史リブレット11　山川出版社

熊谷公男　2004b『古代の蝦夷と城柵』歴史文化ライブラリー178　吉川弘文館

小井川和夫　2004「里浜貝塚風越地点出土土器の検討」『東北歴史博物館研究紀要』５ pp.17～52　東北歴史博物館

古代城柵官衙検討会編　2001『第27回古代城柵官衙検討会－特集：桃生城と伊治城』古代城柵官衙検討会資料

後藤勝彦　1956「宮城県宮戸島里浜台囲貝塚の研究」『宮城県の地理と歴史』田邊一郎先生還暦記念論文集 pp.191～202　地域社会研究会編

後藤勝彦　1957「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器編年について」『塩竈市教育委員会教育論文』第２集 pp.1～6

後藤勝彦　2004「南境貝塚調査の層位的成果Ⅰ7トレンチの場合」『宮城考古学』第６号 pp.63～110　宮城県考古学会

後藤勝彦　2005「宮城県宮城郡左道貝塚の調査－陸前地方前期縄文土器の編年学的研究（1）－」『宮城考古学』第７号 pp.89～114　宮城県考古学会

佐々木茂槙　1972『和泉沢古墳群－宮城県桃生郡河北所在－』宮城県桃生郡河北地区文化財調査報告第1集

佐藤　巧　1992　『宮城県の古建築－江戸・明治期の建造物－』宮城県文化財調査報告書第151集

佐藤敏幸　2003「律令国家形成期の陸奥国牡鹿地方（1）」『宮城考古学』第５号 pp.97～124　宮城県考古学会

佐藤敏幸　2004「律令国家形成期の陸奥国牡鹿地方（2）」『宮城考古学』第６号 pp.139～158　宮城県考古学会

白鳥良一　1974「仙台市三神峯遺跡の調査」『東北の考古・歴史論集』pp.1～54平重道先生還暦記念会編

白鳥良一　1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ pp.1～38　宮城県多賀城跡調査研究所

白鳥良一・阿部　恵・後藤秀一・佐藤和彦・古川一明・吾妻俊典・白崎恵介　2002「桃生城跡第１次～第10次発掘調査の概要」『考古学ジャーナル』494　pp.34～38　ニューサイエンス社
進藤秋輝・高野芳宏　1982「瓦塼類」『多賀城跡　政庁跡本文編』宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県教育委員会
進藤秋輝　2005「律令制支配と北上」『北上町史　通史編』pp.75～116　北上町史編さん委員会
菅原祥夫　2000「平安時代における蝦夷系土器の南下－蝦夷の移住をめぐって－」『阿部正光君追悼集』 pp.131～142　阿部正光君追悼集刊行会
須藤　隆　1969「第1号竪穴住居跡」『埋蔵文化財緊急発掘調査概報－長根貝塚－』 pp.26～36　宮城県文化財調査報告書第19集
須藤　隆　1985「東北地方における縄文集落の研究」『東北大学考古学研究報告』１　pp.1～36　東北大学文学部考古学研究室
関根達人　2005『「十腰内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器」に関する今日的理解』『葛西　勵先生還暦記念論文集　北奥の考古学』pp.161～176　葛西　勵先生還暦記念論文集刊行会
瀬峰町教育委員会　1988『下藤沢Ⅱ遺跡－宮城県北部における奈良時代の住居跡・江戸時代の墓壙と墓標の調査－』
平　重道・志間泰治・白鳥良一・太田昭夫　1974「豊里町長根浦貝塚発掘調査報告」『豊里町史』下巻 pp.457～488　豊里町史編纂委員会
高橋誠明　2005「各都道府県の動向　宮城県」『日本考古学年報』56 pp.149～154　日本考古学協会
千葉宗久ほか　1999『地図で見る桃生町の歴史』くつわの会
築館町教育委員会　2005『鰻沢遺跡』築館町文化財調査報告書第18集
辻　秀人　2006「北上川流域の古代社会－蝦夷の土器・蝦夷の墓－」東北学院大学オープンリサーチセンター公開集中講座
東北歴史資料館　1989『宮城県の貝塚』東北歴史資料館資料集25
永井久美男編　1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫埋蔵銭調査会
芳賀良光　1968「宮城県宮戸島貝塚梨木囲遺跡の研究」『仙台湾周辺の考古学的研究』 pp.45～53　宮城教育大学歴史研究会
迫町教育委員会　2005『坂戸遺跡』迫町文化財調査報告書第4集
羽柴直人　1997「岩手県平泉町における近世掘立柱民家について－泉屋遺跡、志羅山遺跡の事例を中心に－」『紀要ⅩⅦ』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
早瀬亮介　2005「阿武隈川下流域における縄文時代前期初頭の土器型式」『歴史』第104輯 pp.82～107
藤沼邦彦・神宮寺千恵　1992「宮城県における一括出土の渡来銭－女川町御前浜出土の古銭を中心にして－」『研究紀要』第18巻　東北歴史資料館
町田　洋・新井房夫　2003『新編アトラス－日本列島とその周辺』東京大学出版会
宮城県多賀城跡調査研究所　1975『桃生城跡』Ⅰ　多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第1冊
宮城県多賀城跡調査研究所　1976『桃生城跡』Ⅱ　多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第2冊
宮城県多賀城跡調査研究所　1995『宮城県多賀城跡調査研究所年報1994　多賀城跡』
宮城県多賀城跡調査研究所　1995『桃生城跡』Ⅲ　多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第20冊
宮城県多賀城跡調査研究所　1996『桃生城跡』Ⅳ　多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第21冊
宮城県多賀城跡調査研究所　1997『桃生城跡』Ⅴ　多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第22冊
宮城県多賀城跡調査研究所　1998『桃生城跡』Ⅵ　多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第23冊
宮城県多賀城跡調査研究所　1999『桃生城跡』Ⅶ　多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第24冊
宮城県多賀城跡調査研究所　2000『桃生城跡』Ⅷ　多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第25冊
宮城県多賀城跡調査研究所　2001『桃生城跡』Ⅸ　多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第26冊
宮城県多賀城跡調査研究所　2002『桃生城跡』Ⅹ　多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第27冊
宮城県多賀城跡調査研究所　2003『亀岡遺跡』Ⅰ　多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第28冊
宮城県多賀城跡調査研究所　2004『亀岡遺跡』Ⅱ　多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第29冊
宮城県教育委員会　1970『日の出山窯跡群－埋蔵文化財調査概報－』宮城県文化財調査報告書第22集
宮城県教育委員会　1988『大梁川・小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第126集

宮城県教育委員会　2002『沢田山西遺跡－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ－』宮城県文化財調査報告書第189集
宮城県教育委員会　2003『新田東遺跡－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ－』宮城県文化財調査報告書第191集
宮城県教育委員会　2004『沢田山西遺跡ほか－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅲ－』宮城県文化財調査報告書第196集
宮城県教育委員会　2004「桃生城跡」『宮城考古学』第6号 p.337　宮城県考古学会
宮城県教育委員会　2005『角山遺跡－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅵ－』宮城県文化財調査報告書第200集
宮城県教育委員会　2005「袖沢古墳群」『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第202集
村田晃一　2003「奈良時代後半から平安時代初期の城柵」第23回蝦夷研究会資料　岩手大学
村田晃一　2004「三重構造城柵論－伊治城の基本的な整理を中心として　移民の時代2－」『宮城考古学』第6号 pp.159～186　宮城県考古学会
村田晃一　2005「7世紀における陸奥北辺の様相－宮城県域を中心として－」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』pp.351～367　日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会
松本秀明　1996「石巻の地形環境」『石巻の歴史』第1巻　pp.7～13　石巻市編さん委員会
桃生郡河北地区教育委員会　2003「古代陸奥国、海道の拠点　桃生城跡～東北38年戦争はじまりの地～」
桃生郡教育会　1923『桃生郡誌』全　桃生郡役所
桃生町史編纂委員会　1988『桃生町史』第2巻　資料編
桃生町史編纂委員会　1990『桃生町史』第3巻　自然・民俗編
桃生町史編纂委員会　1996『桃生町史』第5巻　通史編
桃生村誌編纂委員会　1961『桃生村誌』宮城県桃生町役場
山口博之　1999「墓壙から出土した中世の東北・北海道地方で葬送の時に使用したと思われる銭は」『東北地方の中世出土貨幣－東北中世考古学会第5回研究集会資料集－』pp.598～614　東北中世考古学会
山内清男　1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号 pp.29～32　先史考古学会
山内清男　1961『日本先史土器の縄紋』（京都大学提出学位請求論文－没後、1979年に夫人により先史考古学会から出版）
吉田康之　2004「宮城県室浜貝塚出土資料の研究－角田コレクション紹介3－」『名古屋大学博物館報告』第20号 pp.55～69　名古屋大学博物館

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ものうじょうあと　ほそやＢいせき
書　　名	桃生城跡　細谷Ｂ遺跡
副 書 名	三陸縦貫自動車道建設関連調査報告書Ⅴ
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第205集
編 著 者 名	相原淳一
編 集 機 関	宮城県教育委員会
所　在　地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町三丁目８－１　TEL 022－211－3682
発 行 年 月 日	西暦2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 日本測地系（改正前）	東経 日本測地系（改正前）	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
桃生城跡（ものうじょうあと）	宮城県（みやぎけん） 石巻市（いしのまきし） 飯野字（いいのあざ） 碓畑（かるすはた）	042021	66004	38° 31′ 58″	141° 16′ 58″	確認調査 2002.12.19･25 事前調査 2003.4.10～6.6	約1,500	三陸縦貫自動車道建設に伴う事前調査
細谷Ｂ遺跡（ほそやいせき）	宮城県（みやぎけん） 石巻市（いしのまきし） 桃生町（ものうちょう） 太田字細谷（おおたあざほそや）	042021	70028	38° 32′ 44″	141° 16′ 30″	確認調査 2003.3.17～19 事前調査 2003.11.12～12.11	約900	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桃生城跡	城柵	古代	溝跡３条・土塁跡１条・土壙１基・竪穴住居跡３軒	土師器・須恵器	今回発見された遺構群は、桃生城跡全体の規模と構造、変遷の解明に向けての端緒となる重要なものである。
細谷Ｂ遺跡	集落跡	縄文時代・古代・中近世以降	土器埋設遺構１基・遺物包含層１箇所・竪穴住居跡６軒・墓壙１基・掘立柱建物跡11棟以上・柱列跡１条	縄文土器・石器（前期・中期・後期）、土師器・須恵器・転用硯・赤焼土器・瓦・鉄鏃・砥石・磨石、鉄釘・古銭（「太平通寶」を含む六道銭）	SI02竪穴住居跡の暗渠に用いられた瓦は桃生城跡、宗全山遺跡出土のものと同様のものである。

宮城県文化財調査報告書第205集

桃生城跡　細谷B遺跡

―三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅴ－

平成18年３月25日印刷
平成18年３月31日発行

発　行　宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号

印　刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24－24